算ノ範圍内ニ於テ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入金ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

○朝鮮事業公債法

●法律第十八號　明治四十四年三月二十三日

改正　大正五年第三五號、六年第一二號、七年第一〇號、八年第一六號、九年第四四號、一〇年第二七號、一一年第二號、一二年第一四號

朝鮮ニ於ケル事業費支辨ノ爲政府ハ五十五年以内ノ期限ヲ以テ公債ヲ發行シ又ハ三年以内ノ期限ヲ以テ借入金ヲ爲スコトヲ得

朝鮮ニ於ケル煙草專賣制度ノ實施ニ要スル交付金トシテ交付スル爲政府ハ公債ヲ發行スルコトヲ得

前二項ノ公債及借入金ノ額ハ通シテ三億九千三百七十萬圓以内トス

附　則

本法ハ明治四十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣事業公債法

明治三二年第七五號　改正　明治三四年第二一號、三六年第八號、三七年第一五號、四一年第一四號、大正八年第三號

●法律第十三號　大正十一年三月二十八日

改正　大正一二年第一五號

第一條　臺灣ニ於ケル事業費又ハ事業費補助ニ要スル經費ヲ支辨シ且酒專賣制度ノ實施又ハ私設鐵道買收ニ要スル交付金トシテ交付スル爲政府ハ從前募集シタルモノヲ通シテ一億三千三百八十萬圓ヲ限リ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入ヲ爲スコトヲ得

附　則

本法ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○關東州事業公債法

●法律第十五號　大正十一年三月二十八日

第一條　關東州ニ於ケル事業費支辨ノ爲政府ハ三百十萬圓ヲ限リ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入ヲ爲スコトヲ得

附　則

本法ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○樺太事業公債法

●法律第二十一號　大正七年三月三十日

改正　大正九年第四六號、一〇年第二九號、一一年第一四號、一二年第一六號

第一條　樺太ニ於ケル事業費支辨ノ爲政府ハ三千三百五十萬圓ヲ限リ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入金ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

附　則

本法ハ大正七年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臨時國庫證券法

●法律第七號　大正六年七月二十一日

改正　大正七年第一八號、八年第一八號、一〇年第四五號

第一條　政府ハ輸出爲替資金ノ疏通ヲ圖リ又ハ【聯合國】ニ對スル輸出軍需品代金ノ決濟ヲ便ニシ其ノ他【聯合國】ノ財政ヲ援助スル爲運用資金ノ必要アリト認ムルトキハ五年内ノ期限ヲ以テ臨時國庫證券ヲ發行スルコトヲ得其ノ借換ノ爲必要アルトキ亦同シ

第二條　臨時國庫證券ノ最高發行額ハ八億圓トス但シ借換ノ爲發行スルモノハ此ノ制限ヲ超過スルコトヲ得

第三條　（削除）

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（大正十年四月八日法律第四十五號）

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（大正十一年三月十三日勅令第三十二號ヲ以テ同年四月一日ヨリ施行）

○簡易生命保險積立金運用規則

●勅令第六十八號　大正六年七月十七日

改正　大正九年第四六九號

第一條　簡易生命保險特別會計法ニ依ル積立金ハ遞信大臣之ヲ管理スヘシ

第二條　積立金ハ簡易生命保險法第二十六條ノ規定ニ依リ保險契約者ニ貸付ヲ爲ス場合ヲ除クノ外簡易生命保險積立金運用委員會ニ諮問シ公共ノ利益ノ爲ニ之ヲ運用スヘシ

第三條　所管大臣ハ毎年度積立金ノ運用ニ關シ必要ナル計畫ヲ定メ豫メ簡易生命保險積立金運用委員會ニ付議スヘシ其ノ豫定ノ計畫ヲ變更スルトキ亦同シ

第四條　積立金ニシテ放資ニ至ラサルモノハ一時之ヲ大藏省預金部又ハ銀行ニ預入シ其ノ他有利且確實ナル有價證券ヲ以テ之ヲ保有スルコトヲ得

第五條　所管大臣ハ部下ノ官吏ニ命シテ積立金ノ出納ヲ執行セシムルコトヲ得

第六條　積立金ノ出納ニ關スル手續ハ所管大臣大藏大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第七條　簡易生命保險積立金運用委員會ハ遞信大臣ノ監督ニ屬シ會長一人委員若干人ヲ以テ之ヲ組織ス

第八條　會長ハ遞信大臣ヲ以テ之ニ充ツ

會長ハ會務ヲ總理ス

委員ハ遞信大臣ノ奏請ニ依リ各廳高等官及學識經驗アル者ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ス

第九條　簡易生命保險積立金運用委員會ニ幹事ヲ置ク遞信大臣ノ奏請ニ依リ遞信部內ノ高等官ノ中ヨリ內閣ニ於テ之ヲ命ス

幹事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ庶務ヲ整理ス

第十條　簡易生命保險積立金運用委員會ニ書記ヲ置ク遞信部內ノ判任官ノ中ヨリ遞信大臣之ヲ命ス

書記ハ上司ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

○貨幣法

●法律第十六號　明治三十年三月二十九日

改正　明治三九年第二六號、四〇年第六號、大正五年第八號、七年第四二號、九年第五號、一二年第七三號

第一條　貨幣ノ製造及發行ノ權ハ政府ニ屬ス

第二條　純金ノ量目二分ヲ以テ價額ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス

第三條　貨幣ノ種類ハ左ノ九種トス

金貨幣

二十圓

十圓

五圓

銀貨幣

五十錢

二十錢

白銅貨幣

十錢

五錢

青銅貨幣

一錢

五厘

第四條　貨幣ノ算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用キ一圓以下ハ一圓ノ百分ノ一ヲ錢ト稱シ錢ノ十分ノ一ヲ厘ト稱ス

第五條　貨幣ノ品位ハ左ノ如シ

一　金貨幣　純金九百分參和銅一百分

二　銀貨幣　純銀七百二十分參和銅二百八十分

三　白銅貨幣「ニツケル」二百五十分參和銅七百五十分

四　青銅貨幣　銅九百五十分錫四十分亞鉛十分

第六條　貨幣ノ量目ハ左ノ如シ

一　二十圓金貨幣　四匁四分四厘四毛四

二　十圓金貨幣　二匁二分二厘二毛二

三　五圓金貨幣　一匁一分一厘一毛一

四　五十錢銀貨幣　一匁三分二厘

五　二十錢銀貨幣　五分二厘八毛

六　十錢白銅貨幣　一匁

七　五錢白銅貨幣　七分

八　一錢青銅貨幣　一匁

九　五厘青銅貨幣　五分六厘

第七條　金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ス銀貨幣ハ十圓マテ白銅貨幣ハ五圓マテ青銅貨幣ハ一圓マテヲ限リ法貨トシテ通用ス

第八條　貨幣ノ形式ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條　金銀貨幣純分ノ公差ハ金貨幣ハ一千分ノ一銀貨幣ハ一千分ノ三トス

第十條　金銀貨幣量目ノ公差ハ左ノ如シ

一　金貨幣二十圓ハ毎片八毛六四一千枚毎ニ八分三厘十圓ハ毎片六毛零五一千枚毎ニ六分二厘五圓ハ毎片四毛三二一千枚毎ニ四分一厘トス

二　銀貨幣五十錢ハ毎片一厘七毛一一千枚毎ニ一匁零分六厘六毛六二十錢ハ毎片一厘零毛七一千枚毎ニ五分三厘三毛三トス

第十一條　金貨幣ノ通用最輕量目ハ二十圓金貨幣四匁四分二厘十圓金貨幣二匁二分一厘五圓金貨幣一匁一分零厘五毛トス

第十二條　金貨幣ニシテ磨損ノ爲通用最輕量目ヲ下ルモノ及銀貨幣白銅貨幣又ハ青銅貨幣ニシテ著シク磨損シタルモノ其ノ他流通不便ノ貨幣ハ其ノ額面價格ヲ以テ無手數料ニテ政府ニ於テ之ヲ引換フヘシ

第十三條　貨幣ニシテ模樣ノ認識シ難キモノ又ハ私ニ極印ヲ爲シ其ノ他故意ニ毀傷セリト認ムルモノハ貨幣タルノ效用ナキモノトス

第十四條　金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ

附　則

第十五條　從來發行ノ金貨幣ハ此ノ法律ニ依リ發行スル金貨幣ノ倍位ニ通用スヘシ

第十六條　【從來發行ノ一圓銀貨幣ハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ政府ノ都合ニ依リ漸次之ヲ引換フヘシ】

【前項引換ノ結了マテハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ無制限ニ法貨トシテ其ノ通用ヲ許シ通用禁止ノ場合ニ於テハ六箇月以前ニ勅令ヲ以テ之ヲ公布スヘシ通用禁止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年內ニ】引換ヲ請求セサルトキハ爾後地金トシテ取扱フヘシ

第十七條　從來發行ノ五錢銀貨幣及銅貨幣ハ從前ノ通リ通用スヘシ

第十八條　此ノ法律發布以後ハ一圓銀貨幣ノ製造ヲ廢ス但シ右期日以前ニ政府ニ輸納シタル銀地金ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條　此ノ法律ニ牴觸スル從前ノ法令ハ總テ之ヲ廢止ス

第二十條　此ノ法律ハ第十八條ヲ除ク外明治三十年十月一日ヨリ施行ス

（中略）

附　則（大正十一年四月二十八日法律第七十三號）

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○小額紙幣發行ニ關スル件

（參照　本件ハ憲法第八條ニ依リタルモノニシテ大正七年三月帝國議會承諾濟）

●勅令第二百二號　大正六年十月三十日

第一條　政府ハ補助銀貨ニ代用スル爲臨時必要ニ隨ヒ五十錢【二十錢及十錢】ノ小額紙幣ヲ發行スルコトヲ得

第二條　政府ハ小額紙幣發行高ニ對シ同額ノ通貨ヲ以テ其ノ引換準備ニ充テ日本銀行ヲシテ之ヲ保管セシム

第三條　小額紙幣ハ十圓迄ヲ限リ法貨トシテ通用ス

第四條　小額紙幣ハ通貨ヲ以テ之ヲ引換フ

小額紙幣ハ日本銀行本支店ニ於テ之ヲ引換フヘシ但シ五圓ニ滿タサル端數ハ引換通貨ノ到達スヘキ時間引換ヲ延期スルコトヲ得

第五條　小額紙幣ノ形式ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條　小額紙幣ノ發行、銷却及損傷紙幣ノ引換ニ關スル規定ハ主務大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○小額紙幣發行期限ニ關スル法律

●法律第六號　大正九年七月二十七日

大正六年勅令第二百二號ニ依ル小額紙幣ハ當分ノ內之ヲ發行スルコトヲ得但シ二十錢及十錢ノ小額紙幣ハ損傷紙幣引換ノ爲ニスル場合ヲ除クノ外大正十年四月一日以後之ヲ發行セス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○金貨幣又ハ金地金輸出許可方

●大藏省令第二十八號　大正六年九月十二日

金貨幣又ハ金地金ヲ輸出セムトスル者ハ大藏大臣ノ許可ヲ受クヘシ但シ外國ニ旅行スル者金貨幣百圓未滿ヲ携帶スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十二章　參考諸法規

○銀貨幣又ハ銀地金輸出許可方

●大藏省令第二十六號　大正六年九月六日

銀貨幣又ハ銀地金ヲ輸出セムトスル者ハ大藏大臣ノ許可ヲ受クヘシ但シ外國ニ旅行スル者銀貨幣五十圓未滿ヲ携帶スル場合ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ規定ニ違反スル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

地金トシテ販賣シ又ハ使用スル目的ヲ以テ金貨幣ヲ蒐集、鑄潰又ハ毀傷シタル者ノ罪亦前項ニ同シ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

前項ノ規定ニ違反スル者ハ三月以下ノ懲役又ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

地金トシテ販賣シ又ハ使用スル目的ヲ以テ銀貨幣ヲ蒐集、鑄潰又ハ毀傷シタル者ノ罪亦前項ニ同シ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○産業組合中央金庫法

●法律第四十二號　大正十二年四月六日

第一章　總　則

第一條　産業組合中央金庫ハ法人トシ其ノ主タル事務所ヲ東京市ニ置ク

産業組合中央金庫ノ組織ハ有限責任トス

第二條　産業組合中央金庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケ從タル事務所ヲ設置スルコトヲ得

主務大臣ニ於テ從タル事務所ヲ必要ナリトスルトキハ産業組合中央金庫ニ命シテ之ヲ設置セシムルコトヲ得

産業組合聯合會ハ産業組合中央金庫ノ業務ヲ代理スルコトヲ得

第三條　産業組合中央金庫ノ存立期間ハ設立許可ノ日ヨリ五十箇年トス但シ政府ノ認可ヲ經テ存立期間ヲ延長スルコトヲ得

第四條　産業組合中央金庫ノ資本金ハ三千萬圓トシ之ヲ三十萬口ニ分チ一口ノ金額ヲ百圓トス

産業組合中央金庫ハ資本金全額ノ拂込前ト雖出資者總會ノ決議ニ依リ政府ノ認可ヲ經テ資本金ヲ增加スルコトヲ得

第五條　政府、産業組合聯合會又ハ産業組合ノ外産業組合中央金庫ノ出資者タルコトヲ得ス

産業組合聯合會及産業組合ノ有スヘキ出資口數ハ二百口ヲ超ユルコトヲ得ス

第六條　政府ハ千五百萬圓ヲ限リ産業組合中央金庫ニ出資スヘシ政府ハ其ノ出資額ニ對シ設立當初ニ於テ五百萬圓ヲ拂込ミ爾後毎年五百萬圓宛拂込ムモノトス政府以外ノ出資者ハ其ノ出資ニ對シ設立當初ニ於テ出資額ノ五分ノ一ヲ拂込ミ爾後十箇年間ニ其ノ殘餘ヲ拂込ムモノトス

政府ノ産業組合中央金庫ニ對シテ所有スヘキ持分ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條　産業組合法中産業組合ニ關スル規定ハ本法ニ別段ノ規定アルモノヲ除クノ外産業組合中央金庫ニ付之ヲ準用ス

第八條　産業組合中央金庫ニハ所得稅及《營業稅》ヲ課セス

登錄稅法及印紙稅法中産業組合聯合會ニ關スル規定ハ産業組合中央金庫ニ付之ヲ準用ス

第二章　役　員

第九條　産業組合中央金庫ニ理事長、副理事長各一人理事、監事各三人以上ヲ置ク

第十條　理事長ハ産業組合中央金庫ヲ代表シテ其ノ事務ヲ總理ス

副理事長ハ理事長事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ理事長缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ

副理事長及理事ハ理事長ヲ補助シ定款ノ定ムル所ニ從ヒ産業組合中央金庫ノ業務ヲ掌理ス

監事ハ産業組合中央金庫ノ業務ヲ監査ス

第十一條　理事長、副理事長、理事及監事ハ主務大臣之ヲ任命ス

理事長、副理事長及理事ノ任期ハ五箇年監事ノ任期ハ三箇年トス但シ其ノ任期滿限ノ後再任ヲ命スルコトヲ得

第十二條　産業組合中央金庫ニ評議員二十名以內ヲ置キ主務大臣之ヲ任命ス但シ其ノ半數以上ハ産業組合關係者中ヨリ之ヲ選任スルコトヲ要ス

評議員ハ名譽職トシ定款ノ定ムル所ニ依リ業務經營ニ關スル重要ナル事項ニ就キ理事長ノ諮問ニ應スルモノトス

評議員ノ任期ハ三箇年トス

第三章　業　務

第十三條　産業組合中央金庫ハ左ノ業務ヲ營ムモノトス

一　所屬産業組合聯合會又ハ所屬産業組合ニ對シ擔保ヲ徵セシテ五箇年以內ノ定期償還貸付ヲ爲スコト

二　所屬産業組合聯合會又ハ所屬産業組合ニ對シ手形ノ割引又ハ當座預金貸越ヲ爲スコト

三　所屬産業組合聯合會又ハ所屬産業組合ノ爲ニ爲替業務ヲ爲スコト

四　産業組合聯合會、産業組合、公共團體其ノ他營利ヲ目的トセサル法人ヨリ預リ金ヲ爲スコト

第十四條　産業組合中央金庫ハ必要アリト認メタル場合ニ於テハ擔保ヲ徵シテ前條第一號及第二號ノ業務ヲ爲スコトヲ得

第十五條　産業組合中央金庫ハ左ノ方法ニ依ルノ外業務上ノ餘裕金ヲ運用スルコトヲ得ス

一　國債又ハ公債ノ買入、大藏省預金部若ハ主務大臣ノ認可ヲ受ケタル銀行ヘノ預金又ハ郵便預金ト爲スコト

二　産業組合聯合會又ハ産業組合ニ對シ短期貸付ヲ爲スコト

第十六條　産業組合中央金庫ハ本法ニ記載セサル業務ヲ營ムコトヲ得ス

第四章　産業債券

第十七條　産業組合中央金庫ハ拂込金額ノ十倍ヲ限リ産業債券ヲ發行スルコトヲ得但シ貸付金現在高割引手形現在高及其ノ所有ニ係ル有價證券現在高ヲ超過スルコトヲ得ス

産業債券ノ發行ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十八條　産業債券ハ券面金額五拾圓以上トシ無記名利札附トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ依リ記名ト爲スコトヲ得

第十九條　産業組合中央金庫ハ産業債券借換ノ爲一時第十七條ノ制限ニ依ラス低利ノ産業債券ヲ發行スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ産業債券ヲ發行シタルトキハ發行後一箇月以內ニ抽籤ヲ以テ其ノ發行券面金額ニ相當スル舊産

業債券ヲ償還スヘシ

第二十條　産業組合中央金庫ニ於テ産業債券ヲ發行セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十一條　産業債券ノ消滅時效ハ元金ニ在リテハ十五箇年、利子ニ在リテハ五箇年ヲ以テ完成ス

第二十二條　産業債券ノ模造ニ關シテハ通貨及證券模造取締法ヲ準用ス

第五章　計　算

第二十三條　産業組合中央金庫ノ事業年度ハ一箇年トス

第二十四條　産業組合中央金庫ハ每事業年度ニ於テ準備金トシテ剩餘金ノ十分ノ一以上ヲ積立ツヘシ

第六章　監督及補助

第二十五條　主務大臣ハ産業組合中央金庫ノ業務ヲ監督ス

本法中主務大臣トアルハ農商務大臣及大藏大臣トス

第二十六條　産業組合中央金庫ハ其ノ定款ヲ變更セムトスルトキハ主務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第二十七條　産業組合中央金庫ハ主務大臣ノ認可ヲ受クルニ非サレハ剩餘金ノ處分ヲ爲スコトヲ得ス

第二十八條　産業組合中央金庫ハ主務大臣ノ命令ニ從ヒ其ノ業務ニ關スル諸般ノ狀況及計算報告書ヲ差出スヘシ

第二十九條　主務大臣ハ必要アリト認ムルトキハ産業組合中央金庫ノ貸付又ハ割引ノ金額若ハ方法ヲ制限スルコトヲ得

第三十條　産業組合中央金庫ノ貸付金利子ノ最高步合ハ每事業年度ノ初ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ムヘシ其ノ事業年度內ニ於テ之ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

第三十一條　主務大臣ハ特ニ産業組合中央金庫監理官ヲ置キ産業組合中央金庫ノ業務ヲ監視セシム

第三十二條　産業組合中央金庫監理官ハ何時ニテモ産業組合中央金庫ノ業務及財産ノ狀況ヲ檢査スルコトヲ得

産業組合中央金庫監理官ハ監視上必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ産業組合中央金庫ニ命シテ業務上諸般ノ計算及狀況ヲ報告セシムルコトヲ得

産業組合中央金庫監理官ハ出資者總會其ノ他諸般ノ會議ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得但シ議決ノ數ニ加ハルコトヲ得ス

第三十三條　産業組合中央金庫ハ創立初期ヨリ十五箇年間政府ノ出資ニ對シ剩餘金ノ配當ヲ爲スコトヲ要セス

第七章　罰　則

第三十四條　左ノ場合ニ於テハ産業組合中央金庫ノ理事長、副理事長、理事又ハ監事ヲ百圓以上千圓以下ノ科料ニ處ス

一　本法ニ於テ主務大臣ノ認可ヲ受クヘキ場合ニ其ノ認可ヲ受ケサルトキ

二　主務大臣ノ命令ニ反シタルトキ

三　第十五條ノ規定ニ反シ業務上ノ餘裕金ヲ使用シタルトキ

四　第十六條ノ規定ニ反シ本法ニ規定セサル業務ヲ營ミタルトキ

五　第十七條第一項及第十九條第二項ノ規定ニ反シタルトキ

第三十五條　非訟事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ハ前條ノ過料ニ之ヲ準用ス

附　則

第三十六條　主務大臣ハ設立委員ヲ置キ産業組合中央金庫ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第三十七條　設立委員ハ定款ヲ作リ主務大臣ノ認可ヲ受ケタル後出資者ヲ募集ス

第三十八條　設立委員ハ出資者ノ募集ヲ終リタルトキハ出資申立書ヲ主務大臣ニ提出シ産業組合中央金庫設立ノ許可ヲ稟請スヘシ

前項ノ許可ヲ受ケタルトキハ設立委員ハ遲滯ナク出資第一回ノ拂込ヲ爲サシムルコトヲ要ス

第三十九條　創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ産業組合中央金庫理事長ニ引渡スヘシ

第四十條　産業組合中央金庫設立ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

○日本興業銀行外二銀行ノ對支借款關係債務ノ整理ニ關スル法律

●法律第四十一號　大正十五年三月三十日

第一條　政府ハ日本興業銀行、臺灣銀行及朝鮮銀行（以下三銀行ト稱ス）ヲシテ左ノ各號ノ借款、前貸及借款ニ關シ其ノ負擔スル債務ノ整理ヲ爲サシムル爲三銀行ニ對シ本法ノ定ムル所ニ依リ國債證券及現金ヲ交付ス

一　三銀行ノ中華民國政府ニ對スル大正七年六月十八日契約ノ吉會鐵道借款前貸一千萬圓、大正七年九月二十八日契約ノ滿蒙四鐵道借款前貸二千萬圓及山東二鐵道借款前貸二千萬圓

二　中華匯業銀行ノ中華民國政府ニ對スル大正七年四月三十日契約ノ有線電信借款二千萬圓及大正七年八月二日契約ノ黑吉兩省金鑛森林借款三千萬圓ノ資金調達ノ爲ニ爲シタル三銀行ノ同行ニ對スル借款

第二條　本法ニ依リ三銀行ノ整理スヘキ債務及其ノ金額ハ左ノ各號ニ定ムルモノトス

一　第三回政府保證興業債券二千萬圓、第四回政府保證興業債券三千萬弗、第五回政府保證興業債券米貨二千二百萬弗及第八十一回興業債券四百六十七萬圓ノ元利支拂ニ必要ナル金額

二　前號ノ外第一條ノ借款前貸及借款ニ關シ三銀行ノ負擔シタル金額四千萬二千五百三十五圓

第三條　政府ハ三銀行カ第四回政府保證興券債券及第八十一回興業債券ヲ直ニ買入償還スル爲必要ナル金額ニ相當スル價格ノ五分利附國債證券ヲ三銀行ニ對シ其ノ負擔額ニ應シ交付ス

第四條　政府ハ三銀行カ第三回及第五回政府保證興業債券ヲ其ノ償還期ニ於テ償還スル爲必要ナル金額ニ相當スル價額ノ五分利附國債證券ヲ三銀行ニ對シ其ノ負擔額ニ應シ交付ス

前項ノ規定ニ依リ國債證券ヲ交付スル迄政府ハ前項ノ興業債券ノ利子支拂ニ必要ナル金額ヲ其ノ支拂期ニ於テ三銀行ニ對シ其ノ負擔額ニ應シ現金ヲ以テ交付ス

第五條　政府ハ三銀行カ第二條第二號ニ規定スル債務ヲ直ニ整理スル爲必要ナル價額ノ五分利附國債證券ヲ三銀行ニ對シ其ノ負擔額ニ應シ交付ス

第六條　政府ハ本法ニ依リ三銀行ニ交付スル爲一億四千四百萬圓ヲ限度トシ公債ヲ發行スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前項ノ制限以外ニ公債ヲ發行スルコトヲ得

第七條　本法施行後三銀行カ中華民國政府又ハ中華匯業銀行ヨリ第一條ノ借款前貸及借款竝左ノ各號ノ借款ニ關シ元利金ノ支拂ヲ受ケタルトキハ直ニ之ヲ政府ニ納付スヘシ

一　第一條ノ借款前貸ニ關シ三銀行ト中華民國政府トノ間ニ成立シタル大正十二年六月二十八日ノ利拂借款七百九十九萬七千八十一圓八十錢、大正十三年九月十三日ノ利拂借款五百二十八萬六千八百二十圓五十一錢及大正十四年七月十五日ノ利拂借款五百三十萬圓

二　第一條ノ借款ニ關シ三銀行ト中華匯業銀行トノ間ニ成立シタル大正十一年一月十五日ノ利拂借款百十萬二千五百圓、大正十二年十月二十四日ノ利拂借款五百五萬三千九百九十五圓九十八錢、大正十三年九月十三日ノ利拂借款六百六十八萬二千九百十六圓七十一錢及大正十四年四月十六日ノ利拂借款二百十八萬四千九百五十五圓二十九錢

三　第一條ノ借款前貸及借款竝前二號ノ借款ニ關シ本法施行後成立スルコトアルヘキ借款

政府ハ必要アリト認ムルトキハ三銀行ヲシテ前項ノ元利金ノ納付ニ代ヘ借款前貸又ハ借款ニ關スル權利ヲ無償ニテ政府ニ讓渡セシムルコトヲ得

第八條　三銀行ハ第一條各號及前條各號ノ借款前貸及借款ニ關スル一切ノ事項ニ付政府ノ指揮命令ヲ受クヘシ

第九條　本法ニ依リ交付スル國債證券ノ交付價格ハ時價ヲ參酌シテ大藏大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○獨逸國等ニ屬スル財産管理ノ件

（參照　本件ハ憲法第八條ニ依リタルモノニシテ大正九年七月帝國議會承認濟）

●勅令第四十八號　大正九年三月二十五日

第一條　政府ハ獨逸國、墺地利洪牙利國若ハ土耳古國ニ屬シ又ハ其ノ國人若ハ法人ニ屬スル財産ヲ管理スルコトヲ得

第二條　政府ハ前條ノ財産ノ所有者、保管者其ノ他關係者ニ對シ其ノ財産ノ所在、種類、數量、價額、權利狀態其ノ他管理ニ必要ナル事項ノ申告ヲ命スルコトヲ得

第三條　當該官吏又ハ吏員ハ第一條ノ財産ニ關シ調査ノ爲必要ナル場所ニ立入リ若ハ檢査ヲ爲シ又ハ其ノ財産ノ所有者、保管者其ノ他關係者ニ對シ調査資料ノ提供ヲ命シ若ハ供述ヲ求ムルコトヲ得

第四條　第一條ノ財産ノ管理ハ當該官廳ノ管理命令ヲ以テ之ヲ開始ス

管理命令ヲ爲シタルトキハ之ヲ告示ス

第五條　當該官廳ハ管理財産ニシテ登記又ハ登錄ノ規定アルモノニ付テハ管理財産タル旨ノ登記又ハ登錄ヲ關係ノ官廳其ノ他ニ囑託又ハ請求スヘシ

當該官廳ハ管理財産債權ナルトキハ管理財産タル旨ヲ債務者ニ通知スヘシ

前二項ノ規定ニ依ル手續ヲ爲スヘキ財産ノ管理ハ登記若ハ登錄又ハ通知アルニ非サレハ之ヲ第三者ニ對抗スルコトヲ得ス

第六條　前二條ノ規定ハ財産ノ管理ヲ終了スル場合ニ之ヲ準用ス

第七條　當該官廳ハ管理財産ノ所有者又ハ保管者ニ對シ其ノ引渡ヲ命スルコトヲ得

第八條　管理ニハ財産ノ換價其ノ他ノ處分ヲ包含ス

政府カ擔保權ノ目的タル管理財産ヲ換價シタルトキハ擔保權ハ代金ノ上ニ存在ス此ノ場合ニ於テハ其ノ代金ハ別ニ之ヲ保管スヘシ

第九條　第一條ノ國、國人又ハ法人ハ其ノ者ニ屬スル管理財産ニ關シ處分其ノ他ノ行爲ヲ爲スコトヲ得ス

第十條　管理財産ハ管理ニ依リテ生シタル權利ニ基ク場合ヲ除クノ外民事上ノ强制執行又競賣ヲ爲スコトヲ得ス

第十一條　財産ノ管理ニ要スル費用ハ本人ニ屬スル管理財産ヲ以テ之ヲ支辨スルコトヲ得

第十二條　財産ノ管理ヲ免ルルノ目的ヲ以テ財産ノ隱匿、處分、毀棄ヲ爲シ若ハ爲サムトスル行爲アリタル者又ハ情ヲ知リテ其ノ處分ヲ受諾シタル者ハ三年以下ノ懲役又ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十三條　左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ三月以下ノ懲役若ハ百圓以下ノ罰金又ハ拘留若ハ科料ニ處ス

一　第二條ノ規定ニ依リ命セラレタル申告ヲ爲サス又ハ虚僞ノ申告ヲ爲シタル者

二　第三條ノ規定ニ依ル當該官吏又ハ吏員ノ職務ノ執行ヲ拒ミ妨ケ若ハ忌避シ、調査資料ノ提供ヲ爲サス若ハ虚僞ノ調査資料ヲ提供シ又ハ供述ヲ拒ミ若ハ虚僞ノ供述ヲ爲シタル者

三　第七條ノ規定ニ依ル引渡ノ命令ニ應セサル者

附　則

本令ハ大正八年勅令第三百四號（獨逸國等ニ屬スル財産管理ノ件）失效ノ日（大正九年勅令第四十七號ニ依リ同年三月二十五日）ヨリ之ヲ施行ス

○特殊財産管理ニ關スル勅令施行ニ關スル件

●内務省令第三號　大正九年三月二十五日

改正　大正九年第三九號、一〇年第二三號

第一條　財産ノ管理、管理ノ解除、換價其ノ他必要ナル處分ハ地方長官之ヲ爲ス

第二條　財産ノ所有者、保管者、其ノ他關係者ハ本令施行ノ際ニ於ケル財産ニ付テハ本令施行後十日内ニ本令施行後生シタル財産ニ付テハ其ノ都度地方長官ニ別記樣式ニ依リ財産ニ關スル申告ヲ爲スヘシ但シ獨逸國又ハ其ノ國人若ハ法人ニ屬スル財産ニシテ大正九年一月十一日以後墺地利國又ハ其ノ國人若ハ法人ニ屬スル財産ニシテ大正九年十月十五日以後洪牙利國又ハ其ノ國人若ハ法人ニ屬スル財産ニシテ大正十年七月二十七日以後ニ生シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三條　管理財産ノ所有者及保管者ハ管理財産ニ付キ滅失毀損若ハ變更アリタルトキ又ハ修理ヲ要スト認ムルトキハ其旨直ニ地方長官ニ届出ツヘシ

第四條　當該官吏又ハ吏員其ノ職務ヲ執行セムトスルトキハ證票ヲ携帶スヘシ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前大正八年内務省令第三號（獨逸國等ニ屬スル財産管理ニ關スル勅令施行ニ關スル件）ニ依リ爲シタル手續其ノ他ノ行爲ハ別ニ規定スル場合ヲ除クノ外之ヲ本令ニ依リ爲シタルモノト看做ス

（樣式略ス）

（參照）

大正九年勅令第四十八號ニ依ル管理財産タル國債ニ關スル取扱手續

大正九年三月二十七日

大藏省令第十一號

○同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約ニ依ル財産處理ニ關スル件

●勅令第百七十一號　大正九年五月二十七日

第一條　獨逸國又ハ其ノ國人若ハ法人ニ屬スル政府管理財産ヲ以テ同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約二百九十七條ニ規定スル支拂ニ充ツルハ本令ノ定ムル所ニ依ル

第二條　前條ノ政府管理財産ノ上ニ存スル抵當權、質權其ノ他ノ擔保權ヲ實行セムトスルトキハ其ノ擔保權者ハ第三條乃至第六條ノ規定ニ依リテ之ヲ爲スヘシ

第三條　前條ノ擔保權者ハ本令施行ノ日ヨリ三月内ニ其ノ擔保權ヲ特殊財産管理局ニ届出ツヘシ

前項ノ規定ニ依ル届出ニハ擔保權ノ性質及原因竝債權ノ額ヲ表示シ且證據書類又ハ其ノ謄本ヲ提出スヘシ

第四條　前條ニ規定スル期間ヲ經過シタル後届出ヲ爲シタル擔保權者ハ擔保權ノ目的タリシ財産ノ殘餘價額ノ限度ニ於テノミ政府管理財産ニ付擔保權ヲ實行スルコトヲ得

第五條　第二條ノ擔保權ハ辨濟期ニ至ラサル債權、條件附債權又ハ存續期間ノ不確定ナル債權ニ付テモ之ヲ實行スルコトヲ得

條件附債權又ハ存續期間ノ不確定ナル債權ニ付テハ擔保權ノ實行ハ特殊權利審査會ニ於テ選任シタル鑑定人ノ評價額ニ從ヒテ之ヲ爲スヘシ

第六條　特殊財産管理局ハ届出アリタル擔保權ノ目的タル管理財産ノ賣却代金ノ中ヨリ管理ノ費用ヲ控除シ其ノ殘金ヲ以テ其ノ擔保權者及之ニ優先スル權利ヲ有スル者ニ民法其ノ他ノ法令ノ規定ニ依ル順位ニ從ヒテ支拂ヲ爲スヘシ

第七條　第一條ニ規定スル支拂ヲ受ケムトスル者ハ本令施行ノ日ヨリ六月内ニ其ノ權利ニ付特殊權利審査會ニ審査ヲ請求スヘシ

特殊權利審査會ハ宥恕スヘキ事由アリト認ムルトキハ前項ニ規定スル期間滿了後ニ於テモ仍審査ノ請求ヲ受理スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依ラサル審査ノ請求ハ前二項ノ規定ニ依ル請求者ニ對シ支拂ヲ爲シ仍政府管理財産ニ殘餘アリト認ムル場合ニ限リ支拂ヲ爲スコトヲ條件トシテ之ヲ受理スルコトヲ得

特殊權利審査會前三項ノ規定ニ依リ審査ノ請求ヲ受理シタルトキハ其ノ請求ハ之ヲ特殊財産管理局ニ對スル支拂ノ請求ト看做ス

第八條　賠償請求ノ目的ヲ財産回收ニ依リ達セムトスル者ハ本令施行ノ日ヨリ五月内ニ其ノ希望ヲ表示シ其ノ權利ニ付特殊權利審査會ニ審査ヲ請求スヘシ

第九條　第七條ニ規定スル審査ノ請求ハ時效ノ中斷ニ關シテハ之ヲ裁判上ノ請求ト看做ス

第十條　特殊權利審查會審查ノ爲必要ト認ムルトキハ證人又ハ鑑定人ノ訊問其ノ他ノ證據調ヲ爲スコトヲ得

前項ノ證據調ハ裁判所其ノ他ノ官廳ニ囑託シテ之ヲ爲スコトヲ得

前二項ノ證據調ニ關シテハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第十一條　特殊權利審查會ノ組織及審查ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二條　特殊權利審查會ハ賠償請求ニ關スル審查ノ請求ヲ理由ナシト認ムル場合ヲ除クノ外同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約ニ依リ事件ヲ管轄スル機關ニ其ノ事件ヲ送付スヘシ

第十三條　第八條ノ規定ニ依ル財產回收ノ希望ノ表示アリタル場合ニ於テハ前條ニ規定スル手續ハ其ノ回收行ハレタルトキ、回收不能ト認メタルトキ又ハ一部ニ付回收行ハレ他ノ部分ニ付回收不能ト認メタルトキ之ヲ爲スヘシ

第十四條　特殊權利審查會カ金錢債權ニ關スル審查ノ請求ニ付爲シタル決定ニ不服アル者ハ其ノ決定告知ノ日ヨリ起算シ三月內ニ通常裁判所ニ訴ヲ提起スルコトヲ得

第十五條　內地ニ住居ヲ有セサル者ニ對スル前條ノ訴ハ政府管理財產ノ所在地ノ裁判所ニ之ヲ提起スルコトヲ得

前項ノ政府管理財產ノ所在地ハ東京市トス

第十六條　朝鮮、臺灣、樺太、關東州及從前ノ占領地ニ存スル政府管理財產ハ特殊財產管理局之ヲ管理ス

第十七條　第一條ニ規定スル支拂ハ本令ニ規定スル手續ニ從ヒ確定シタル金額ニ依リ特殊財產管理局之ヲ爲ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

（參照）

同盟及聯合國ト墺地利國トノ平和條約ニ依ル財產管理ニ關スル件

大正九年十一月十八日
勅令第五百三十四號

同盟及聯合國ト洪牙利國トノ平和條約ニ依ル財產管理ニ關スル件

大正十年八月九日
勅令第三百七十六號

第十三章　震災ニ關スル法令

第十三章　震災ニ關スル法令

○高等諸學校震災復舊諸費ニ屬スル豫算ノ施行ニ關スル法律

●法律第十號　大正十三年七月二十二日
改正　一五年第四八號

大正十二年九月ノ震災ニ基ク復舊諸費ニシテ東京帝國大學、東京商科大學及千葉醫科大學ニ關スルモノハ大學特別會計法第一條ノ規定ニ拘ラス之ヲ一般會計ノ所屬トス

帝國大學特別會計ノ資金中東京帝國大學農學部及航空研究所ノ用ニ供スル土地及建造物、官立大學特別會計ノ資金中東京商科大學ノ用ニ供スル土地及建造物竝學校及圖書館特別會計ノ資金中東京女子高等師範學校、東京高等蠶糸學校及東京外國語學校ノ用ニ供スル土地及建造物ニシテ此等諸學校ノ震災復舊諸費ニ屬スル豫算ノ施行ノ結果不用ニ歸スヘキモノハ當該資金ヨリ之ヲ拂出スコトヲ得

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○會計規則其ノ他ノ收入支出ニ關スル命令ノ規定ニ對シ特例ヲ設クル件

●勅令第四百六號　大正十二年九月七日

震災ニ基ク特別ノ事情ニ因リ必要アル場合ニ於テハ大藏大臣ハ會計規則其ノ他ノ收入支出ニ關スル命令ノ規定ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災救護ノ爲ノ恩賜金及寄附金等ノ取扱ニ關スル件

●勅令第四百二十二號　大正十二年九月二十二日

第一條　震災救護ノ爲ノ恩賜金及震災救護ノ目的ヲ以テスル寄附ニ係ル現金、有價證券其ノ他ノ物件ハ本令ニ依リ臨時震災救護事務局ニ於テ之ヲ取扱フヘシ

第二條　有價證券及直接救護ノ用ニ適セサル物件ハ之ヲ換價スルコトヲ得

第三條　預入ニ係ル現金ニ對シテハ大藏省預金部ハ通常預

金利子ヲ附スヘシ

現金ニ關スル出納官吏ノ取扱手續ニ付テハ資金前渡官吏現金取扱ノ例ニ準スヘシ

附　則

本令ハ大正十二年九月二日ヨリ之ヲ適用ス

○震災救護義捐金出納事務規程

●大藏省令第十八號　大正十二年九月二十六日

第一節　總　則

第一條　震災救護ノ目的ヲ以テ寄附ニ係ル現金、有價證券及有價證券其ノ他ノ物件ノ換價代金竝利子ハ本令ニ依リ之カ取扱ヲ爲スヘシ

前項ノ現金ハ之ヲ義捐金ト稱ス

第二條　臨時震災救護事務局義捐部專任委員ヲ主任出納官吏トシ北海道廳長官及府縣知事ヲ分任出納官吏トス

前項ニ揭クル者ノ外必要アルトキハ臨時震災救護事務局總裁ニ於テ分任出納官吏ヲ命スルコトヲ得

前二項ノ規定ニ依リ出納官吏タル者ハ當然義捐金取扱主任官及有價證券取扱主任官タル職務ヲ兼掌スルモノトス

第三條　震災救護ノ爲ノ恩賜金ハ本令ニ準シ取扱フヘシ

第二節　義捐金ノ保管出納

第四條　主任出納官吏又ハ臨時震災救護事務局總裁ノ特ニ指定シタル分任出納官吏ニ非サレハ支拂ヲ爲スコトヲ得ス

第五條　出納官吏義捐金ヲ領收シタルトキハ適宜ノ領收證書ヲ交付スヘシ

第六條　義捐金取扱主任官ハ義捐金ヲ大藏省預金部ニ預入ルヘシ

第七條　義捐金取扱主任官ハ其ノ任地所在ノ日本銀行（本店、支店又ハ代理店ヲ謂フ以下同シ）ヲ以テ其ノ預金取扱店ト爲スヘシ

第八條　義捐金取扱主任官義捐金ヲ預入レムトスルトキハ其ノ資格氏名及印鑑ヲ日本銀行ニ屆出ツヘシ

第九條　義捐金取扱主任官預金ノ拂込ヲ爲サムトスルトキハ預金部預金拂込書ヲ添ヘ現金ヲ日本銀行ニ拂込ミ預金部預金領收證書ノ交付ヲ受クヘシ

義捐金取扱主任官ニシテ支拂ヲ爲ス出納官吏ナル場合ニ於テハ日本銀行ヨリ小切手用紙及預金部預金帳ノ交付ヲ受クヘシ

第十條　分任出納官吏ハ主任出納官吏ニ對シ每土曜日ニ義捐金收支ノ現況ヲ報告スヘシ

第十一條　義捐金取扱主任官預金ヲ隔地ノ出納官吏ニ送付スル必要アル場合ニ於テハ日本銀行ニ之カ送金ヲ請求シ送金濟通知書ノ交付ヲ受クヘシ

第十二條　義捐金取扱主任官現金ノ支拂ヲ爲サムトスルトキハ出納官吏事務規程第三十一條及第三十四條ノ規定ニ準シ預金額ヲ限度トシテ記名式持參人拂ノ小切手ヲ振出シ支拂ノ手續ヲ爲スヘシ

第十三條　本節ニ定ムルモノヲ除クノ外義捐金ノ保管出納ハ出納官吏事務規程第一章、第三章、第六章及第七章ノ例ニ依ル

第三節　有價證券ノ受拂保管

第十四條　有價證券取扱主任官ハ有價證券ヲ其ノ任地所在ノ日本銀行ニ寄託スヘシ

第十五條　有價證券取扱主任官有價證券ヲ寄託セムトスルトキハ適宜ノ寄託書ヲ添ヘ日本銀行ニ送付シ受託證書ノ交付ヲ受クヘシ

第十六條　有價證券取扱主任官ハ每土曜日ニ有價證券受拂ノ現況ヲ臨時震災救護事務局ニ報告スヘシ

第十七條　臨時震災救護事務局總裁有價證券ヲ換價セムトスル時ハ有價證券取扱主任官ニ命シ時價ヲ以テ日本銀行ヲシテ之ヲ賣拂ハシムヘシ

義捐金取扱主任官日本銀行ヨリ有價證券賣拂代金ヲ預金額ニ振替整理濟ノ通知ヲ受ケタルトキハ關係帳簿ノ整理ヲ爲スヘシ

第十八條　第五條、第七條及第八條ノ規定ハ有價證券ノ受拂ニ付之ヲ準用ス

第十九條　本節ニ定ムルモノヲ除クノ外有價證券ノ受拂保管ハ政府保管有價證券取扱規程ノ定ムル所ニ依ル

附　則

本令ハ大正十二年九月二日ヨリ之ヲ適用ス

○震災被害者ニ對スル租稅ノ減免等ニ關スル件

（參照　本件ハ憲法第八條ニ依リタルモノニシテ大正十二年十二月帝國議會承諾濟）

●勅令第四百十號　大正十二年九月十二日

第一條　政府ハ震災被害者ノ納付スヘキ大正十二年分ノ第三種所得稅及營業稅ニ付各納稅者ノ被害ノ狀況ニ應シ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ免除又ハ輕減スルコトヲ得

第二條　政府ハ震災地ニ於テ大正十二年度ニ納付スヘキ左ノ租稅ニ付命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

一　地　租

二　所得稅

三　營業稅

四　相續稅

第三條　第一條ノ震災被害者及前條ノ震災地ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災被害者ニ對スル租稅ノ減免等ニ關スル件ノ施行ニ關スル件

●勅令第四百三十三號　大正十二年九月三十日

第一條　大正十二年勅令第四百十號第三條ノ規定ニ依リ震災地及震災被害者ヲ左ノ如ク定ム

一　震災地

東京府（西多摩郡及小笠原島ヲ除ク）
神奈川縣
埼玉縣（秩父郡、兒玉郡及大里郡ヲ除ク）
千葉縣　千葉市　千葉郡　市原郡　東葛飾郡　君津郡　安房郡
山梨縣　中巨摩郡花輪村　東八代郡富士見村　南巨摩郡鰍澤町　南都留郡　明見村　中野村　忍野村
靜岡縣　沼津市　田方郡　駿東郡　加茂郡

二　震災被害者

大正十二年九月一日ノ震災（之ニ伴フ火災又ハ海嘯ヲ含ム以下同シ）ニ因リ損害ヲ受ケタル者

第二條　震災被害者中政府ノ決定シタル所得金額一萬圓以下（同居ノ戶主又ハ家族ノ分ト合算額ニ依ル）ノ者ニシテ自己（同居ノ戶主又ハ家族ヲ含ム）ノ所有ニ係ル其ノ住宅又ハ家財ノ過半カ震災ニ因リ滅失シ又ハ其ノ用ヲ爲ササルニ至リタルモノニ付テハ大正十二年分第三種ノ所得ニ對スル所得稅ヲ免除ス

第三條　震災被害者ニシテ前條ニ該當セサルモノノ大正十二年分第三種ノ所得ニ付テハ政府ノ決定シタル所得金額中ヨリ左ノ金額ヲ控除シ其ノ殘所得金額ニ付所得稅法第二十三條ノ規定ヲ適用ス

一　所得稅法第十四條第一項第六號ノ所得ノ基因タル自己所有ノ家屋其ノ他ノ築造物、船舶、機械、器具、商品、原料品等カ震災ニ因リ滅失又ハ毀損シタルトキハ其ノ損害見積金額

二　自己（同居ノ戶主又ハ家族ヲ含ム）ノ所有ニ係ル其ノ住宅又ハ家財カ震災ニ因リ滅失又ハ毀損シタルトキハ左ノ金額

甲　住宅又ハ家財ノ過半カ滅失シ又ハ其ノ用ヲ爲ササルニ至リタルトキ

所得金額中一萬圓以下ノ金額（同居ノ戶主又ハ家族ノ分ト合算額ニ依ル以下同シ）ノ全部
同　一萬圓ヲ超エ二萬圓以下ノ金額ノ八割
同　二萬圓ヲ超エ五萬圓以下ノ金額ノ六割
同　五萬圓ヲ超エ十萬圓以下ノ金額ノ四割
同　十萬圓ヲ超ユル金額ノ二割

乙　住宅又ハ家財ノ損害甲ノ程度ニ達セサルモ其ノ損害著シキトキ

所得金額中一萬圓以下ノ金額（同居ノ戶主又ハ家族ノ分ト合算額ニ依ル以下同シ）ノ五割
同　一萬圓ヲ超エ二萬圓以下ノ金額ノ三割
同　二萬圓ヲ超エ五萬圓以下ノ金額ノ二割
同　五萬圓ヲ超ユル金額ノ一割

丙　住宅又ハ家財ノ損害乙ノ程度ニ達セサルトキ

所得金額中一萬圓以下ノ金額（同居ノ戶主又ハ家族ノ分ト合算額ニ依ル以下同シ）ノ二割
同　一萬圓ヲ超エ五萬圓以下ノ金額ノ一割

三　第一號又ハ前號ノ規定ノ適用ヲ受クル者所得稅法第十四條第一項第一號又ハ第六號ノ所得ニ付震災ノ影響ニ依リ收入ノ全部又ハ大部分カ震災ニ因リ滅失シ又ハ其ニ至リタルトキハ當該所得ノ三分ノ一ニ相當スル金額

前項第二號ノ場合ニ於テ同居者一人毎ノ控除金額ハ各其ノ所得金額ニ案分シテ之ヲ計算ス

震災被害者カ所得ノ基因タル自己所有ノ家屋ニ住居スル場合ニ於テハ其ノ選擇ニ依リ第一項第一號又ハ第二號ノ規定ヲ適用ス

同一人ニシテ山林ノ所得ト山林以外ノ所得トヲ有スル場合ニ於テハ前二項ノ規定ニ依ル控除ハ先ツ山林以外ノ所得ニ付之ヲ爲シ不足アルトキハ山林ノ所得ニ及フ

第四條　所得稅法第六十四條第一項ノ請求ヲ爲ス者ニ付テハ前條ノ規定ヲ適用セス

第五條　第三條ノ規定ニ依ル控除ヲ爲シ殘所得金額八百圓ニ滿タサルトキハ所得稅ヲ免除ス

所得稅法第二十條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條　震災ニ因リ所得稅法第二十六條第一項ノ規定ニ依リ決定シタル大正十二年分第三種ノ所得金額ノ不明ト爲リタルモノニ付テハ政府ハ所得調查委員會ニ諮問シテ其ノ所得金額ヲ確定スヘシ

第七條　震災被害者ニシテ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノノ大正十二年分營業稅第二期分ハ之ヲ免除ス

一　營業ノ用ニ供スル家屋其ノ他ノ築造物、船舶、機械、器具等ノ全部又ハ大部分カ震災ニ因リ滅失シ又ハ其ノ用ヲ爲ササルニ至リタルトキ

二　商品及原料品ノ全部又ハ大部分カ震災ニ因リ滅失シ又ハ其ノ用ヲ爲ササルニ至リタルトキ

前項ノ規定ハ各營業場毎ニ之ヲ適用ス但シ營業稅法第十五條第二項ノ規定ニ依リ合算シテ營業稅ヲ課シタルモノニ付テハ各營業場ヲ通シテ之ヲ適用ス

第八條　前條ノ規定ニ依リ營業稅ノ免除ヲ受ケタル者ニ付テハ第一期分ニ相當スル稅額ヲ以テ營業稅法第二十九條ノ其ノ年分營業稅額ト看做ス

第九條　震災被害者ノ大正十二年分營業稅ニ付營業稅法第二十九條ノ規定ヲ適用スル場合ニ於テハ營業ノ用ニ供スル自己所有ノ家屋其ノ他ノ築造物、船舶、機械、器具等カ

震災ニ因リ滅失又ハ毀損シタル損害ノ見積金額ヲ營業稅法施行規則第五十五條ノ經費ト看做ス

第十條　震災ニ因リ營業稅法第二十六條第一項ノ規定ニ依リ決定シタル大正十二年分營業稅課稅標準ノ不明ト爲リタルモノニ付テハ政府ハ營業稅調査委員會ニ諮問シテ其ノ課稅標準ヲ確定スヘシ

第十一條　第二條、第三條又ハ第七條ノ規定ニ依リ所得稅又ハ營業稅ノ免除又ハ輕減ヲ受ケムトスル者ハ被害ノ狀況及損害見積金額ヲ記載シタル申請書ヲ大正十三年一月三十一日迄ニ所轄稅務署ニ提出スヘシ

震災當時ニ於テ納稅地カ震災地ニ在リタル納稅者ニシテ被害ノ事實顯著ナルモノニ付テハ前項ノ申請ナキ場合ト雖政府ノ認ムル所ニ依リ所得稅又ハ營業稅ノ免除又ハ輕減ヲ爲スコトヲ得

第十二條　政府ハ第三條ノ規定ニ依ル控除ヲ爲シタルトキハ其ノ殘所得金額ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ

第十三條　本令ニ依ル所得稅又ハ營業稅ノ免除又ハ輕減ニ關スル處分ニ對シ不服アルトキハ訴願又ハ行政訴訟ヲ爲スコトヲ得

第十四條　震災地ニ於テ納付スヘキ地租、所得稅（第二種所得稅ヲ除ク）、營業稅及相續稅ニシテ納付未濟ニ係ルモノ及大正十二年十月三十一日迄ニ納期限ノ到來スルモノニ付テハ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年六月一日ヨリ同年十二月十五日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス但シ第三號ノ宅地ノ地租ニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ其ノ震災地ニ於テ納付スヘキ地租、所得稅（第二種所得稅ヲ除ク）、營業稅及相續稅ニシテ大正十二年十一月一日以後ニ納期限ノ到來スルモノニ付テハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災地ニ於テ大正十二年度ニ納付スヘキ地租、所得稅、營業稅及相續稅ノ徵收猶豫方

●大藏省令第二十六號　大正十二年十月三十一日

第一條　大正十二年勅令第四百三十三號第十四條第一項ノ規定ニ依リ徵收ヲ猶豫シタル租稅ノ納期限ハ本令ニ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外大正十二年分ノ第三種所得稅第一期分ニ在リテハ大正十三年五月三十一日限其ノ他ノ租稅ニ在リテハ大正十二年十二月二十日限トス

第二條　左ノ各號ノ一ニ該當スル土地ノ大正十二年分地租ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年六月一日ヨリ同年十二月十五日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス但シ第三號ノ宅地ノ地租ニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ其ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

一　震災地ニ於テ納付スヘキ地租、所得稅（第二種所得稅ヲ除ク）、營業稅及相續稅ニシテ納付未濟ニ係ルモノ

一　震災ニ因リ自己ノ住宅ノ過半カ滅失シ又ハ其ノ用ヲ爲ササルニ至リタル者ノ所有スル土地

二　荒地又ハ收穫皆無地トナラサルモ震災ニ因リ著シク收穫ノ減損スルニ至リタル田畑

三　震災ニ因ル被害激甚ニシテ別ニ指定スル市區町村內ノ宅地

第三條　震災ニ因リ地租名寄帳ノ滅失シタル市區町村ノ大正十二年分地租ニ付テハ地租名寄帳改調後一年以內ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス

第四條　大正十二年分第三種ノ所得ニ對スル所得稅ノ徵收猶豫ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一　震災被害者ノ所得稅ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年五月一日ヨリ大正十四年二月二十八日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス但シ被害ノ事實顯著ニシテ所得稅ノ減免ヲ受クヘキコト明カナルモノニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ之ヲ猶豫スルコトヲ得

二　震災ニ因リ所得金額ノ不明トナリタルモノニ付テハ大正十三年十月一日ヨリ大正十四年七月三十一日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス

第五條　大正十二年分營業稅ノ徵收猶豫ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一　震災被害者ノ營業稅ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年三月三十一日限之ヲ徵收ス但シ被害ノ事實顯著ニシテ營業稅ノ減免ヲ受クヘキコト明カナルモノニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ之ヲ猶豫スルコトヲ得

二　荒地又ハ收穫皆無地トナラサルモ震災ニ因リ著シク收穫ノ減損スルニ至リタル田畑

三　震災ニ因ル被害激甚ニシテ別ニ指定スル市區町村內ノ宅地

第三條　震災ニ因リ地租名寄帳ノ滅失シタル市區町村ノ大正十二年分地租ニ付テハ地租名寄帳改調後一年以內ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス

第四條　大正十二年分第三種ノ所得ニ對スル所得稅ノ徵收猶豫ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一　震災被害者ノ所得稅ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年五月一日ヨリ大正十四年二月二十八日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス但シ被害ノ事實顯著ニシテ所得稅ノ減免ヲ受クヘキコト明カナルモノニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ之ヲ猶豫スルコトヲ得

二　震災ニ因リ所得金額ノ不明トナリタルモノニ付テハ大正十三年十月一日ヨリ大正十四年七月三十一日迄ノ間ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス

第五條　大正十二年分營業稅ノ徵收猶豫ニ付テハ左ノ各號ノ規定ニ依ル

一　震災被害者ノ營業稅ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依

五　其ノ他ノ諸稅ニ付テハ納稅告知書ヲ受ケタル日ヨリ七日以內

市町村ニ於テ徵收スヘキ租稅ニ付テハ前項ノ申請書ハ納稅地ノ市區町村ヲ經由シテ之ヲ提出スヘシ

第八條　前條ノ申請書ニハ納稅義務者ノ住所又ハ居所、氏名、稅目、納期區分及左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　地租ニ在リテハ大字、字、地番、地目、段別、地價及被害狀況但シ第二條第一項第一號ノ場合ニ於テハ各大字地目每ノ筆數、段別及地價ノ合計ヲ記載スルヲ以テ足ル

二　其ノ他ノ租稅ニ在リテハ其ノ課稅標準額、稅額、被害狀況及震災當時ニ於ケル納稅地

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災被害者ノ營業稅課稅標準算定ノ特例等ニ關スル件

（參照　本令ハ憲法第八條ニ依リタルモノニシテ大正十三年七月帝國議會承諾濟）

●勅令第二十一號　大正十三年二月二十三日

第一條　營業稅ノ課稅標準ヲ前年ノ實績ニ依リ計算スヘキ場合ニ於テ大正十二年九月一日ノ震災（之ニ伴フ火災又ハ海嘯ヲ含ム）ニ因リ營業ノ狀況激變シ課稅標準中著シク減損スヘシト認メラルルモノアルトキハ大正十三年分營業稅ニ限リ豫算ヲ以テ其ノ課稅標準ヲ算定ス

前項ニ該當スル營業者ハ速ニ當該課稅標準ノ豫算ヲ政府ニ申告スヘシ

第二條　政府ハ大正十二年勅令第四百十號第二條ノ震災地ニ於テ大正十三年四月一日ヨリ同年八月三十一日迄ニ納付スヘキ左ノ租稅ニ付命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

一　地租

二　第一種所得稅

三　相續稅

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○大正十三年勅令第二十一號第二條ノ規定ニ依リ震災地ニ於テ納付スヘキ地租第一種所得稅及相續稅ノ徵收猶豫方ノ件

●大藏省令第五號　大正十三年三月十四日

第一條　左ノ各號ノ一ニ該當スル地租ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ徵收ヲ猶豫シ大正十三年十二月一日ヨリ同月十五日限之ヲ徵收ス但シ第二號ノ地租ニ付テハ納稅義務者ノ申請ナキ場合ニ於テモ其ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

一　荒地又ハ收穫皆無地トナラサルモ震災ニ因リ著シク收穫ノ減損スルニ至リタル田ノ大正十二年分田租第四期

二　大正十二年大藏省令第二十六號第二條第三號ノ規定ニ依リ指定シタル市區町村內ノ宅地ノ大正十三年分宅地租第一期

第二條　震災ニ因リ地租名寄帳ノ滅失シタル市區町村ノ大正十二年第四期分田租及大正十三年第一期分宅地租ニ付テハ地租名寄帳改調後一年以內ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徵收ス

第三條　震災被害者ノ大正十三年四月一日ヨリ同年八月三十一日迄ニ納付スヘキ左ノ租稅（大正十二年勅令第四百十號第二條ノ規定ニ基キ徵收ヲ猶豫セラレタルモノヲ除ク）ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ被害ノ狀況ニ應シ五年以內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得

一　大正十二年八月三十一日迄ニ終了シタル事業年度分ノ第一種所得稅

二　大正十二年八月三十一日迄ニ開始シタル相續ニ對スル相續稅（延納年賦金ノ年割額ヲ含ム）

第四條　第一條及第三條ノ規定ニ依リ徵收猶豫ノ申請ヲ爲サムトスル者ハ左ノ期限迄ニ所轄稅務署長ニ申請書ヲ提出スヘシ

一　田租ニ付テハ大正十三年四月十五日限

二　宅地租ニ付テハ大正十三年六月十五日限

三　第一種所得稅及相續稅ニ付テハ納稅告知書ヲ受ケタル日ヨリ七日以內

田租及宅地租ニ付テハ前項ノ申請書ハ納稅地ノ市區町村ヲ經由シテ之ヲ提出スヘシ

第五條　前條ノ申請書ニハ納稅義務者ノ住所、氏名、稅目、被害狀況及左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　田租及宅地租ニ在リテハ大字、字、地番、地目、段別及地價

二　第一種所得稅ニ在リテハ當該事業年度ノ期間及稅額

三　相續稅ニ在リテハ相續開始ノ日、被相續人ノ氏名及稅額

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災被害地ノ地租免除等ニ關スル法律

●法律第四號　大正十三年七月十八日

第一條　大正十二年九月一日ノ震災（之ニ伴フ火災又ハ海嘯ヲ含ム）ニ因リ著シク利用ヲ妨ケラレタル土地ニシテ地租條例第二十條ノ規定ノ適用ナキモノニ付テハ其ノ實況ニ應シ命令ノ定ムル所ニ依リ大正十二年ヨリ五年以内其ノ地租ヲ免除スルコトヲ得但シ大正十二年宅地租第一期分ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第二條　政府ハ大正十二年勅令第四百十號第二條ノ震災地ニ於テ大正十三年九月一日以後ニ納付スヘキ左ノ租稅ニ付命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ徴收ヲ猶豫スルコトヲ得

一　地租
二　第一種所得稅
三　相續稅

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災被害地ノ地租免除等ニ關スル施行方ノ件

●大藏省令第二十號　大正十三年八月二日

第一條　左ノ各號ノ一ニ該當スル土地ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ被害ノ實況ニ應シ宅地ニ在リテハ大正十二年ヨリ三年以内、其ノ他ノ土地ニ在リテハ大正十二年ヨリ五年以内地租ヲ免除ス但シ大正十二年宅地租第一期分ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一　水路若ハ溜池ノ破壞又ハ井戸ノ湧水涸渇等ニ因リ灌漑又ハ排水ノ便ヲ失シ收穫ヲ減損スルニ至リタル田畑
二　地下ノ變動等ニ因リ水持ヲ害シ又ハ濕地ト爲リ收穫ヲ減損スルニ至リタル田畑
三　建物ノ過半カ滅失又ハ倒壞シタル宅地
四　地盤ノ變動又ハ交通ノ障碍等ニ因リ營業ノ狀況容易ニ回復シ難キ地方ノ宅地
五　其ノ他震災ニ因リ著シク利用ヲ妨ケラレタル土地

第二條　前條ノ規定ニ依リ地租ノ免除ヲ受ケムトスル者ハ大正十三年九月十五日迄ニ納稅義務者ノ住所、氏名、被害地ノ大字、字、地番、地目、段別、地價及被害ノ狀況ヲ記載シタル申請書ヲ所轄稅務署長ニ提出スヘシ

第三條　左ノ市町村内ノ宅地ニシテ震災ニ因リ建物ノ過半カ燒失シタルモノニ付テハ前條ノ申請ナキ場合ニ於テモ其ノ地租ヲ免除スルコトヲ得

東京府　東京市
北豐島郡　南千住町　日暮里町　三河島町
神奈川縣　横濱市
横須賀市
鎌倉郡　腰越津村　鎌倉町
中郡　秦野町
足柄下郡　小田原町　眞鶴村
愛甲郡　厚木町
千葉縣　安房郡　船形町

第四條　第二條ノ申請アリタル土地ニ付テハ被害調査中地租ノ徴收ヲ猶豫スルコトヲ得

第五條　震災ニ因リ地租名寄帳ノ滅失シタル市區町村内ノ地租ニシテ地租名寄帳改調迄ニ納期ノ到來スルモノニ付テハ其ノ改調後一年以内ニ於テ稅務署長ノ適當ト認ムル時期ニ之ヲ徴收ス

第六條　震災被害者ノ納付スヘキ左ノ租稅（大正十二年勅令第四百十號第二條又ハ大正十三年勅令第二十一號第二條ノ規定ニ基キ徴收ヲ猶豫セラレタルモノヲ除ク）ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ被害ノ實況ニ應シ五年以内ノ延納ヲ許可スルコトヲ得但シ大正十八年八月三十一日ヲ過クルコトヲ得ス

一　大正十二年八月三十一日迄ニ終了シタル事業年度分ノ第一種所得稅
二　大正十二年八月三十一日迄ニ開始シタル相續ニ對スル相續稅（延納年賦金ノ年割額ヲ含ム）

第七條　前條ノ規定ニ依リ徴收猶豫ノ申請ヲ爲サムトスル者ハ納稅告知書ヲ受ケタル日ヨリ七日以内ニ納稅義務者ノ住所、氏名、稅目、被害ノ狀況及左ノ事項ヲ記載シタル申請書ヲ所轄稅務署長ニ提出スヘシ

一　第一種所得稅ニ在リテハ當該事業年度ノ期間及稅額
二　相續稅ニ在リテハ相續開始ノ日、被相續人ノ氏名及稅額

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災ニ因リ租稅ヲ減免セラレタル者ノ法令上ノ納稅資格要件ニ關スル法律

●法律第五十四號　大正十二年十二月二十四日

大正十二年勅令第四百十號ニ依リ免除又ハ輕減セラルル所得稅及營業稅ハ法令上ノ納稅資格要件ニ關シテハ免除又ハ輕減セラレサルモノト看做ス

前項ノ規定ハ前項ノ所得稅及營業稅ノ附加稅タル市町村稅、大正十二年九月ノ震災ニ因リ免除又ハ輕減セラルル直接府縣稅ノ附加稅タル市町村稅及其ノ他ノ直接市町村稅ニシテ同震災ニ因リ免除又ハ輕減セラルルモノニ付之ヲ準用ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災ニ因リ地租ヲ免除セラルル者ノ法令上ノ納稅資格要件ニ關スル法律

●法律第五號　大正十三年七月十八日

大正十二年九月ノ震災ニ因リ免除セラルル地租ハ法令上ノ納稅資格要件ニ關シテハ免除セラレサルモノト看做ス

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災善後公債法

●法律第五十六號　大正十二年十二月二十四日

改正　大正一三年第一二號

第一條　震災ニ伴フ復興事業其ノ他震災善後ノ爲ニ要スル經費支辨ノ爲政府ハ十億七千三百萬圓ヲ限リ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入金ヲ爲スコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前條ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災善後ニ關スル經費支辨ノ爲公債發行ニ關スル件

（參照　本令ハ憲法第七十條ニ依リタルモノニシテ大正十三年七月帝國議會承諾濟）

●勅令第四十六號　大正十三年三月一日

震災善後ニ關シ必要ナル經費支辨ノ爲政府ハ二千四百二十萬圓ヲ限リ公債ヲ發行シ又ハ之カ繰替支辨ノ爲借入金ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル公債ノ發行價格差減額ヲ補塡スル爲必要アル場合ニ於テハ前項ノ制限以外ニ公債ヲ發行シ又ハ借入金ヲ爲スコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○復興事業ノ施行ニ伴ヒ支拂フヘキ金額ヲ國債證券ヲ以テ交付スル等ニ關スル法律

●法律第五十五號　大正十二年十二月二十四日

第一條　政府ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ復興事業ノ施行ニ伴ヒ土地所有者其ノ他ノ利害關係人ニ支拂フヘキ補償金其ノ他ノ金額ヲ五分利附國債證券ヲ以テ交付スルコトヲ得

第二條　政府ハ前條ノ規定ニ依リ交付スル爲必要ナル額ヲ限度トシ公債ヲ發行スルコトヲ得但シ其ノ總額ハ震災善後公債法ニ依リ發行スル公債又ハ借入金ト通シテ同法ノ規定スル制限額ヲ超ユルコトヲ得ス

震災善後公債法第二條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依ル公債ノ發行ニ付之ヲ準用ス

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○復興事業ノ施行ニ伴ヒ交付スヘキ國債證券ニ關スル件

●勅令第百三十七號　大正十三年六月二日

第一條　復興事業ノ施行ニ伴ヒ政府カ土地所有者其ノ他ノ利害關係人ニ對シ支拂フヘキ補償金其ノ他ノ金額ハ左ニ揭クル場合ニ於テハ五分利附國債證券ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得但シ國債ノ最小額面ノ交付價格ニ滿タサル額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一　特別都市計畫法第八條第一項ノ規定ニ依リ交付スヘキ補償金ヲ支拂フトキ

二　直接自己ノ用ニ供セサル土地又ハ建物其ノ他ノ工作物ヲ收用又ハ買收シタル場合ニ於テ其ノ所有者ニ補償金又ハ對價ヲ支拂フトキ

三　直接自己ノ用ニ供セサル借地又ハ其ノ上ニ存スル借地權ヲ收用又ハ買收シタル場合ニ於テ其ノ借地權者ニ補償金又ハ對價ヲ支拂フトキ

四　收用又ハ買收シタル土地ノ殘地ヲ從來用ヰタル目的ニ供シ得ル場合ニ於テ當該土地ノ所有者又ハ借地權者ニ對シ補償金又ハ對價ヲ支拂フトキ

五　現金ヲ以テ補償金又ハ對價ヲ交付スヘキ場合ト雖之ヲ受クヘキ者カ同意シタルトキ

第二條　左ニ揭クル場合ニ於テ支拂フヘキ補償金又ハ對價ハ之ヲ受クヘキ者ノ請求ニ因リ現金ヲ以テ之ヲ交付ス

一　前條第一號ノ場合ニ於テ直接自己ノ用ニ供スル土地ニ付其ノ所有者又ハ借地權者カ換地ノ交付ヲ受ケサリシトキ又ハ換地ノ交付ヲ受ケ若ハ換地ノ交付ト共ニ借地權ニ付換地ノ指定ヲ受ケタルモ之ヲ從來用ヰタル目的ニ供スルコト能ハサルトキ

二　前條第二號乃至第四號ノ場合ニ於テ對價ノ目的タル土地又ハ借地權カ對價ヲ受クヘキ者ノ債務ノ擔保タルトキ但シ當該債務ノ元利支拂ニ要スル金額ヲ限度トス

第三條　第一條第一號乃至第四號ノ場合ニ於テ支拂フヘキ

補償金又ハ對價ハ前條ノ規定ニ依リ交付スル金額ノ外之ヲ受クヘキ者ノ請求ニ因リ一人ニ付五千圓ヲ限リ現金ヲ以テ之ヲ交付ス

第四條　本令ニ於テ借地權トハ地上權、永小作權、賃借權及國有財産法第二十四條ノ規定ニ依リ土地ノ貸付ヲ受クル者ノ權利ヲ謂フ

第五條　國債ノ交付價格ハ時價ヲ參酌シテ大藏大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○米貨公債及英貨公債ノ發行ニ關スル件

●勅令第十七號　大正十三年二月十三日

第一條　政府ハ震災善後公債法第一條及國債整理基金特別會計法第五條ノ規定ニ依リ北米合衆國紐育ニ於テ米貨公債一億五千萬弗及英國倫敦ニ於テ英貨公債二千五百萬磅ヲ發行ス

第二條　前條ノ公債ノ元利金ノ償還及支拂ハ將來特種ノ歲入又ハ資産ヲ擔保トスル公債ヲ發行スル場合ニ於テハ該歲入又ハ資産ヲ以テ之ト同順位ニ擔保セラルルモノトス

第三條　第一條ノ公債ノ發行ニ付テハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○震災ニ因ル喪失無記名國債證券ニ關スル法律

●法律第十四號　大正十三年七月二十二日

第一條　大正十二年九月ノ震災ニ因リ滅失又ハ紛失シタル無記名國債證券ニ對シテハ本法ニ依リ新證券ノ交付又ハ元利金ノ支拂ヲ爲スコトヲ得

第二條　震災ノ當時前條ノ證券ヲ所有シ又ハ占有シタル者ハ本法施行後三月內ニ限リ喪失國債證券審査會ニ其ノ所有シ又ハ占有シタル證券ノ滅失又ハ紛失ニ付査定ヲ求ムルコトヲ得但シ證券ノ名稱不明ナルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

本法施行ノ際外國ニ居住スル者ニ付テハ前項ノ期間ハ之ヲ六月トス

第三條　證券滅失ノ査定ヲ受ケタル者ニ對シテハ政府ハ滅失ヲ査定シタル證券ニ相當スル新證券ヲ交付スルコトヲ得

證券紛失ノ査定ヲ受ケタル者ニ對シテハ政府ハ新證券ノ交付又ハ元利金ノ支拂ニ因リテ生スルコトアルヘキ損失ヲ塡補スル爲確實ナル擔保ヲ提供セシメ又ハ保證人ヲ立テシメ紛失ヲ査定シタル證券ニ相當スル新證券ヲ交付スルコトヲ得

前項ノ擔保及保證人ニ關シテハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第一項及第二項ノ場合ニ於テ證券ノ記號不明ナルモノニ付テハ同一名稱ノ證券中適宜ノ記號ノモノヲ交付スルコトヲ得

第四條　前條ノ規定ニ依リ新證券ノ交付ヲ爲スヘキ場合ニ於テ滅失又ハ紛失シタル證券ノ償還期到來シタルトキハ政府ハ新證券ノ交付ニ代ヘ元利金ノ支拂ヲ爲ス

第五條　紛失ノ査定ヲ受ケタル證券ノ記號又ハ番號不明ナル場合ニ於テ新證券ノ交付又ハ元利金ノ支拂ニ因リ政府ニ損失ヲ生シタルトキハ同一名稱ノ新證券ノ交付ヲ受ケ又ハ之ニ代ヘ元利金ノ支拂ヲ受ケタル者ニシテ記號又ハ番號不明ナル舊證券ニ付紛失ノ査定ヲ受ケタルモノ新證券ノ額面金額又ハ元金額ニ按分シテ其ノ損失ヲ負擔ス

第六條　滅失又ハ紛失シタル同一證券ニ付第二條ノ規定ニ依ル査定ノ請求二以上アリタル場合ニ於テハ新證券ノ交付ハ請求者中震災ノ當時舊證券ヲ占有スヘキ權利アリタル者ニ之ヲ爲ス

滅失又ハ紛失シタル證券ニ付存シタル權利ハ新證券ニ付亦之ヲ行フコトヲ得

前二項ノ規定ハ第四條ノ元利金ニ付之ヲ準用ス

第七條　喪失國債證券審査會ハ審査ノ爲必要アリト認ムルトキハ證人又ハ鑑定人ノ訊問其ノ他ノ證據調ヲ爲スコトヲ得

第八條　喪失國債證券審査會ハ審査ノ爲必要アリト認ムルトキハ宣誓ヲ爲サシメタル上當事者ヲ訊問スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ宣誓ヲ爲シタル者虚僞ノ陳述ヲ爲シタルトキハ三月以上十年以下ノ懲役ニ處ス

前項ノ罪ヲ犯シタル者新證券ノ交付又ハ元利金ノ支拂ヲ受クル前喪失國債證券審査會ニ其ノ事實ヲ申出テタルトキハ其ノ刑ヲ減輕又ハ免除スルコトヲ得

第九條　喪失國債證券審査會ハ第七條及前條第一項ノ規定ニ依ル證據調ヲ裁判所其ノ他ノ官廳ニ囑託スルコトヲ得

第十條　喪失國債證券審査會ノ組織及證據調其ノ他審査ニ關シ必要ナル事項ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條　第一條ノ證券ニシテ震災ノ當時政府ノ保管シタルモノニ付テハ第二條乃至前條ノ規定ニ拘ラス勅令ノ定ムル所ニ依リ新證券ノ交付又ハ元利金ノ支拂ヲ爲スコトヲ得

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（大正十三年九月十三日勅令第二百八號ヲ以テ同年九月十五日ヨリ施行）

○日本銀行ノ手形ノ割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル財政上必要處分ノ件

（參照　本件ハ憲法第七十條ニ依リタルモノニシテ大正十二年十二月帝國議會承諾濟）

●勅令第四百二十四號　大正十二年九月二十七日

政府ハ日本銀行カ左ノ各號ノ一ニ該當スル手形ニシテ大正十四年九月三十日以前ノ滿期日ヲ有スルモノノ割引ヲ爲シ之ニ因リテ損失ヲ受ケタル場合ニ於テ壹億圓ヲ限リ同行ニ對シ其ノ損失ヲ補償スルノ契約ヲ爲スコトヲ得但シ第一號乃至第三號ニ規定スル手形ノ割引ハ大正十三年三月三十一日迄ニ爲シタルモノニ限ル

一　震災地（東京府、神奈川縣、埼玉縣、千葉縣及靜岡縣ヲ謂フ以下同シ）ヲ支拂地トスル手形又ハ震災地ニ震災ノ當時營業所ヲ有シタル者ノ振出シタル手形若ハ之ヲ支拂人トスル手形ニシテ大正十二年九月一日以前ニ銀行ノ割引シタルモノ

二　前號ニ規定スル手形ノ書換ノ爲ニ振出シタル手形

三　前二號ニ規定スル手形又ハ震災地ニ營業所ヲ有スル銀行カ他ノ銀行ニ對シ大正十二年九月一日以前ニ發行シタル預金證書若ハ「コールローン」ノ證書ヲ擔保トシテ銀行ノ振出シタル手形

四　前三號ニ規定スル手形ニシテ日本銀行ノ割引シタルモノノ書換ノ爲ニ振出シタル手形

日本銀行ハ本令ニ依リテ爲ス手形ノ割引ニ付政府ノ監督ヲ受クヘシ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○日本銀行ノ手形割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル法律

●法律第三十五號　大正十四年三月三十一日

（改正　一五年第三三號）

政府ハ日本銀行カ大正十二年勅令第四百二十四號第一項第四號ニ該當スル手形ニシテ大正十四年十月一日ヨリ大正十六年九月三十日迄ノ間ニ於ケル滿期日ヲ有スルモノノ割引ヲ爲シ之ニ因リテ損失ヲ受ケタル場合ニ於テ同行ニ對シ其ノ損失ヲ補償スルノ契約ヲ爲スコトヲ得

前項補償金額ハ大正十二年勅令第四百二十四號ニ依ル補償金額ト合シテ一億圓ヲ超ユルコトヲ得ス

日本銀行ハ本法ニ依リテ爲ス手形ノ割引ニ付政府ノ監督ヲ受クヘシ

附錄

○會計檢査院恒例報告書類提出期限要覽

件名	期限	備考
檢査事務豫定表	十月末日限	（行務監督規程二）　部長ヲ經テ院長ニ提出
檢査事務分掌表	同	（同　二）　同上
每月末檢査濟否報告表	翌月五日限	（同　四）　同上
審査報告書	其ノ都度	（檢査事務規程一）各計算書ニ對スルモノ但シ部長ニ提出
檢査報告揭載事項	其ノ都度但シ翌年度十月十日限	（同二、三）　部會議又ハ總會議ヲ經テ報告委員ニ提出但シ會議ヲ經サルモノハ部長ヲ經テ院長ニ提出
檢査成績書揭載事項	其ノ都度但シ翌年度十一月十日限	（同二、三）　同上
統計材料	翌年度八月末日限	（同　三）　部長ヲ經テ院長ニ提出
檢了報告書	一箇年度分檢了ノ都度	（同　四、一三、一四、一六）歲入徵收額及支出計算書、國債增減計算書、國有財產增減計算書、國庫金運用計算書ニ對スルモノ但シ部長ニ提出
檢査未完了表、未檢了報告書	翌年度十月十日限	（同　四）　九月末日迄ニ前年度計算書ノ一部又ハ全部未檢了ノ場合（前者ハ檢了報告書ニ添附）部長ニ提出
檢査完了金額追報告表	檢査完了ノ都度	（同　四）更ニ檢了報告書ヲ作リ添附部長ニ提出
日本銀行證明ト對照	各課ハ受領ノ都度送付、國庫主管課ハ十五日以內ニ送付	（同五、六）　各課ハ年度開始前支出計算書、最終徵收額計算書、總括支出計算書ヲ國庫主管課ニ送付、報告委員ハ十五日以內ニ決算內譯表ニ記入
右對照後ノ異動處理	準前項	（同　四）更ニ檢了報告書ヲ作リ添附部長ニ提出
歲入檢定及確定報告書揭載事項	翌年度十月五日限	（同　一〇）歲入擔當課ハ會議ヲ經テ租稅主管課ニ送付
檢定及確定報告書	翌年度十月十五日限	（同　一〇、一三）　租稅主管課ハ歲入決算明細書、各課ハ各省決算報告書及各特別會計決定計算書、國債計算書ニ對スルモノ但シ會議ヲ經テ國庫主管課ニ送付

同	同	(同 一四) 國有財產增減及同現在額報告書ニ對スルモノ但シ會議ヲ經テ大藏省主管課ニ送付
檢定報告書	翌年度十月末日限	(同 一六) 國庫金運用計算書ニ對スルモノ但シ會議ヲ經テ報告委員ニ送付
確定報告書	翌年度十月末日限	(同 一一、一五) 國庫主管課ハ總決算及各特別會計決算、大藏省主管課ハ國有財產增減及同現在額總計算書ニ對スルモノ但シ會議ヲ經テ檢定及確定報告書ト共ニ報告委員ニ送付
既往年度未確定金額ニ對スル確定金額追報告表	準前各項	(同 一二)
右確定金額ナキ場合ノ報告	翌年度十月十五日限	(同 一二)
決算確定上生シタル事項處理	翌年度十月末日限	(同 三)
判決報告書	一管理期又ハ一箇年度分完了ノ都度	(同 一七) 出納官吏ノ計算書ニ對スルモノ但シ部會議又ハ總會議ニ提出
同	其ノ都度	(同 一七) 特別ノ必要又ハ會計法第三十六條ノ證明アル場合部會議又ハ總會議ニ提出
再審開始報告書	其ノ都度	(同 二一) 部會議又ハ總會議ニ提出
決定報告書	其ノ都度	(同 二四) 日本銀行、補助又ハ特約保證團體等ノ收支計算書ニ對スルモノ但シ部會議又ハ總會議ニ提出
翌年度十月末日迄ニ判決又ハ決定報告書ヲ提出シ得サル場合ノ處理	翌年度十一月十日限	(同 二五) 部長ニ提出
右完了ニ至ル迄狀況報告	隨時	(同 二五) 同上
委託檢查成績報告書調查書	其ノ都度	(同 二九) 部長ヲ經テ院長ニ提出
統計編成	翌年度十月末日限	(檢查報告及檢查成績書取調規程八) 報告委員ヨリ院長ニ提出
檢查報告書案	翌年度十一月十日限	(同 七) 報告委員ヨリ總會議ニ提出
檢查成績書案	翌年度十二月十五日限	(同 七) 同上

○會計檢查院用字例

上段ノ如ク用例ヲ定ム	
あ	
アル	
充ツル	
新ニ	新タニ
豫メ	豫
當ル	當タル
預ラス	預カラス
改メサル	改タメサル
非サレハ（出席スルニ非サレハ）	
在ラス（此ノ限ニ在ラス）	
在リテハ（官吏ニ在リテハ 府縣ニ於テハ）	
い	
至リ	
謂フ	云フ
雖	雖モ
違反	違背、違犯
以上、以下 二圓以上 以下ハ共ニ二圓ヲ含ム	
う	
受クル	
承クル	承ル
内	内チ
賣拂フ	
惟フニ	
お	
置ク	
終リ（名詞ノトキハ終）	終ハリ
及	及ヒ
及ホサス	及サス
各	各々（々）
同ク	同シク
遲クトモ	遲クモ
於テハ（府縣ニ於テハ 官吏ニ在リテハ）	
……ノ場合ニ於テハ	……ニ在テハ
—、—、—及（又ハ）—	—　—　—及（又ハ）
（大體上ノ用例）	
—及—竝—及—	—竝—及—竝—
か	
關ル	
係ル	
被リ	
掲クル	

か

買入ルル　且　代ル　代フル　兼ネシム　拘ラス　限リ（名詞ハ限）　限ニ在ラス　箇　三箇月　三箇年　三年二箇月　汽關　行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得　訴訟及訴願ヲ提起シタル場合ニ於テハ　關　檢　毎ニ　應ヘ　請ヒ　構

且ツ　代ハル　兼予シム　兼シム　拘ハラス　關ハラス　限リニアラス……ニ非ス　今、今　三月　三年　三箇年二箇月　滾關　行政訴訟ヲ提起ス　行政訴訟ヲ爲スコトヲ得　欠　檢　構

き

け

こ

さ

し

す

せ

そ

た

此ノ之ヲ　超エサル　異リタルコト（……スルコト）　定ムル　避クル　妨ケス　先チ　爲ササル　差出スヘシ　先ニスヘシ　出願　屢　据置ク　乃チ　少クトモ　凡テ　總テ　選擇　其ノ　具フル　備置キ　但シ　直ニ

此之レヲ　超ヘサル　異ナリタル……スル事（コ）　先タチ　爲サヽル　願出　屢シ（々）　少クモ　總テ、都テ　撰擇　其　直チニ

つ

と

な

ね

の

立會ハシム　爲ニ　爲　……スル爲　……補フ爲　ツツ　付テハ　付……スルニ付　就キ……本人ニ就キ　閉ツル　停ムル　倶ニ　共ニ　トキ、トモ　届出ツヘシ　届出テスシテナリ　ナシ　爲ス　仍　尚　竝　願出テサルトキハ　述フル　ノノ

爲メニ　爲メ　……スルカ爲メ　……補フカ爲メ　宛　付キテハ　時　迄　届出ヘシ　届出スシテ　無シ　ナス　仍ホ　尚ホ　竝ニ、並ニ、幷ニ　願出サルトキハ　ノ、

は

ひ

ふ

へ

ほ

ま

の

延ハス　……スルノ權利　……スルノ必要　……ヲ除クノ外　初　始ニ　始リ（始名詞ノトキハ）　均シク　久シキ　引續キ　再ヒ　何分ノ一　附寄附理由ヲ附ス　付交付議ニ付ス　ヘシ　「ヘシ」ヲ主トス　本法、本令　儘　迄　亦　益

延ス　……スル權利　……スル必要　……ヲ除ク外　初メ　始メニ　始マリ　均ク、等シク　久キ　引續　再タヒ　何分一　寄付理由ヲ付ス　交附議ニ附ス　可シ　スヘシ　スルコトヲ要ス（要件タル場合）　此ノ法律、此ノ勅令　マヽ　マテ、迄　モ亦、亦タ　益ヽ

まみ

免ルル
認メラル
自ラ
看做ス
……セムトスルトキ
以テ
戻入ルル
求ムル
求ニ
モノ
者
申立ツル
最
用ヰ
用ウ
基キ
基ケル
若
若ハ
「又ハ」ヲ以テ連續シタルモノノ内譯ヲ要スルトキハ「若ハ」ヲ用ウ
已ム
讓渡シ
讓受ケ

むも

免ル
自カラ
見做ス
……セントスルトキ
最モ
用ユ
基ツキ
基ツケル
若シ
若クハ

やゆ

ゆよ

讓渡スル
依リ
由リ
因リ
因リテ
入ルル
分チテ
金錢以外ノ數字ハ
一、二、三、十
金錢ニ關スル數字ハ
壹、貳、參、拾
（參照）
法制局用字左ノ如シ
一、二、三、十、萬、圓

るわ

因テ
入ル、
分チ
壹、貳、參、拾、万、円

○度量衡換算表

第一表（尺貫法標準）

日本	メートル法
毛 尺ノ一萬分ノ一	ミリメートル 〇、〇三〇三〇
厘 尺ノ千分ノ一	ミリメートル 〇、三〇三〇三
分 尺ノ百分ノ一	ミリメートル 三、〇三〇三〇
寸 尺ノ十分ノ一	センチメートル 三、〇三〇三〇
尺 メートルノ三十三分ノ十	デシメートル 三、〇三〇三〇 メートル 〇、三〇三〇三
丈 十尺	メートル 三、〇三〇三〇
間 六尺	メートル 一、八一八一八
町 三百六十尺	メートル 一〇九、〇九〇九一
里 一萬二千九百六十尺	メートル 三九二七、二七二七三 キロメートル 三、九二七二七
地積 勺 歩ノ百分ノ一	アール 〇、〇〇〇三三
地積 合 歩ノ十分ノ一	アール 〇、〇〇三三一
地積 歩又ハ坪 三十六平方尺	アール 〇、〇三三〇六
地積 畝 三十歩	アール 〇、九九一七四

日本	メートル法
地積 段 三百歩	アール 九、九一七三六
地積 町 三千歩	ヘクタール 〇、九九一七四
勺 升ノ百分ノ一	ミリリットル 一八、〇三九〇七
合 升ノ十分ノ一	デシリットル 一、八〇三九一
升 リットルノ千三百三十一分ノ二千四百一	リットル 一、八〇三九一
斗 十升	リットル 一八、〇三九〇七
石 百升	リットル 一八〇、三九〇六八 ヘクトリットル 一、八〇三九一
毛 貫ノ百萬分ノ一	ミリグラム 三、七五〇〇〇
厘 貫ノ十萬分ノ一	ミリグラム 三七、五〇〇〇〇
分 貫ノ一萬分ノ一	ミリグラム 三七五、〇〇〇〇〇
匁 貫ノ千分ノ一	グラム 三、七五〇〇〇
貫 キログラムノ四分ノ十五	キログラム 三、七五〇〇〇
斤 百六十匁	キログラム 〇、六〇〇〇〇

第二表（メートル法標準）

メートル法　日本

度			
	ミリメートル　粍	メートルノ千分ノ一	厘　三、三〇〇〇〇
	センチメートル　糎	メートルノ百分ノ一	分　三、三〇〇〇〇
	デシメートル　粉	メートルノ十分ノ一	寸　三、三〇〇〇〇
	メートル　米		尺　三、三〇〇〇〇
	キロメートル　千メートル		閧　五五、〇〇〇〇〇 町　閧　九、一〇〇、〇〇〇
地積	アール　歩ノ四分ノ百二十一		畝　歩　三〇、二五〇〇 畝　歩　一〇、二五〇〇
地積	ヘクタール　百アール		町　一、〇〇八三三 町　歩　一、二五、〇〇〇

衡			
量	ミリグラム　毛	キログラムノ百萬分ノ一	毛　〇、二六六七
	グラム　瓦	キログラムノ千分ノ一	分　二、六六六七
	キログラム　瓩	貫ノ十五分ノ四	瓲　〇、二六六七
	メートルトン　噸		瓲　〇、二六六七
	ミリリツトル　竰	リツトルノ千分ノ一	勺　〇、〇五五四四
	デシリツトル　坊	リツトルノ十分ノ一	合　〇、五五四三五
	リツトル　立	升ノ二千四百〇一分ノ千三百三十一	升　〇、五五四三五
	ヘクトリツトル	百リツトル	石　〇、五五四三五

第三表（日本ヤードポンド法標準）

日本採用「ヤード、ポンド」法　日本

度			
	インチ　吋	ヤードノ三十六分ノ一	寸　〇、八三八一〇
	フート　呎	ヤードノ三分ノ一	尺　一、〇〇五、八四
	ヤード　碼	メートルノ千二百五十分ノ千二百四十三	尺　三、〇一七五二
	チエーン　鎖	二十二ヤード	尺　六六、三八五四 閧　六六、三八五四
	マイル　哩	千七百六十ヤード	町　閧　尺　五三一、〇、八三五 一四、四五、〇、八三五 里　〇、四〇九七九

衡			
量	ガロン	リツトルノ六千五十五萬分ノ二億五千百九十二萬二千五百十三	升　二、〇九八四六
	グレーン	ポンドノ七千分ノ一	厘　一、七二八〇〇
	オンス	ポンドノ十六分ノ一	匁　七、五六〇〇〇
	ポンド　封度	キログラム千二百五十分ノ五百六十七	匁　一二〇、九六〇一五
	トン　噸（英トン）	二千二百四十ポンド	貫　二七〇、九五〇六二

○各會計名及收支整理期間一覽（大正十五年七月一日現在）

所管別	會計名	法令	小切手振出	日本銀行取扱	備考
		支出	國庫内移換支出	定額戻入	歲出金支拂	
内務省所管	一般會計	大正一〇、四、八法律	翌四年度四月三十日限	翌五年度五月三十一日迄	翌五年度四月三十日迄	本會計法ハ大正十六年一月一日ヨリ施行
	特別會計					
外務省所管	對支文化事業	大正一二、三、三一法律				
内務省所管	健康保險	大正一五、三、二九法律	翌四年度四月三十日迄	翌五年度五月三十一日限	翌五年度四月三十日迄	
大藏省所管	造幣局（資金部）	大正四、六、二一法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	明治三二、三、二八法律第三〇號ヲ以テ新設
	印刷局	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	
	專賣局	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	
	大藏省預金部	大正一四、三、三〇法律			翌年度四月三十日迄	
	教育基金	明治三三、三、三〇法律			翌年度四月三十日迄	
	國債整理基金	明治三九、三、二法律			翌年度四月三十日迄	
	公債金	大正八、三、二五法律			翌年度四月三十日迄	
	賠償金	大正九、八、三法律			翌年度四月三十日迄	
	國有財産整理資金	大正一一、三、二八法律			翌年度四月三十日迄	
	教育改善及農村振興基金	大正一四、三、三〇法律			翌年度四月三十日迄	
	朝鮮總督府	明治四三、九、三〇勅令第三〇六			翌年度四月三十日迄	

	朝鮮鐵道用品資金	大正一四、三、三〇法律	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限					
	臺灣總督府	明治三〇、三、二六法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					
	臺灣官設鐵道用品資金	明治三五、三、八法律	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限					
	關東廳	明治四〇、三、一七法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					
	樺太廳	明治四〇、三、二〇法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					
	南洋廳	大正一一、三、三一法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					
陸軍省所管	陸軍造兵廠	明治三三、一八法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	大正一二、三、一七、法律第七號ヲ以テ東京大阪砲兵工廠ヲ陸軍造兵廠ニ改ム
	千住製絨所	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	
海軍省所管	海軍工廠資金	明治三八、二、一六法律		當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	
	海軍火藥廠	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	
	海軍燃料廠	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	明治三九、三、二一、法律第一號ヲ以テ海軍採炭所ヲ置キ大正一〇、三、三〇、法律第八號ヲ以テ海軍燃料廠ト改ム
文部省所管	帝國大學（資金部）	大正一〇、三、三〇法律		翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	
	官立大學	大正一〇、三、三〇法律		翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	
	學校及圖書館（資金部）	明治四〇、三、二七法律		翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	
農林省所管	米穀需給調節	大正一〇、四、四法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	明治三二、一、八法律第二號ヲ以テ新設シ大正一五、三、三一法律第四六號ヲ以テ製鐵所特別會計ヲ公布シ大正一六年度ヨリ施行
商工省所管	製鐵所	明治三三、三、一八法律	當該年度三月三十一日限	翌年度四月三十日迄	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	當該年度三月三十一日限	
遞信省所管	簡易生命保險	大正五、七、一〇法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					
	郵便年金	大正一五、三、三〇法律	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄					本會計法ハ施行期日未公布

鐵道省所管	帝國鐵道資本勘定（用品勘定）收益勘定	明治四二、三、二六法律	翌年度四月三十日限	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄	翌年度四月三十日迄			

一　特別會計ニシテ整理期間ノ記載ナキモノハ一般會計ニ準據ス

一　作業益金及資金ノ過剰金ニ關シテハ大正十一年三月大藏大臣達藏第三五五〇號國庫內移換手續ニ依リ小切手ヲ振出サス移換請求書ヲ日本銀行ニ送付スル取扱アリ

一　出納官吏及出納員ノ歲入金收納ハ翌年度四月三十日限

一　出納官吏ノ支拂ハ翌年度四月三十日限

一　帝國鐵道會計歲入歲出金出納ニシテ左記ノ場合ハ翌年度五月三十一日迄之ヲ出納ヲ爲スコトヲ得

一　出納官吏ノ領收シタル歲入金ヲ日本銀行ニ拂込ムトキ

二　繰替拂ヲ爲シタル金額ニ對シ小切手ヲ振出ストキ

三　鐵道益金若ハ用品勘定過剰金ヲ資本勘定ニ繰入ルルトキ又ハ用品資金補足金ヲ用品勘定ニ繰入ルルトキ

一　日本銀行受入ニシテ左記ノ場合ハ翌年度五月三十一日迄之カ受入ヲ爲スコトヲ得

一　出納官吏ヨリ其ノ領收シタル歲入金ノ拂込アリタルトキ

二　市町村又ハ之ニ準スヘキモノヨリ其ノ收納シタル歲入金ノ送付アリタルトキ

三　國庫內ニ於テ移換ニ依ル歲入金ノ受入ヲ爲ストキ

○廢止規程件名一覽

舊會計檢查法規所揭ノモノニシテ大正十二年一月一日以降廢止ニ係ルモノヲ揭ク

○太政官布告

一 預金規則（明治十八年五月三十日太政官布告第十三號）
大正十四年三月三十日法律第二十五號（預金部預金法）附則ヲ以テ大正十四年四月一日ヨリ廢止

○法律

一 【預金局】預金、郵便貯金、郵便爲替金、郵便取立金特別會計（明治二十三年三月十八日法律第二十一號）
大正十四年三月三十日法律第十三號（大藏省預金部特別會計法）附則ヲ以テ大正十四年度ヨリ廢止

一 官吏恩給法（明治二十三年六月二十一日法律第四十三號）

一 官吏遺族扶助法（明治二十三年六月二十一日法律第四十四號）

一 官吏恩給法及官吏遺族扶助法補則（明治二十九年三月三十日法律第三十六號）
大正十二年四月十四日法律第四十八號（恩給法）附則ヲ以テ大正十二年十月一日ヨリ廢止

一 在外國帝國專管居留地特別會計法（明治三十三年三月一日法律第二十二號）
大正十四年三月三十日法律第二十號ヲ以テ大正十三年度限リ廢止

一 陸軍營繕費補充資金特別會計法（明治四十一年三月三十一日法律第四十號）
大正十四年三月三十日法律第十六號ヲ以テ大正十三年度限リ廢止

一 朝鮮醫院及濟生院特別會計法（明治四十五年三月二十八日法律第六號）
大正十四年三月三十日法律第十九號ヲ以テ大正十三年度限リ廢止

一 臨時國庫證券收入金特別會計法（大正六年七月二十一日法律第八號）
大正十四年三月三十日法律第十五號ヲ以テ大正十三年度限リ廢止

一 東京帝國大學及京都帝國大學臨時政府支出金ニ關スル法律（大正八年三月二十五日法律第十二號）
大正十四年三月三十日法律第十七號（大學特別會計法中改正ノ件）附則ヲ以テ大正十四年度ヨリ廢止

○勅令

一 文官判任以上ノ者退官賜金ノ件（明治二十三年六月二十一日勅令第九十八號）
大正十二年四月十四日法律第四十八號（恩給法）附則ヲ以テ大正十二年十月一日ヨリ廢止

一 官吏遺族扶助法納金收入規則（明治二十三年七月十四日勅令第百二十五號）
大正十二年十月九日勅令第四百三十九號（恩給金額分擔及國庫納金收入等取扱規則）附則ヲ以テ大正十二年十月九日

ヨリ廢止

一 臘虎及膃肭獸ノ獸皮賣却隨意契約ノ件（大正二年九月二十二日勅令第二百八十號）

大正十二年六月七日勅令第二百九十九號（政府ニ於テ物品ノ販賣ヲ問屋業者ニ委託スルコトヲ得ル場合ニ關スル件）附則ヲ以テ大正十二年六月七日ヨリ廢止

一 種緬羊ノ賣買及貸渡隨意契約並無償付與ノ件（大正六年十月勅令第二百三十三號）

大正十四年一月十二日勅令第一號（種牡牛、種牡馬及種緬羊竝種緬羊ノ果實讓與ノ件）附則ヲ以テ大正十四年一月十二日ヨリ廢止

一 特殊財產管理局ノ管理財產中現金ノ取扱ニ關スル件（大正九年七月十五日勅令第二百十四號）

大正十二年八月二十九日勅令第三百八十九號（特殊財產ノ現金ニ對シ利子ヲ附スルノ件）附則ヲ以テ大正十二年八月二十九日ヨリ廢止

一 非常徵發令（大正十二年九月二日勅令第三百九十六號）

大正十三年七月十八日法律第七號ヲ以テ大正十三年七月十八日ヨリ廢止

一 臨時震災救護事務局官制（大正十二年九月二日勅令第三百九十七號）

大正十三年三月二十九日勅令第五十五號ヲ以テ大正十三年三月三十一日限リ廢止

一 帝都復興審議會官制（大正十二年九月十九日勅令第四百十八號）

大正十三年二月二十五日勅令第二十四號ヲ以テ大正十三年二月二十五日ヨリ廢止

一 臨時物資供給令（大正十二年九月二十二日勅令第四百二十號）

一 臨時物資供給特別會計令（大正十二年九月二十二日勅令第四百二十一號）

大正十二年十二月二十四日勅令第五百九號勅令第五百十號ヲ以テ將來ニ向テ其ノ效力ヲ失フ

一 帝都復興院官制（大正十二年九月二十七日勅令第四百二十五號）

大正十三年二月二十五日勅令第二十五號ヲ以テ大正十三年二月二十五日ヨリ廢止

一 臨時營繕局官制（大正十二年十月一日勅令第四百三十四號）

大正十四年四月一日勅令第六十八號ヲ以テ大正十四年四月一日ヨリ廢止

○閣令

一 臨時物資供給令第一條第二項ノ規定ニ依ル物資ノ品目指定ノ件（大正十二年十一月七日閣令第九號）

大正十二年十二月二十四日閣令第十一號ヲ以テ臨時物資供給令失效ノ日限リ之ヲ廢止

○省令

一 臨時物資供給令ノ規定ニ依ル物資ノ品目指定ノ件（大正十二年九月二十二日農商務省令臨第二號）

大正十二年十一月七日閣令第九號（臨時物資供給令第一條第二項ノ規定ニ依ル物資品目指定ノ件）附則ヲ以テ大正十二年十一月七日ヨリ廢止

一 大正十二年勅令第四百六號ニ依リ會計規則ニ對スル特例（契約方法、契約書作成及代價部分拂ニ關シ會計規則ノ規定ニ對スル特例）（大正十二年十月二十日大藏省令第二十四號）

大正十三年十月二日大藏省令第二十三號ヲ以テ大正十三年十月十五日ヨリ廢止

○會計檢查院內達

一 物價取調規程（明治三十三年六月十八日院內達第十二號）

大正十三年七月二十五日院內達第七號（院長官房事務分掌規程）附則ヲ以テ大正十三年八月一日ヨリ廢止

○會計檢查院長決裁

一 證憑書類廢棄手續（明治三十三年五月八日院長決裁）

大正十三年七月二十五日院內達第六號（文書取扱規程）附則ヲ以テ大正十三年八月一日ヨリ廢止

大正十五年七月二十一日印刷
大正十五年七月二十四日發行

定價金貳圓五拾錢

編纂者　會計檢査院長官房
發行者　朝陽會長　池田敬八
印刷者　內閣印刷局
發行所　朝陽會
東京市麹町區大手町二丁目二番地內閣印刷局內

會計檢查法規集加除篇

第四號

凡例

一本書ハ會計檢査法規集ノ追錄トシテ昭和四年七月二日ヨリ昭和六年七月一日迄ニ公布セラレタル新法又ハ改廢ニ係ルモノヲ追加補正スル爲ニ發行セリ

一加除ハ左記整理表ニ依リ差替ヲ爲スモノトス

昭和六年七月

會計檢査院長官房調査科

加除整理表

章別	除頁	枚數	加頁	枚數
目次	自一 至二〇	一〇	自一 至二〇	一〇
第二章	四〇ノ二、四〇ノ三	一	四〇ノ二、四〇ノ三	一
同	六六ノ二	一	六六ノ二	一
第三章	自九三ノ三 至九四ノ三	二	自九三ノ三 至九四ノ三	二
同	自九四ノ二八 至九四ノ三三	三	自九四ノ二七ノ四 至九四ノ三三	五
同	九四ノ三六、 九四ノ三七	一	九四ノ三六、 九四ノ三七	一
同	自九四ノ四二 至九四ノ四五	二	自九四ノ四二 至九四ノ四五	二
第五章	一八七、一八八	一	一八七、一八八	一

章別	除頁	枚數	加頁	枚數
第三章	一〇五、一〇六	一	自一〇四ノ二 至一〇六	二
同	自一〇七 至一一〇	二	自一〇六ノ四 至一一〇	三
同	一一六ノ二、 一一六ノ三	一	一一六ノ二、 一一六ノ三	一
同	自一三九 至一四六	八	自一三九 至一四六	八
同	自一五四ノ六 至一五四ノ九	二	自一五四ノ六 至一五四ノ九	二
第四章	自一五五 至一五六ノ三	二	自五五 至一五六ノ三	二
第五章	一八七、一八八	一	一八七、一八八	一

章別	除頁	枚數	加頁	枚數
第五章	自一九〇ノ二 至一九〇ノ五	二	自一九〇ノ二 至一九〇ノ五	二
第六章	除頁ナシ		二八二ノ二	一
第七章	自三〇一 至三〇四	二	自三〇一 至三〇四	二
同	三〇七	一	三〇七、三〇八	一
同	自三一六ノ二 至三一八	二	自三一六ノ二 至三一八	二
同	三一八ノ一二、 三一八ノ一三	一	三一八ノ一二、 三一八ノ一三	一
同	三一九、三二〇	一	三一九、三二〇	一
第八章	三三五、三三六	一	三三五、三三六	一
第九章	自三三七 至三四〇	二	自三三七 至三四〇	二
同	自三四四ノ二 至三四六	二	自三四四ノ二 至三四六	二
同	自三五〇ノ二 至三五四	三	自三五〇ノ二 至三五四	三
同	自三五九 至三六二	二	自三五九 至三六二	二
同	自三六五 至三七〇	三	自三六五 至三七〇	三
同	自三七七 至三八〇	二	自三七七 至三八〇	二
同	自三八一 至三八四	二	自三八一 至三八四	二
同	自三八五 至三九〇	二	自三八五 至三九〇	二
同	自三九一 至三九四	二	自三九一 至三九四	二
同	自三九五 至三九八	二	自三九五 至三九八	二
同	自三九九 至四〇二	二	自三九九 至四〇二	二
同	自四〇三 至四〇六	二	自四〇三 至四〇六	二
同	自四〇七 至四一〇	二	自四〇七 至四一〇	二
同	自四一一 至四一四	二	自四一一 至四一四	二
同	自四一五 至四一八ノ二	二	自四一五 至四一八ノ二	二
同	自四一八ノ二 至四一八ノ五	二	自四一八ノ二 至四一八ノ五	二

章別	除頁	枚數	加頁	枚數
第九章	四二三、四二四	一	四二三、四二四	一
第十章	自四三一 至四三六ノ三	四	自四三一 至四三六ノ三	四
同	四四七、四四八	一	四四七、四四八	一
同	四五四ノ二、 四五四ノ三	一	四五四ノ二、 四五四ノ三	一
同	四五六ノ二、 四五六ノ三	一	自四五六ノ二 至四五六ノ三ノ二	二
同	四五七、四五八	一	四五七、四五八	一
同	四六二ノ二、 四六二ノ三	一	自四六二ノ二 至四六二ノ三ノ二	二
第十二章	自四七五 至四七八	二	自四七五 至四七八	二
同	自四八五 至四八八	二	自四八五 至四八七	二
同	自五〇〇ノ二 至五〇〇ノ五	二	自五〇〇ノ二 至五〇〇ノ五	六
同	自五〇五 至五〇八	二	自五〇五 至五〇八	二
同	五一〇ノ四、 五一〇ノ五	一	五一〇ノ四、 五一〇ノ五	一
同	除頁ナシ		自五一〇ノ二 至五一〇ノ五ノ一〇	五
第十三章	自五一五 至五二六	六	五一五、五一六	一
同	自五二六ノ四 至五三〇	三	自五二六ノ四 至五三〇	四
附錄	自五三九 至五四一	二	自五三九 至五四一	二

會計檢查法規集

目次

第一章　憲法及皇室典範

一　大日本帝國憲法（明治二二）……一頁
一　皇室典範（明治二二）……八

第二章　會計檢查院諸法規

一　會計檢查院法（明治二二、法律一五）……一五
一　會計檢查院事務章程（明治二二、勅令四五七）……一七
一　會計檢查院事務章程第三十三條ニ依ル亡失、辨償、私訴ニ關シ報告方各省大臣ヘ要求ノ件（明治三三、送六二四照會）……二〇
通牒）……二〇
一　經費仕拂上被詐取ノ事實發見ノトキ報告方各省大臣ヘ照會ノ件（明治三五、送六二四照會）……二〇
一　會計檢查院事務章程第三十三條及委託檢查取扱順序第三號ニ依ル報告若ハ出納官吏保管ニ係ル現金又ハ物品ヲ亡失毀損ノ事實アルトキノ處理方ノ件（昭和四、院長決裁）……二〇ノ二
一　有責任判決追調簿ニ登記方ノ件（昭和四、院長決裁）……二〇ノ二
一　會計檢查院各部課管理事務（昭和三、院內達一）……二一

一 國有財産整理資金各部課管理事務(大正一一、院長決裁)……二一
一 院長官房事務分掌規程(大正一三、院内達七)……二一
一 檢査報告及檢査成績書取調規程(大正一一、院内達五)……二二
一 檢査事務規程(大正一一、院内達四)……二三
一 委託檢査取扱順序(明治三五、送二六四通牒)……二三
一 檢査事務規程第十七條ニ依ル朝鮮臺灣關東州及樺太等ニ於ケル出納官吏計算書ノ判決報告書中所管廳ノ記載方ニ關スル件(大正一三、第三部長決裁)……四〇ノ一
一 檢査事務規程第二十一條ニ依リ再審ヲ開始セサル報告書作製ノ場合取扱方ノ件(昭和三、院長決裁)……四〇ノ二
一 再審判決決定後ニ於ケル處理方ノ件(昭和四、院長決裁)……四〇ノ三
一 檢査事務規程第二十四條ニ依ル通牒書案ノ處理方ニ關スルノ件(大正一二、院長決裁)……四〇ノ三
一 檢査事務規程第二十四條中所管大臣解釋ノ件(大正一四、院長決裁)……四〇ノ三ノ二
一 檢査事務規程第二十九條ニ依ル委託檢査成績報告書ニ對スル調査報告書ニ關スル件(大正一三、院長決裁)……四〇ノ三ノ二
一 震火災ノ爲計算證明ヲ爲スコト能ハサル出納官吏ニ對スル檢査及判決據置報告書ニ關スル件(大正一三、院長決裁)……四〇ノ三ノ三
一 震火災ノ爲計算證明ヲ爲スコト能ハサル出納官吏ノ檢査及判決據置ニ伴フ通牒書ニ關スル件(大正一三、院長決裁)……四〇ノ四
一 判決報告書中改元ニ基ク會計年度ノ記載方ノ件(昭和二、院長決裁)……四〇ノ五
一 昭和三年勅令第二百七十六號出納官吏ノ辨償責任免除ニ關スル取扱方ノ件(昭和三、略總一五)……四〇ノ六
一 部會議議決事項(大正一一、院内達七)……四一
一 議事細則(大正一一、院内達八)……四二
一 行務監督規程(大正一一、院内達六)……四二
一 文書取扱規程(大正一三、院内達六)……四四
一 ……五五

一 會計檢査院勅任檢査官及書記定員ノ件(明治四三、勅令一一三)……六三
一 會計檢査官任用資格ノ件(明治二二、勅令八〇)……六三
一 會計檢査官退官ニ關スル法律(明治二九、法律九一)……六三
一 會計檢査官懲戒法(明治三三、法律二一)……六四
一 職員休暇規程(大正一三、院内達五)……六六ノ二
一 旅費減給ニ關スル件(昭和五、院内達二)……六六ノ二

第三章　會計法及會計規則

第一節　一般會計

一 會計法(大正一〇、法律四二)……六七
一 會計規則(大正一一、勅令一)……七一
一 國産奬勵ノ爲ノ會計法ノ特例ニ關スル法律(昭和二、法律四一)……九三ノ二
一 昭和二年法律第四十一號國産奬勵ノ爲ノ會計法ノ特例ニ關スル件(昭和二、勅令三七三)……九三ノ二
一 大藏大臣ノ承認ヲ經ルニ非サレハ他ノ費途ノ金額ヲ流用スルコトヲ得サル費途ノ件(大正二、勅令三〇五)……九三ノ三
一 會計規則及各特別會計規則ノ規定ニ依リ調製スルコトヲ要スル帳簿ノ樣式及記入ノ方法竝書類ノ樣式(大正一一、大藏省令二〇)……九四
一 會計法規ニ基ク出納計算ノ數字及記載事項ノ訂正ニ關スル件(大正一一、大藏省令四三)……九五
一 歲入年度等誤謬ノ場合訂正手續(大正一一、大藏省令三八)……九六
一 借入金整理ニ關スル法律(昭和四、法律二七)……九六
一 入札又ハ契約ノ保證金ニ關スル件(明治四三、勅令三四〇)……九六
一 政府ニ納ムヘキ保證金其ノ他ノ擔保ニ充用スル國債ノ價格ニ關スル件(明治四一、勅令二八七)……九七
一 國庫出納金端數計算法(大正五、法律二)……九七

一　國庫出納金端數計算法第五條第二項ニ依ル命令ノ件（大正五、勅令五六）……九八
一　國庫出納金端數計算法第二條ニ依リ課稅標準額計算上圓位未滿ノ端數ヲ切捨ツヘキ國稅指定（大正五、大藏省令二）……九八
一　政府ノ債務ニ對シ差押命令ヲ受クル場合會計上ノ規程（明治二六、勅令二六一）……九八

第二節　特別會計

第一款　通則

一　作業會計法（明治二三、法律一七）……一〇一
一　作業會計規則（大正一一、勅令三四）……一〇二
一　特別會計ノ第一豫備金支出ニ關スル件（明治三〇、勅令一一八）……一〇四ノ二
一　特別會計恩給負擔金ヲ一般會計ニ繰入ルルコトニ關スル法律（昭和六、法律八）……一〇四ノ二
一　特別會計ニ於ケル營繕費ニ關スル法律（昭和六、法律九）……一〇四ノ二

第二款　外務省所管

一　對支文化事業特別會計法（大正一二、法律三六）……一〇五

第三款　內務省所管

一　健康保險特別會計法（大正一五、法律二六）……一〇六
一　健康保險特別會計規則（昭和元、勅令四）……一〇六ノ二
一　勞働者災害扶助責任保險特別會計法（昭和六、法律五六）……一〇六ノ四

第四款　大藏省所管

一　造幣局特別會計法（大正四、法律九）……一〇七
一　造幣局特別會計規則（大正五、勅令七五）……一〇八
一　造幣局据置運轉資本增加及設備擴張費ニ關スル法律（大正八、法律九）……一〇九
一　專賣局作業會計規則（明治三三、勅令二〇）……一一〇
一　專賣局据置運轉資本補足ニ關スル法律（明治三八、法律一七）……一一二
一　大藏省預金部特別會計法（大正一四、法律一三）……一一三
一　大藏省預金部特別會計規則（大正一四、勅令五四）……一一三
一　教育基金特別會計法（明治三二、法律八〇）……一一四
一　國債整理基金特別會計法（明治三九、法律六）……一一五
一　公債金特別會計法（大正八、法律一五）……一一六
一　賠償金特別會計法廢止法律（昭和六、法律七）……一一六ノ二
一　國有財產整理資金特別會計法（大正一一、法律六）……一一六ノ三
一　國有財產整理資金特別會計法ノ特例ニ關スル法律（昭和二、法律一五）……一一七
一　國有財產整理資金特別會計法ノ特例ニ關スル法律（大正一四、法律一四）……一一八（自一一九至一二八缺）

第五款　陸軍省所管

一　陸軍作業會計法（明治二三、法律一八）……一三〇
一　東京砲兵工廠及大阪砲兵工廠ノ各特別會計合併ニ關スル法律（大正一二、法律七）……一三〇
一　東京大阪兩砲兵工廠ノ据置運轉資本增加ニ關スル法律（大正五、法律二三）……一三一
一　千住製絨所据置運轉資本增加ニ關スル法律（明治三〇、法律四）……一三一
一　千住製絨所据置運轉資本增加ニ關スル法律（明治四〇、法律一六）……一三一

第六款　海軍省所管

一　海軍工廠資金會計法（明治三八、法律一五）……一三一
一　海軍工廠資金會計規則（明治三八、勅令五一）……一三二

第七款　文部省所管

一　大學特別會計法（大正一〇、法律一一）……一三三
一　大學特別會計規則（大正一〇、勅令八一）……一三五
一　學校及圖書館特別會計法（明治四〇、法律二三）……一三七
一　學校及圖書館特別會計規則（明治四〇、勅令六〇）……一三八

第八款　農林省所管

一　米穀需給調節特別會計法（大正一〇、法律三七）……一四〇
一　米穀需給調節特別會計規則（大正一〇、勅令二二四）……一四〇ノ二
一　家畜再保險特別會計法（昭和四、法律一一）……一四〇ノ三
一　家畜再保險特別會計規則（昭和四、勅令三三）……一四一

第九款　商工省所管

一　製鐵所特別會計法（大正一五、法律四六）……一四二
一　製鐵所特別會計規則（大正一五、勅令三五一）……一四二ノ三
一　製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部ノ橫濱正金銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル法律（昭和

四、法律二八）……一四四ノ二
一　製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部又ハ日本銀行ノ橫濱正金銀行又ハ株式會社日本興業銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル法律（昭和五、法律三）……一四四ノ二

第十款　遞信省所管

一　簡易生命保險特別會計法（大正五、法律四三）……一四四ノ三
一　簡易生命保險特別會計規則（大正五、勅令二〇八）……一四五
一　郵便年金特別會計法（大正一五、法律四〇）……一四六
一　郵便年金特別會計規則（大正一五、勅令二八二）……一四六ノ二

第十一款　鐵道省所管

一　帝國鐵道會計法（明治四二、法律六）……一四七
一　帝國鐵道會計規則（大正一一、勅令三八）……一四九

第十二款　拓務省所管

一　朝鮮總督府特別會計ニ關スル件（明治四三、勅令四〇六）……一五三
一　朝鮮總督府特別會計規則（明治四三、勅令四〇七）……一五三
一　朝鮮鐵道用品資金會計法（大正一四、法律一八）……一五四ノ二
一　朝鮮鐵道用品資金會計規則（大正一四、勅令四八）……一五四ノ二
一　朝鮮簡易生命保險特別會計法（昭和四、法律六五）……一五四ノ四
一　朝鮮簡易生命保險特別會計規則（昭和四、勅令一〇六）……一五四ノ四
一　臺灣總督府特別會計法（明治三〇、法律二）……一五四ノ五

臺灣總督府特別會計規則(明治三〇、勅令二七)……一五四ノ五
臺灣官設鐵道用品資金會計法(明治三五、法律一三)……一五四ノ七
臺灣官設鐵道用品資金會計規則(明治三五、勅令一四〇)……一五四ノ七
關東廳特別會計法(明治四〇、法律一七)……一五四ノ八
樺太廳特別會計法(明治四〇、法律一八)……一五四ノ九
關東廳及樺太廳特別會計規則(明治四〇、勅令八七)……一五四ノ九
南洋廳特別會計法(大正一一、法律二五)……一五四ノ一一
南洋廳特別會計規則(大正一一、勅令一三一)……一五四ノ一一

第四章　物品會計

物品會計規則(明治二二、勅令八四)……一五五
物品會計規則第一條第二項ニ依ル各省大臣ノ指定物品(各省通牒及達)……一五六ノ二
陸軍兵備品會計規則(明治二四、勅令二二)……一五六ノ三
海軍兵備品會計規則(明治二四、勅令六四)……一五七
陸海軍出師準備ニ屬スル物品檢查ノ件(明治二三、法律七〇)……一五八

第五章　國有財產

國有財產法(大正一〇、法律四三)……一五九
國有財產法施行令(大正一一、勅令一五)……一六二
國有財產法施行規則(大正一一、大藏省令一四)……一六六ノ三
外國官廳ノ用地トシテ貸付スル國有財產ニ關スル法律(昭和二、法律一)……一六七

大藏省所管國有財產取扱規程(大正一一、大藏省訓令一八)……一六八
雜種財產取扱規程(大正一五、大藏省訓令一二)……一八七
官舍貸渡規則(明治九、太政官達五三)……一九〇
官舍貸渡內規(明治二一、內閣達)……一九〇ノ二
朝鮮官有財產管理規則(明治四四、勅令二〇〇)……一九一
臺灣官有財產管理規則(明治三五、勅令三九)……一九三
樺太官有財產管理規則(明治四四、勅令二八九)……一九五
南洋廳所轄ノ國有財產ノ管理ニ關スル件(大正一一、南洋廳令一四)……一九八
北海道國有未開地處分法(明治四一、法律五七)……一九八
樺太國有未開地特別處分令(明治四四、勅令二九〇)……二〇〇
樺太ニ於ケル土地及森林原野ノ產物ノ無償貸付又ハ讓與ニ關スル件(大正四、勅令八六)……二〇二
國有林野法(明治三二、法律八五)……二〇二
北海道國有林野及產物處分令(明治四一、勅令二八六)……二〇五
沖繩縣國有林野特別處分ニ關スル件(明治三九、勅令一九一)……二〇六
朝鮮國有森林未墾地及森林產物特別處分令(大正元、勅令六)……二〇七
臺灣官有森林原野及產物特別處分令(明治二九、勅令三一一)……二〇八
樺太國有森林原野產物特別處分令(明治四四、勅令二九七)……二〇九

第六章　計算證明規程

計算證明規程(大正一一、會計檢查院達一)……二一一
大正十二年勅令第四百二十四號ニ依ル日本銀行手形割引ニ關スル計算書樣式(大正一二、送八三九照會)……二八一
昭和二年法律第五十五號及第五十六號ニ依ル日本銀行特別融通ニ關スル計算書樣式(昭和二、普二三照會)……二八二

一 昭和四年法律第十四號（絲價安定融資補償法）ニ依ル手形割引計算書樣式（昭和五、普一〇照會）……二八二ノ二

第七章　收入、支出及出納官吏

第一節　收入

一 國稅徵收法（明治三〇、法律二一）……二八三
一 國稅徵收法施行規則（明治三五、勅令一三五）……二八七
一 歲入徵收官ノ歲入金月計突合表證明ニ關スル件（大正一五、大藏省令五）……二九一
一 諸收入收納取扱規程（明治三三、大藏省令訓令二七）……二九一
一 租稅外諸收入金整理ニ關スル法律（明治四四、法律五八）……二九二ノ四
一 明治四十四年法律第五十八號施行規則（明治四四、勅令一二一）……二九二ノ四
一 證券ヲ以テスル歲入納付ニ關スル法律（大正五、法律一〇）……二九二ノ五
一 歲入納付ニ使用スル證券ニ關スル件（大正五、勅令二五六）……二九二ノ五
一 歲入納付ニ使用スル證券ノ納付ニ關スル制度（大正五、大藏省令三〇）……二九四
一 證券ヲ以テスル歲入納付ニ關スル法律施行細則（大正五、大藏省令三二）……二九五
一 印紙ヲ以テスル歲入金納付ニ關スル件（大正九、勅令一九〇）……二九八
一 貸付金取扱規程（明治四四、大藏省令一七）……二九九
一 政府ヨリ賣拂フ代金ノ延納ニ關スル件（大正一〇、勅令三七四）……三〇〇ノ五
一 北海道國有林野及未開地竝其ノ產物賣拂代金延納ノ件（大正一〇、內務省令二四）……三〇一
一 帝國大學資金所屬森林ノ產物又ハ製品賣拂代金延納ニ關スル件（大正一〇、文部省令四三）……三〇一
一 傳染病研究所ニ於テ製造販賣スル痘苗血精類ノ賣拂代金延納ノ件（大正一一、文部省令三一）……三〇一
一 國有林野產物及製品賣拂代金延納ニ關スル件（大正一〇、農商務省令二八）……三〇二

一 森林收入未納金延納許可方（明治三八、農商務省令二八）……三〇二
一 製鐵所製品賣拂代金延納ニ關スル件（大正一一、農商務省令二）……三〇二
一 物件賣拂代金延納規則（大正一一、朝鮮總督府令一）……三〇二
一 物件賣拂代金延納ニ關スル件（大正一〇、臺灣總督府令一五五）……三〇三
一 樺太廳ニ屬スル生產物賣拂代金延納ニ關スル件（大正一〇、樺太廳令四五）……三〇四
一 物件賣拂代金延納規則（大正一二、南洋廳令一〇）……三〇四
一 恩給金額分擔及國庫納金收入等取扱規則（大正一二、勅令四三九）……三〇五
一 政府ト私人トノ債務ノ相殺アリタル場合ニ於ケル歲入徵收官ノ事務取扱方（大正一一、大藏省訓令一五）……三〇七
一 國債償還費途ノ趣旨ニ依ル國民獻金收入方ノ件（昭和四、大藏省訓令一一）……三〇八

第二節　支出

一 支出官事務規程（大正一一、大藏省令一）……三〇九
一 公共團體ニ對スル工事補助費繰越使用ニ關スル法律（明治四四、法律二）……三一三
一 特別都市計畫事業ニ伴フ建物其ノ他ノ工作物ノ移轉ニ因リ支拂フヘキ補償金等ヲ前金拂ト爲スノ件（大正一三、勅令三〇二）……三一三
一 北海道拓殖鐵道建設費利子支出ニ關スル法律（大正六、法律一〇）……三一三
一 陸軍給與ニ關スル委任經理ノ法律（明治一三、法律一七）……三一四
一 帝國學士院學術研究奬勵金委任經理ニ關スル法律（大正四、法律一三）……三一四
一 帝國美術院美術研究奬勵金委任經理ニ關スル法律（大正一四、法律四〇）……三一五
一 大學竝直轄諸學校ニ於ケル奬學寄附金委任經理規程（明治四〇、文部省訓令四）……三一五
一 郵便官署ヲシテ歲入金ノ受入及歲出金ノ繰替拂渡ニ關スル事務ヲ取扱ハシムルノ件（大正四、勅令六）……三一六ノ三
一 郵便官署ヲシテ歲入金ノ受入及歲出金ノ繰替拂ヲ取扱ハシムル件ニ關スル規程（大正四、大藏省令一）……三一六ノ三
一 郵便官署ニ於ケル各廳歲入金及歲出金取扱規則（大正四、遞信省令八）……三一九

第三節　出納官吏

一　出納官吏事務規程（大正一一、大藏省令二）……三二一
一　出納官吏等ノ辨償責任ノ免除ニ關スル件（昭和三、勅令二七六）……三二八ノ八

第八章　契約

第一節　一般競爭契約

一　會計規則第九十六條ノ規定ニ依リ一般ノ競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一一、大藏省令三三）……三二九
一　朝鮮ニ於テ一般ノ競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一一、朝鮮總督府令九〇）……三三〇ノ三
一　臺灣ニ於テ一般ノ競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一一、臺灣總督府令九九）……三三一
一　關東州ニ於テ一般競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一一、關東廳令三五）……三三一
一　樺太ニ於テ一般競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一一、樺太廳告示六四）……三三二
一　南洋群島ニ於テ一般競爭ニ加ラムトスル者ニ必要ナル資格ニ關スル件（大正一二、南洋廳令二六）……三三三

第二節　隨意契約

一　政府ニ於テ物品ノ販賣ヲ問屋業者ニ委託スルコトヲ得ル場合ニ關スル件（大正一二、勅令二九九）……三三五
一　陸軍ニ於ケル豫備馬ノ無償貸渡及無償付與ノ件（大正一〇、勅令四一五）……三三五
一　種牡牛、種牡馬及種緬羊竝種緬羊ノ果實讓與ノ件（大正一四、勅令一）……三三五
一　各省大臣ニ於テ一般競爭ヲ不利ト認メ指名競爭又ハ隨意契約ニ依リタル場合會計檢査院ニ對スル通知事項ニ

關スル件（大正一一、送七三二照會）……三三六

第九章　俸給及諸給與

第一節　俸給

一　高等官官等俸給令（明治四三、勅令一三四）……三三七
一　判任官俸給令（明治四三、勅令一三五）……三四四ノ三
一　文官俸給支給細則（明治二五、大藏省令一一）……三四七
一　文官ニシテ陸海軍ニ召集セラレタル者ノ俸給ニ關スル件（明治三七、勅令二〇六）……三四八
一　陸海軍准士官以下ノ受恩給者文官判任以上ニ任セラレタル場合ニ於ケル俸給支給方（明治三三、勅令一三二、明治三三、大藏省令一九）……三四八
一　道廳府縣立師範學校長ノ俸給ニ關スル件（大正一二、勅令四三〇）……三四八

第二節　諸給

一　傭員俸給及傭員其他ニ給スル諸手當支給方ノ件（明治二六、勅令七）……三四九
一　年額又ハ月額ノ手當金支給方（明治二二、大藏省令一）……三四九
一　雇員扶助令（昭和三、勅令一〇九）……三四九
一　雇員扶助令第十條第二項ノ規定ニ依リ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ南洋群島ニ在勤スル內地人タル雇員及外國ニ在勤スル雇員ニ付同條第一項ニ規定スル俸給中ヨリ控除スベキ金額ノ件（昭和三、大藏省告示一一二）……三五〇ノ三
一　傭人扶助令（大正七、勅令三八二）……三五〇ノ三
一　官吏療治料給與ノ件（明治二五、勅令八〇）……三五三
一　勤勉手當給與令（大正九、勅令五四五）……三五三
一　交通至難ノ場所ニ在勤スル職員ニ手當給與ノ件（大正九、勅令四〇五）……三五五

一 貴族院及衆議院ノ議事速記ニ從事スル職員ニ特別手當ヲ給スルコトヲ得ルノ件（大正一二、勅令六一）……三五六

第三節 行政及軍備整理ニ依ル賜金

一 行政整理又ハ軍備ノ制限整理ニ關スル公債發行ニ關スル法律（大正一二、法律一七）……三五七
一 行政整理又ハ軍備整理ニ際シ退官退職シタル者等ニ交付スル公債發行ニ關スル法律（大正一四、法律二四）……三五七
一 行政整理又ハ軍備整理ニ際シ退官退職シタル者等ニ支給スル特別ノ賜金又ハ手當ニ關スル件（大正一四、勅令一一五）……三五七
一 行政整理又ハ軍備整理ニ際シ退官退職シタル者等ニ交付スル公債ノ發行交付ニ關スル規程（大正一四、大藏省令九）……三五八
一 「ロンドン」海軍條約實施ニ伴フ海軍職工整理ニ關スル公債發行ニ關スル法律（昭和六、法律四五）……三六〇
一 「ロンドン」海軍條約ノ實施ニ伴ヒ解傭セラレタル海軍職工ニ特別手當支給ノ件（昭和六、勅令四四）……三六〇

第四節 旅費

一 內國旅費規則（明治四三、勅令二七四）……三六一
一 內國旅費規則別表ニ定ムル甲地方指定ノ件（大正一三、大藏省令一八）……三六五
一 內國旅費規則第二條ニ依ル鐵道賃及船賃（大正九、大藏省令一六）……三六五
一 大藏省所管旅費支給規則（明治四三、大藏省令三三）……三六六
一 大藏省所管經費支辨ニ屬スル各廳員朝鮮臺灣及樺太內旅費支給規則（明治四三、大藏省令三五）……三六九
一 外國旅費規則（大正一〇、勅令四〇一）……三七一
一 外國旅費規則施行細則（大正一〇、大藏省令三一）……三七六ノ二
一 南洋群島關東州南滿洲旅費規則（大正一〇、勅令四〇二）……三七七
一 南洋群島關東州南滿洲旅費規則施行細則（大正一〇、大藏省令三二）……三八二ノ二
一 在外研究員規程（大正一一、勅令六）……三八三

第五節 恩給及救助

一 恩給法（大正一二、法律四八）……三八七
一 恩給法施行令（大正一二、勅令三六七）……四〇七
一 現業員ノ共濟組合ニ對スル政府給與金ニ關スル件（大正九、勅令八〇）……四一八ノ一二
一 現業員ノ共濟組合ニ對スル政府給與金ノ增額ニ關スル件（昭和元、勅令五）……四一八ノ一二
一 鐵道部內ノ現業員ノ共濟組合ニ關スル件（明治四〇、勅令一二七）……四一八ノ一三
一 警部補巡査消防手共濟組合ニ關スル件（大正九、勅令四四）……四一九
一 印刷局現業員ノ共濟組合ニ關スル件（明治四二、勅令二二）……四一九
一 內務省直轄土木事業ニ從事スル現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正一二、勅令三三二）……四一九
一 專賣局現業員ノ共濟組合ニ關スル件（明治四一、勅令一五七）……四一九
一 造幣局現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正一二、勅令一九）……四二〇
一 陸軍作業廳現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正八、勅令八〇）……四二〇
一 海軍作業廳所屬雇員以下現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正一一、勅令六〇）……四二〇
一 林野現業員共濟組合令（大正八、勅令三〇六）……四二一
一 製鐵所現業員共濟組合ニ關スル件（大正一一、勅令四九五）……四二一
一 遞信部內ノ現業員共濟組合ニ關スル件（明治四二、勅令一五一）……四二一
一 朝鮮總督府專賣局現業員共濟組合ニ關スル件（大正一〇、勅令二三六）……四二一
一 朝鮮總督府遞信官署現業員共濟組合ニ關スル件（大正九、勅令五七四）……四二一
一 朝鮮總督府鐵道局現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正一四、勅令一一六）……四二二
一 臺灣總督府專賣局共濟組合ニ關スル件（大正一四、勅令二一四）……四二二
一 臺灣總督府營林現業員共濟組合令（昭和五、勅令五九）……四二三
一 臺灣總督府遞信局及臺灣總督府郵便局現業員共濟組合ニ關スル件（大正二、勅令二七九）……四二三

一　臺灣總督府鐵道部現業員ノ共濟組合ニ關スル件（明治四二、勅令四九）……四二三
一　關東廳警察共濟組合ニ關スル件（昭和二、勅令一五九）……四二四
一　關東廳遞信官署現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正九、勅令五一〇）……四二四
一　樺太廳鐵道事務所及樺太廳郵便局現業員ノ共濟組合ニ關スル件（大正八、勅令三六一）……四二四（四二五缺）（四二六缺）
一　罹災救助基金法（明治三二、法律七七）……四二七
一　罹災救助基金法施行手續（大正七、大藏省令八）……四二九

第十章　預金及有價證券

第一節　預金

一　預金部預金法（大正一四、法律二五）……四三一
一　預金部資金運用規則（大正一四、勅令五五）……四三一
一　大藏省預金部ニ預入ルル資金ニ關スル件（大正一四、勅令一一八）……四三三
一　預金部預金取扱規程（大正一一、大藏省令六）……四三三
一　預金部地方資金貸付規程（昭和三、大藏省達二）……四三七
一　日本銀行國庫金取扱規程（大正一一、大藏省令一〇）……四三八

第二節　有價證券

一　政府所有有價證券取扱規程（大正一一、大藏省令七）……四五三
一　政府保管有價證券取扱規程（大正一一、大藏省令八）……四五四ノ三
一　日本銀行政府有價證券取扱規程（大正一一、大藏省令一一）……四五七

第十一章　保管及供託

第一節　保管

一　保管金規則（明治二三、法律一）……四六三
一　救恤又ハ學藝技術奬勵寄附金ノ保管出納ニ關スル件（明治三三、勅令三二九）……四六三
一　保管金取扱規程（大正一一、大藏省令五）……四六三

第二節　供託

一　供託法（明治三二、法律一五）……四六七
一　供託物ノ還付又ハ取戻ヲ請求スル場合ニ關スル件（大正一一、勅令七五）……四六八
一　供託物取扱規則（大正一一、司法省令二）……四六九
一　供託有價證券取扱規程（大正一一、大藏省令九）……四七一
一　供託金受入ヲ東京供託局ニテ取扱フ件（大正一二、司法省告示九）……四七一
一　供託法第三條ニ依ル供託金ノ利息（大正一一、司法省令三）……四七二

第十二章　參考諸法規

一　法令形式ノ改善ニ關スル件（大正一五、內閣訓令號外）……四七三
一　法例抄錄（明治三一、法律一〇）……四七四
一　朝鮮ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律（明治四四、法律三〇）……四七四
一　臺灣ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律（大正一〇、法律三）……四七五

樺太ニ施行スヘキ法令ニ關スル法律(明治四〇、法律二五)……四七五
關東州ニ於ケル諸般ノ成規ニ關スル件(明治三九、勅令二〇三)……四七六
公式令抄錄(明治四〇、勅令六)……四七六
文官任用令(大正二、勅令二六一)……四七六
文官分限令(明治三二、勅令六二)……四七八
文官懲戒令(明治三二、勅令六三)……四七九
官吏服務紀律(明治二〇、勅令三九)……四八二
官廳ノ執務時間ニ關スル件(大正一一、閣令六)……四八三
歳入歳出豫算概定順序(明治二二、閣令一二)……四八四
豫定經費算出概則(明治二二、閣令一九)……四八五
市町村義務教育費國庫負擔法(大正一二、法律二〇)……四八六
教育基金令(大正三、勅令二五九)……四八六
土地收用法(明治三三、法律二九)……四八九
特別都市計畫法(大正八、法律五三)……四九七
電信事業公債法(大正九、法律四二)……四九九
電話事業公債法(大正六、法律一一)……四九九
道路公債法(大正九、法律五九)……四九九
朝鮮事業公債法(昭和二、法律一一)……四九九
臺灣事業公債法(大正一一、法律一三)……五〇〇
關東州事業公債法(大正一一、法律一五)……五〇〇
樺太事業公債法(大正七、法律二一)……五〇〇ノ二
臨時國庫證券法(大正六、法律七)……五〇〇ノ二
米穀法(大正一〇、法律三六)……五〇〇ノ二
米穀法施行令(昭和六、勅令一七〇)……五〇〇ノ三ノ二

米穀法施行規則(昭和六、農林省令一三)……五〇〇ノ三ノ四
米穀證券發行規程(昭和六、大藏省令八)……五〇〇ノ三ノ八
健康保險積立金運用規則(昭和五、勅令三四)……五〇〇ノ四
簡易生命保險積立金運用規則(大正六、勅令六八)……五〇〇ノ四
簡易生命保險積立金貸付規則(大正八、遞信省令七四)……五〇〇ノ五
郵便年金積立金運用規則(昭和三、勅令二一八)……五〇一
郵便年金積立金貸付ニ關スル件(昭和三、遞信省令六〇)……五〇二
貨幣法(明治三〇、法律一六)……五〇二
小額紙幣發行ニ關スル件(大正六、勅令二〇二)……五〇四
小額紙幣發行期限ニ關スル法律(大正九、法律六)……五〇五
産業組合中央金庫法(大正一二、法律四二)……五〇五
日本興業銀行外二銀行ノ對支借款關係債務ノ整理ニ關スル法律(大正一五、法律四一)……五〇九
日本銀行特別融通及損失補償法(昭和二、法律五五)……五一〇ノ二
日本銀行特別融通及損失補償法第一條ニ依ル特別融通ニ關スル規程(昭和二、大藏省令一二)……五一〇ノ二
臺灣ノ金融機關ニ對スル資金融通ニ關スル法律(昭和一二、法律五六)……五一〇ノ四
絲價安定融資補償法(昭和四、法律一四)……五一〇ノ四
絲價安定融資補償法施行規則(昭和四、農林省令二〇)……五一〇ノ五ノ二
輸出補償法(昭和五、法律六)……五一〇ノ五ノ三
輸出補償法施行規則(昭和五、商工省令七)……五一〇ノ五ノ四
海軍軍備制限ニ關スル條約ノ實施ニ伴フ損害ノ補償ニ關スル法律(大正一五、法律五一)……五一〇ノ六
獨逸國等ニ屬スル財産管理ノ件(大正九、勅令四八)……五一〇ノ七
特殊財産管理ニ關スル勅令施行ニ關スル件(大正九、內務省令三)……五一一
同盟及聯合國ト獨逸國トノ平和條約ニ依ル財産處理ニ關スル件(大正九、勅令一七一)……五一三

目次

第十三章　震災ニ關スル法令

一　高等諸學校震災復舊諸費ニ屬スル豫算ノ施行ニ關スル法律（大正一三、法律一〇）……五一五
一　會計規則其ノ他ノ收入支出ニ關スル命令ノ規定ニ對シ特例ヲ設クル件（大正一二、勅令四〇六）……五一五
一　震災被害者ニ對スル租稅ノ免除猶豫等ニ關スル法律（昭和二、法律一七）……五一五（自五一七至五二六缺）
一　昭和二年法律第十七號（震災被害者ニ對スル租稅ノ免除猶豫等ニ關スル法律）施行方（昭和二、大藏省令六）……五二六ノ二
一　震災被害者ニ對スル租稅ノ減免猶豫等ニ關スル法律（昭和六、法律四六）……五二六ノ四
一　昭和六年法律第四十六號（震災被害者ニ對スル租稅ノ減免猶豫等ニ關スル件）施行方（昭和六、大藏省令一一）……五二六ノ五
一　震災善後公債法（大正一二、法律五六）……五二七
一　震災善後ニ關スル經費支辨ノ爲公債發行ニ關スル件（大正一三、勅令四六）……五二七
一　復興事業ノ施行ニ伴ヒ支拂フヘキ金額ヲ國債證券ヲ以テ交付スヘキ國債證券ニ關スル法律（大正一二、法律五五）……五二七
一　復興事業ノ施行ニ伴ヒ交付スヘキ國債證券ニ關スル件（大正一三、勅令一三七）……五二八
一　米貨公債及英貨公債ノ發行ニ關スル件（大正一三、勅令一七）……五二九
一　日本銀行ノ手形ノ割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル財政上必要處分ノ件（大正一二、勅令四二四）……五三〇
一　日本銀行ノ手形割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル法律（大正一四、法律三五）……五三〇
一　震災手形損失補償公債法（昭和二、法律一九）……五三〇ノ二
一　震災手形善後處理法（昭和二、法律二〇）……五三〇ノ二
一　震災手形善後處理法ニ依リ震災手形所持銀行ニ對シ貸付ヲ爲ス手續（昭和二、大藏省令二八）……五三〇ノ三

附錄

一　會計檢查院恒例報告書類提出期限要覽……五三一
一　會計檢查院用字例……五三三
一　度量衡換算表……五三七
一　各會計名及收支整理期間一覽……五三九

通知案

會計檢查院法第十六條委託檢查ニ係ル計算ノ檢查及責任解除ニ關シ其檢查取扱順序別紙ノ通改定候條明治三十四年度分ヨリ施行相成度此段及通知候也

年　月　日　　院　長

委託廳長官宛

遞信大臣ヘハ左ノ追書ヲ加フ

追テ郵便爲替貯金ニ關スル成績報告書式ハ從前ノ通ト御承知相成度此段申添候也

○檢查事務規程第十七條ニ依ル朝鮮臺灣關東州及樺太等ニ於ケル出納官吏計算書ノ判決報告書中所官廳ノ記載方ニ關スル件

二

●第三部長決裁　大正十三年七月二十日

一　出納官吏（朝鮮臺灣關東州及樺太等各特別會計所屬ノ）ニ對スル判決報告書ノ所管廳ノ欄ニハ省名卽チ大藏省名ヲ記入スルコト（認可狀ニモ大藏省所管何年度ト記スルコト一般ノ例ニ同シ）

但シ認可狀ハ直接ニ所管地ノ長官ヲ經由スルコトヲ表示スル爲判決報告書ノ所管廳ノ欄省名ノ下ニ經由官廳名ヲ括弧內ニ併記スルコト「例示大藏省（朝鮮總督府）」

二　省略

○檢査事務規程第二十一條ニ依リ再審ヲ開始セサル報告書作製ノ場合取扱方ノ件

●院長決裁　昭和三年十月二十三日

檢査事務規程第二十一條ニ依リ再審ヲ開始セサル理由ヲ具シタル報告書ヲ作製スル場合ニ於テ（恩赦ニ依ル場合ヲモ含ム）其ノ再審事項カ所屬長官又ハ受託廳長官ノ申報ニ係ルモノナルトキハ再審ヲ開始セサル理由ヲ具シタル通牒書ヲ併セ提出スルコト（所屬長官又ハ受託長官ノ申報ニ係ルモノニ非スト雖特別ノ必要アリト認ムルトキ同斷）

○再審判決決定後ニ於ケル理處方ノ件

●院長決裁　昭和四年九月九日

再審事項ニ對スル判決決定後ニ於テハ該事項關係書類ハ總テ當該初審擔當課ニ引繼キ爾後同課ニ於テ該事項ニ關スル處理ヲ爲スヘキコトニ取扱方一定ス

○檢査事務規程第二十四條ニ依ル通牒書案ノ處理方ニ關スルノ件

●院長決裁　大正十二年十一月十七日

一　改正檢査事務規程第二十四條ニ依ル通牒書案ハ決定報告書ニ添附スヘキモノナルモ檢査ノ結果總テ正當ト決定シ他ニ何等ノ事故ナク單ニ正當ノ旨ヲ通知スル場合ノ通牒書案ハ便宜決定報告書ニ「要通牒書發遣」ノ旨ヲ記載シテ通牒書案ノ添附ヲ省略スルコトヲ得

二　前項ノ通牒書案ノ樣式ハ別紙ノ如ク定メ決定報告書ニ通牒書案ノ添附ヲ省略セル場合ニ於テハ院長官房文書掛ニ於テ別紙樣式ニ依ル通牒書ヲ調製スヘシ

三　決定報告書ニ通牒書案ノ添附ヲ省略スルト否トニ拘ラス通牒書發送ヲ要スヘキ決定報告書ニハ「要通牒書發遣」ノ旨記載スヘシ

（別紙）

年　月　日

所管大臣宛　　院　長

何職官某ノ證明ニ係ル何年度何計算書ノ檢査ヲ遂ケ正當ト決定候條此段及通牒候也

○職員休暇規程

●院内達第五號　大正十三年六月二十六日

改正　大正一四年第四號、昭和五年第一號

一　職員ハ七月二十一日ヨリ八月三十一日迄ノ間ニ於テ二十日以内ノ休暇ヲ申請スルコトヲ得但シ事務ノ都合ニ依リ當該期間内ニ休暇ノ申請ヲ爲ササル場合ニ於テハ他ノ期間ニ於テ之ヲ申請スルコトヲ得（昭和五年六月第一號ヲ以テ改正）

二　三月以後ニ於テ採用セラレタル者ノ休暇ヲ申請シ得ヘキ日數ハ採用ノ翌月ヨリ十二月迄ノ月數ニ二ヲ乘シタル數トス但シ七月一日以後ニ於テ採用セラレタル者ハ休暇ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス（昭和五年六月第一號ヲ以テ改正）

三　職員ニシテ休暇ヲ受ケムトスルトキハ其ノ期間ヲ明記シ所屬部課長ヲ經由シテ院長ノ許可ヲ受クヘシ（昭和五年六月第一號ヲ以テ改正）

四　休暇ハ所定日數ノ限度内ニ於テモ院長又ハ所屬部課長ニ於テ之ヲ短縮制限スルコトヲ得

五　休暇ヲ與ヘタル場合ニ於テモ事務ノ都合ニ依リ之ヲ取消シ又ハ變更スルコトアルヘシ

六　職員ニシテ宿直ノ義務アルモノハ休暇ヲ受ケタルカ爲ニ之ヲ變更スルコトナキモノトス

附　則

本規程ハ大正十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年七月院内達第十號（職員休暇ニ關スル件）ハ之ヲ廢止ス

前項達ニ依リ既ニ休暇ヲ受ケタルモノハ本規程ニ依リ之ヲ受ケタルモノト看做ス

○旅費減給ニ關スル件

●院内達第二號　昭和五年七月五日

一　昭和五年七月十五日ヨリ當分ノ内内國旅費規則、外國旅費規則ニ定ムル定額ニ付車馬賃、日當及宿泊料ニ付テハ一割五分食卓料、支度料及移轉料ニ付テハ一割ヲ減額支給ス

二　前號ニ依リ減額支給スルニ當リ算出上錢位未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ之ヲ四捨五入シテ錢位ニ留ム

（備考）

昭和六年四月四日院内達第四號ヲ以テ昭和六年度以降ニ於テモ旅費規則改正ニ至ル迄同樣實施

○大藏大臣ノ承認ヲ經ルニ非サレハ他ノ費途ノ金額ヲ流用スルコトヲ得サル費途ノ件

●勅令第三百五號　大正十二年六月十三日

改正　昭和四年第三一〇號

左ノ名稱ノ費途ニハ大藏大臣ノ承認ヲ經ルニ非サレハ他ノ費途ノ金額ヲ流用スルコトヲ得ス

一　俸給
二　機密費
三　交際費
四　宴會費
五　接待費
六　渡切費
七　新營費
八　補助費
九　外國旅費（昭和四年一〇月第三一〇號ヲ以テ追加）

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○會計規則及各特別會計規則ノ規定ニ依リ調製スルコトヲ要スル帳簿ノ樣式及記入ノ方法竝書類ノ樣式

●大藏省令第二十號　大正十一年三月二十九日

改正　大正一三年第九號、一四年第一〇號、一五年第三八號、昭和元年第六號、二年第四號、第二〇號、第三〇號、四年第三號、第五號、第一三號、第一八號、五年第一五號

一支拂豫算書　別表第一號書式ニ依ル
一支拂豫算更定計算書　別表第二號書式ニ依ル
一年度開始前支出計算書　別表第三號書式ニ依ル
一徵收報告書　別表第四號書式ニ依ル
一徵收總報告書　別表第五號書式ニ依ル
一徵收簿　別表第六號書式ニ依ル
一歲入簿　別表第七號書式ニ依ル
一支出濟額報告書　別表第八號書式ニ依ル

一支出總報告書　別表第九號書式ニ依ル
一繰越計算書　別表第十號書式ニ依ル
一支出簿　別表第十一號書式ニ依ル
一歲出簿　別表第十二號書式ニ依ル
一現金領收證書　別表第十三號書式ニ依ル
一現金出納簿　別表第十四號書式ニ依ル
一國庫日記簿　別表第十五號書式ニ依ル
一國庫原簿　別表第十六號書式ニ依ル
一歲入主計簿　別表第十七號書式ニ依ル
一歲出主計簿　別表第十八號書式ニ依ル
一作業會計、海軍工廠資金會計、朝鮮鐵道用品資金會計及臺灣官設鐵道用品資金會計日記簿　別表第十九號書式ニ依ル
一造幣局會計日記簿　別表第二十號書式ニ依ル
一帝國鐵道會計日記簿　別表第二十一號書式ニ依ル
一健康保險會計日記簿　別表第二十一號ノ二書式ニ依ル（昭和元年一二月第六號ヲ以テ追加）
一簡易生命保險會計日記簿　別表第二十二號書式ニ依ル
一郵便年金會計日記簿　別表第二十二號ノ二書式ニ依ル（大正一五年九月第三八號ヲ以テ追加）
一大藏省預金部會計日記簿　別表第二十二號ノ三書式ニ依ル（大正一五年九月第三八號ヲ以テ改正）
一朝鮮簡易生命保險會計日記簿　別表第二十二號ノ四書式ニ依ル（昭和四年五月第五號ヲ以テ追加）
一家畜再保險會計日記簿　別表第二十二號ノ五書式ニ依ル（昭和四年七月第三號ヲ以テ追加）
一米穀需給調節會計日記簿　別表第二十三號書式ニ依ル
一製鐵所會計日記簿　別表第二十三號ノ二書式ニ依ル（昭和二年七月第二〇號ヲ以テ追加）
一特別會計原簿　別表第二十四號書式ニ依ル
一特別會計補助簿　別表第二十五號書式ニ依ル
一特別會計支拂元受高差引簿　別表第二十六號書式ニ依ル
一受拂勘定表　別表第二十七號書式ニ依ル
一帝國鐵道會計貸借對照表　別表第二十八號書式ニ依ル
一帝國鐵道會計損益計算表　別表第二十九號書式ニ依ル
一帝國鐵道會計資本增減表　別表第三十號書式ニ依ル
一帝國鐵道會計固定財產價格增減表　別表第三十一號書式ニ依ル
一固定資本價格增減表　別表第三十二號書式ニ依ル
一健康保險、簡易生命保險、郵便年金、朝鮮簡易生命保險又ハ家畜再保險會計積立金明細目錄　別表第三十三號書式ニ依ル（大正一五年九月第三八號、昭和元年一二月第六號、四年五月第五號、第一三號ヲ以テ改正）

附　則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ大藏省令ハ之ヲ廢止ス

明治二十三年大藏省令第九號（作業及鐵道會計規則ニ要

スル諸報告書諸表帳簿書式）

明治二十六年大藏省令第三十二號（會計規則ニ據ル諸計算書仕拂命令領收證及諸帳簿樣式）

明治三十年大藏省令第五號（臺灣總督府特別會計規則所要ノ諸報告書仕拂命令領收證及計算書等樣式）

明治四十年大藏省令第十七號（關東廳及樺太廳特別會計規則ニ要スル諸書類帳簿等樣式）

明治四十二年大藏省令第十六號（帝國鐵道會計規則ニ據ル諸書類帳簿等樣式）

明治四十三年大藏省令第四十五號（朝鮮總督府特別會計規則ニ據ル諸書類帳簿等ノ樣式）

明治四十五年大藏省令第九號（朝鮮醫院及濟生院特別會計ニ要スル諸書類帳簿等樣式）

大正五年大藏省令第三號（造幣局特別會計規則ニ依リ同會計ニ要スル諸書類帳簿ノ樣式）

大正五年大藏省令第二十一號（簡易生命保險特別會計規則ニ依リ同會計ニ要スル諸書類帳簿ノ樣式）

大正十年大藏省令第十一號（大學特別會計規則竝學校及圖書館特別會計規則ニ據リ要スル諸書類帳簿ノ樣式）

大正十年大藏省令第十六號（米穀需給調節特別會計規則ニ依リ要スル諸書類帳簿ノ樣式）

本令施行ノ際現存スル帳簿及用紙ハ當分ノ內之ヲ取繕ヒ使用スコトヲ得

第一號書式

支　拂　豫　算　書

何省所管

某年度歲出（何々會計歲出）經常部（臨時部）

（別表）

支出官官氏名　　日本銀行何店

款	項	金額
		圓
何	何	0
	何	0
	何	0
		0

年　月　目

支拂豫算書ヲ調製スル官吏官氏名㊞

大藏大臣（會計檢査院長）宛

備考

一用紙ハ厚質礬砂引美濃紙トシ左方ニ約一寸ノ綴代ヲ設クヘシ第二號乃至第五號、第八號乃至第十號書式亦同シ

二本書式中日本銀行何店トアルハ支出官ノ振出ス小切手ノ支拂店名ヲ謂フ第二號、第三號及第十四號書式亦同シ

三本書式ハ罫線其ノ他凡テ墨書スルモノトス第二號乃至第五號、第八號乃至第十號、第十三號、第二十七號乃至第三十三號書式亦同シ

何年何月何日　3

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	朝鮮簡易生命保險收入	0	
	歲入歲出過不足		0
	歲入歲出過不足	0	
	朝鮮簡易生命保險費		0
	歲入歲出過不足	0	
	國庫		0
	國庫（積立金）	0	
	積立金		0
	積立金	0	
	國庫（積立金）		0
	國庫	0	
	歲入歲出過不足		0
	積立金	0	
	缺損		0
		0	0

備考

原簿ニ於ケル科目ノ配置ハ下記ニ依ル

積立金、歲入歲出過不足、朝鮮簡易生命保險收入、朝鮮簡易生命保險費、積立金繰替拂出、積立金繰替受入、國庫、國庫（積立金）、出納官吏、預金（餘裕金）、預金（積立金）、有價證券、契約者貸付、一般貸付、缺損

第二十二號ノ五書式（昭和四年七月第一三號ヲ以テ追加）

「某年度家畜再保險會計日記簿」

何年何月何日　1

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	未經過再保險料	0	
	翌年度繰越額	0	
	前年度繰越資金繰入		0
	國庫	0	
	家畜再保險收入		0
	一般會計ヨリ受入		0
	收入濟		
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	損益	0	
	借入金		0
	借入金ノ增		
	家畜再保險費	0	
	國庫		0
	支出濟	0	0
	何年何月何日		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	借入金	0	
	損益		0
	借入金ノ減	0	0

2　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	收入未濟	0	
	再保險料		0
	再保險料收入未濟		
	國庫	0	
	家畜再保險收入		0
	再保險料	0	
	收入未濟		0
	再保險料收入濟＝付組替	0	0
	何年何月何日		
	備品	0	
	支出未濟		0
	備品購入代		
	家畜再保險費	0	
	國庫		0
	支出未濟	0	
	損益		0
	備品購入代支拂濟＝付組替		
	損益	0	
	支出未濟		0
	消耗品購入代		
	家畜再保險費	0	
	國庫		0
	支出未濟	0	
	損益		0
	消耗品購入代支拂濟＝付組替	0	0

3　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	損益	0	
	備品		0
	備品ノ滅失毀損		
	國庫	0	
	家畜再保險收入		0
	損益	0	
	備品		0
	不用品賣拂代收入濟＝付組替		
	出納官吏	0	
	歲入歲出外勘定		0
	國庫(歲入歲出外)	0	
	出納官吏		0
	歲入歲出外現金受入		
	歲入歲出外勘定	0	
	國庫(歲入歲出外)		0
	歲入歲出外現金拂出		
	積立金繰替拂出	0	
	國庫(積立金)		0
	積立金繰替		
	國庫	0	
	積立金繰替受入		0
	同上	0	0

4　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	國庫	0	
	一時借入金		0
	一時借入金受入		
	積立金繰替受入	0	
	國庫		0
	繰替返戻		
	國庫(積立金)	0	
	積立金繰替拂出		0
	同上		
	預金(餘裕金)	0	
	國庫		0
	餘裕金預入		
	國庫	0	
	預金(餘裕金)		0
	預金拂戻		
	預金(積立金)	0	
	有價證券(積立金)	0	
	國庫(積立金)		0
	積立金運用		
	國庫(積立金)	0	
	預金(積立金)		0
	有價證券(積立金)		0
	同上	0	0

5　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	一時借入金	0	
	國庫		0
	一時借入金返還		
	有價證券(積立金)	0	
	有價證券(積立金)		0
	國庫(積立金)		0
	有價證券乘換		
	有價證券(積立金)	0	
	國庫(積立金)	0	
	有價證券(積立金)		0
	同上		
	再保險金	0	
	再保險料還付金	0	
	支出未濟		0
	再保險金,再保險料還付金義務額		
	家畜再保險費	0	
	國庫		0
	同上支出濟		
	支出未濟	0	
	再保險金		0
	再保險料還付金		0
	同上支拂濟＝付組替		
	缺損	0	
	有價證券(積立金)		0
	有價證券保有價格ノ低落		

6　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	家畜再保險收入	圓 0	圓
	一般會計ヨリ受入	0	
	前年度繰越資金繰入	0	
	何々收入(款)	0	
	積立金繰入過不足		0
	積立金繰入過不足	0	
	家畜再保險費		0
	積立金繰入過不足	0	
	未經過再保險料		0
	翌年度繰越額		0
	積立金繰入過不足	0	
	國庫		0
	預金(餘裕金)		0
	國庫(積立金)	0	
	預金(積立金)	0	
	積立金		0
	積立金	0	
	國庫(積立金)		0
	國庫	0	
	積立金繰入過不足		0
	積立金	0	
	缺損		0

備考

原簿ニ於ケル科目ノ配置ハ下記ニ依ル

家畜再保險收入、一般會計ヨリ受入、前年度繰越資金繰入、何々收入(款)、損益、借入金、家畜再保險費、何々費(款)、收入未濟、支出未濟、再保險料、備品、歲入歲出外勘定、國庫、國庫(歲入歲出外現金)、出納官吏、積立金繰替拂出、積立金繰替受入、國庫(積立金)、一時借入金、預金(餘裕金)、預金(積立金)、有價證券(積立金)、再保險金、再保險料還付金、積立金繰入過不足、未經過再保險料、翌年度繰越額、積立金、缺損

第二十三號書式

「某年度米穀需給調節會計日記簿」

何年何月何日　1

原簿丁數	原簿科目		借	貸
	國庫		圓 0	圓
	損益	米穀需給調節收入	0	0
		借入金	0	0
			0	0
	米穀	何年何月何日	0	
	證券發行未濟	證券發行未濟	0	0
		證券發行高		0
			0	0
	米穀	何年何月何日	0	
	土地		0	
	建物		0	
	機械及器具		0	
	工作物		0	
	備品		0	
	米穀需給調節費	支出未濟	0	0
	支出未濟	國庫	0	0
		損益		0
			0	0

2　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目		借	貸
	米穀需給調節費		圓 0	圓
		國庫		0
	證券發行高		0	
	借入金		0	
		損益		0
			0	0
	出納官吏	何年何月何日	0	
	損益	米穀需給調節收入	0	0
	國庫	前金受	0	0
	前金受	出納官吏	0	0
		米穀		0
			0	0

（昭和五年六月第一五號ヲ以テ改正）

何年何月何日　3

原簿丁數	原簿科目		借	貸
	出納官吏		圓 0	圓
		歲入歲出外勘定		0
	國庫(歲入歲出外)		0	
		出納官吏		0
	歲入歲出外勘定		0	
		國庫(歲入歲出外)		0
	國庫		0	
		米穀需給調節收入		0
	損益		0	
		米穀		0
			0	0
	收入未濟	何年何月何日	0	
	國庫	米穀	0	0
	損益	米穀需給調節收入	0	0
	收入未濟	收入未濟	0	0
	物品未渡	物品未渡	0	0
		前金受		0
			0	0

4　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目		借	貸
	預金		圓 0	圓
		國庫		0
			0	0
	米穀	何年何月何日	0	
		損益		0
			0	0
	米穀需給調節收入	何年何月何日	0	
	損益	損益	0	0
		米穀需給調節費		0
			0	0

（昭和二年三月第四號、五年六月第一五號ヲ以テ改正）

何年何月何日　5

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	證券發行未濟	0	
	證券發行高	0	
	借入金	0	
	物品未渡	0	
	前金受	0	
	支出未濟	0	
	歳入歳出外勘定	0	
	損益	0	
	米穀		0
	土地		0
	建物		0
	未成工事		0
	機械及器具		0
	收入未濟		0
	國庫		0
	出納官吏		0
	國庫（歳入歳出外）		0
	損益		0
		0	0

備考

原簿ニ於ケル科目ノ配置ハ下記ニ依ル

損益、米穀需給調節收入、借入金、米穀需給調節費、證券發行未濟、證券發行高、收入未濟、支出未濟、物品未渡、前金受、歳入歳出外勘定、國庫、國庫（歳入歳出外）、現金、出納官吏、米穀、土地、建物、未成工事、機械及器具

第二十三號ノ二（昭和二年七月第二〇號ヲ以テ追加）

「某年度製鐵所會計日記簿」（資本勘定）

何年何月何日　1

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	國庫	0	
	固定財産	0	
	固有資本		0
	借入資本		0
	資本受入		
	用品勘定交付資金	0	
	作業勘定交付資金	0	
	國庫		0
	他勘定ヘ資金交付		
	國庫	0	
	用品勘定交付資金		0
	作業勘定交付資金		0
	他勘定ヨリ資金返還		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	支出濟		
		0	0

2　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	損益	0	
	支出未濟		0
	物品購入代		
	器具備品	0	
	支出未濟		0
	器具備品購入代		
	交付材料	0	
	損益		0
	請負者ヘ工事材料交付		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	支出濟		
	支出未濟	0	
	損益		0
	物品購入代支拂濟ニ付組替		
		0	0
	何年何月何日		
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	公債募集金受入		
	損益	0	
	公債較差	0	
	借入資本		0
	借入資本ニ組入		
	追次合計	0	0

（昭和四年九月第一八號ヲ以テ改正）

何年何月何日　3

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	前葉合計	0	0
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	借入金受入		
	損益	0	
	借入資本		0
	借入資本ノ增		
		0	0
	何年何月何日		
	貸付金	0	
	借入資本		0
	債權讓受ト同時ニ債務ノ承繼		
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	貸付金償還金受入		
	損益	0	
	貸付金		0
	貸付金ノ減		
		0	0
	何年何月何日		
	固定財産	0	
	損益		0
	固定財産完成		
	固定財産	0	
	未成工事		0
	損益		0
	同上		
	固定財産	0	
	支出未濟		0
	固定財産購入代		
	固定財産	0	
	交付材料		0
	支出未濟		0
	請負者ヨリ引渡ヲ受ケタル固定財産受入		
	追次合計	0	0

4　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	前葉合計	0	0
	固定財產	0	
	公債較差	0	
	借入資本		0
	交付公債ニ依ル固定財產受入		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	支出濟		
	支出未濟	0	
	損益		0
	固定財產購入代支拂濟ニ付組替		
		0	0
	何年何月何日		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	公債又ハ借入金償還		
	借入資本	0	
	損益		0
	借入資本ノ減		
		0	0

何年何月何日　　5

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	國庫	0	
	一時借入金		0
	一時借入金受入		
	國庫	0	
	國庫餘裕金繰替		0
	國庫餘裕金繰替		
	一時借入金	0	
	國庫		0
	一時借入金返還		
	國庫餘裕金繰替	0	
	國庫		0
	國庫餘裕金繰替返還		
		0	0
	何年何月何日		
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	收入濟		
	損益	0	
	前年度以前收入未濟		0
	前年度以前收入未濟收入濟ニ付組替		
	前年度以前收入未濟固定財產未渡	0	
	前金受		0
	前年度以前收入未濟中固定財產引渡未濟ニ對シ代金收入濟ニ付組替		
	追次合計	0	0

「某年度製鐵所會計日記簿」（用品勘定）

何年何月何日　　1

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	國庫	0	
	受入資金		0
	資金受入		
	受入資金	0	
	國庫		0
	資金返還		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	支出濟		
		0	0
	何年何月何日		
	用品	0	
	支出未濟		0
	用品購入代		
	何々費（款）	0	
	國庫		0
	支出濟		
	支出未濟	0	
	損益		0
	用品購入代支拂濟ニ付組替		
		0	0

10　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	國庫	0	
	何々收入（款）		0
	他勘定ヨリ益金受入		
	何々收入（款）	0	
	損益		0
	損益ニ組替		
	損益	0	
	何々費（款）		0
	同上		
	損益	0	
	固有資本		0
	製鐵所益金固有資本ニ組入		
		0	0

備考　原簿ニ於ケル科目ノ配置ハ下記ニ依ル　固有資本、借入資本、一時借入金、國庫餘裕金繰替、損益、何々收入（款）、何々費（款）、用品勘定交付資金、收入未濟、前年度以前收入未濟、支出未濟、前金受、交付資金、作業勘定未濟、固定財產減價償却金受入未濟、支出未濟、前金受、前金拂、收入未濟、固定財產未渡、前年度以前收入未濟固定財產未渡、交付材料、公債較差、貸付金、預金、國庫、固定財產、未成工事、器具備品（昭和四年九月第一八號ヲ以テ改正）

2　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	何々費（款） 國庫	0	0
	支出濟 前金拂 損益	0	0
	用品購入代支拂濟ニ付組替 用品 前金拂	0	0
	前金拂ニ對シ用品受入	0	0
	何年何月何日		
	國庫 何々收入（款）	0	0
	收入濟 收入未濟 用品	0	0
	他勘定ヘ引渡用品原價 收入未濟 損益	0	0
	引渡用品ニ對スル割掛 國庫 何々收入（款）	0	0
	收入濟 損益 收入未濟	0	0
	用品供給代收入濟ニ付組替	0	0

3　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	國庫 何々收入（款）	0	0
	收入濟 損益 前金受	0	0
	用品賣拂代收入濟ニ付組替 前金受 用品	0	0
	賣拂用品原價 前金受 損益	0	0
	用品賣拂價格ト原價トノ差 用品 用品 損益	0	0
	製作濟用品受入	0	0

（昭和四年九月第一八號ヲ以テ改正）

4　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	前葉合計	0	0
	何年何月何日		
	國庫 何々收入（款）	0	0
	收入濟 損益 前年度以前收入未濟	0	0
	前年度以前收入未濟收入濟ニ付組替 前年度以前收入未濟物品未渡 前金受	0	0
	前年度以前收入未濟中物品引渡未濟ニ對シ代金收入濟ニ付組替 損益 納期未到收入未濟	0	0
	納期未到收入未濟收入濟ニ付組替	0	0

5　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
	何々費（款） 國庫	0	0
	支出濟 支出未濟 損益	0	0
	支出未濟支拂濟ニ付組替 支拂期日未到支出未濟 損益	0	0
	支拂期日未到支出未濟支拂濟ニ付組替 固定財產減價償却金繰入未濟 損益	0	0
	固定財產減價償却金繰入未濟繰入濟ニ付組替	0	0
	何年何月何日		
	交付材料 生產品	0	0
	加工ノ爲請負者ヘ材料交付 生產品 交付材料 支出未濟	0	0
	請負者ヨリ加工濟生產品受入 何々費（款） 國庫	0	0
	支出濟 追次合計	0	0

（昭和四年九月第一八號ヲ以テ改正）

6　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	前葉合計	0	0
	支出未濟	0	
	損益		0
	加工費支拂濟ニ付組替	0	0
	何年何月何日		
	納期未到收入未濟	0	
	生產品		0
	賣拂生產品ノ原價		
	納期未到收入未濟	0	
	損益		0
	生產品賣拂價格ト原價トノ差		
	損益	0	
	器具備品		0
	器具備品滅失毀損		
	損益	0	
	生產品		0
	生產品滅失毀損又ハ減價		
	損益	0	
	前金拂		0
	損益ニ組替	0	0

7　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	仕掛品	0	
	損益		0
	仕掛品受入		
	生產品	0	
	損益		0
	契約濟價格差增		
	前金拂	0	
	損益		0
	未經過費用組替		
	收入未濟	0	
	損益		0
	收入未濟		
	收入未濟	0	
	收入未濟物品未渡		0
	收入未濟中物品引渡未濟		
	損益	0	
	支出未濟		0
	支出未濟		
	損益	0	
	支拂期日未到支出未濟		0
	支拂期日未到支出未濟		
	損益	0	
	固定財產減價償却金繰入未濟		0
	固定財產減價償却金繰入未濟	0	0

第二十四號書式

「某年度何々會計原簿」

何々

年月日	摘要	日記丁數	借	貸	借或貸	殘
			圓	圓		圓
何年何月何日	何々		0			
〃	何々			0	借	0
備考特別	會計規則ニ依リ要スル原簿ハ此ノ書式ニ依ル					

8　　何年何月何日

原簿丁數	原簿科目	借	貸
		圓	圓
	何々收入（款）	0	
	損益		0
	損益ニ組替		
	損益	0	
	何々費（款）		0
	同上		
	損益	0	
	國庫		0
	益金繰入	0	0

備考

原簿ニ於ケル科目ノ配置ハ下記ニ依ル　受入資金、損益、何々收入（款）、何々費（款）、收入未濟、前年度以前收入未濟、納期未到收入未濟、支出未濟、支拂期日未到支出未濟、固定財產減價償却金繰入未濟、前金受、前金拂、注文者提供材料受、收入未濟物品未渡、前年度以前收入未濟物品未渡、交付材料、國庫、生產品、仕掛品、注文者提供材料、器具備品（昭和四年九月第一八號ヲ以テ改正）

第二十五號書式

「某年度何々會計補助簿」

何々（原簿科目）　何々（細科目）

年月日	摘要	證憑番號	借貸	借	貸	借貸	殘
				圓	圓		圓
何年何ヶ月	何々						
何年何ヶ月	何々			0	0	借	0
備考	一特別會計規則ニ依リ要スル原簿ノ補助簿ハ此ノ書式ニ依ル 二本簿ハ所管大臣ノ定ムル細科目毎ニ口座ヲ設ケルモノトス 三本簿ノ外原簿ノ詳細ヲ明ニスル爲要スル所ノ補助簿ハ適宜各廳ニ於テ設ケルモノトス						

第二十六號書式

「某年度何々會計支拂元受高差引簿」

年月日	摘要	支拂元受高	支出濟額	殘額
		圓	圓	圓
何年何ヶ月	前年度ヨリ越	0		0
何年何ヶ月	歲入	0		
〃	〃		0	
〃	定額戻入		0	
〃	更正減額何々	0		0
〃	翌年度ヘ越		0	
〃	何々		0	0

第七章　雜則

第三十四條　本令ニ於テ作業所トハ印刷局、海軍火藥廠、海軍燃料廠、陸軍造兵廠及千住製絨所ヲ謂フ（大正一五年一二月第一五五一號ヲ以テ改正）

第三十五條　本令ニ於テ作業事務長トハ印刷局長、海軍火藥廠長、海軍燃料廠長、陸軍造兵廠長官及千住製絨所長ヲ謂フ（大正一五年一二月第一五五一號ヲ以テ改正）

第三十六條　本令ニ規定セサルモノハ會計規則ノ定ムル所ニ依ル

附則

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○特別會計ノ第一豫備金支出ニ關スル件

●勅令第百十八號　明治三十年四月二十八日

特別會計ノ豫算中ニ設ケタル第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ其ノ豫算ヲ所管スル主務大臣ニ於テ會計規則《第十八條》ノ勅令ニ基キ支出ヲナシ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ大藏大臣ニ通知シ大藏大臣ハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

○特別會計恩給負擔金ヲ一般會計ニ繰入ルルコトニ關スル法律

●法律第八號　昭和六年三月二十八日

各特別會計ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ當該會計ニ於テ俸給又ハ給料ヲ支辨シタル公務員若ハ之ニ準ズベキ者又ハ其ノ遺族ノ恩給（外國人恩給ヲ含ム）支拂ニ充ツベキ金額ヲ一般會計ニ繰入ルルコトヲ得恩給法第十七條ノ規定ニ依リ國庫ノ分擔スル金額ニ付亦同ジ

附則

本法ハ昭和六年度ヨリ之ヲ施行ス

○特別會計ニ於ケル營繕費ニ關スル法律

●法律第九號　昭和六年三月二十八日

特別會計所屬ノ營繕ニ要スル經費ハ當該特別會計法ノ規定ニ拘ラズ之ヲ一般會計ノ所屬ト爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ一般會計ノ所屬ト爲シタル經費ニ充用スル

ル爲必要ナル金額ハ當該特別會計ヨリ之ヲ一般會計ニ繰入ルルモノトス

前項ノ規定ニ依リ各特別會計ノ一般會計ニ繰入ルベキ金額ノ每年度歲出豫算ニ於ケル支出殘額ハ遞次之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

附　則

本法ハ昭和六年度ヨリ之ヲ施行ス

第二款　外務省所管

○對支文化事業特別會計法

●法律第三十六號　大正十二年三月三十一日

改正　大正一五年第二九號

第一條　對支文化事業助長ノ爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　左ニ揭クル證券ハ之ヲ本會計ニ歸屬セシム

一　明治三十四年支那國及列國最終議定書第六條ノ規定ニ依リ支那國政府ヨリ受領シタル四分利付支那國債券

二　山東懸案解決ニ關スル條約第六條及第二十五條竝山東懸案細目協定第十九條ノ規定ニ依リ支那國政府ヨリ交付ヲ受クル國庫證券中製鹽業者ニ交付スルモノヲ除キタルモノ

三　山東懸案解決ニ關スル條約第十五條及第十八條竝山東懸案鐵道細目協定第四條ノ規定ニ依リ支那國政府ヨリ交付ヲ受クル國庫證券中【賠償金特別會計】ニ歸屬セシメラルヘキモノヲ除キタルモノ

第三條　山東懸案解決ニ關スル條約第二十二條ノ規定ニ依リ設立セラルル會社ヨリ山東懸案細目協定第二十四條ノ規定ニ依リ支拂ヲ受クル補償金中【賠償金特別會計】ニ繰入レラルヘキモノヲ除キタル殘額ハ之ヲ本會計ニ繰入ル

ヘシ

第四條　本會計ニ於テハ左ニ揭クル諸收入ヲ以テ其ノ歲入トス

一　所屬證券ノ償還元利金
二　所屬資金ノ運用利殖金
三　寄附金
四　附屬雜收入

第五條　本會計ニ於テハ左ニ揭クル事業ニ關スル諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

一　支那國ニ於テ行フヘキ教育、學藝、衞生、救恤其ノ他文化ノ助長ニ關スル事業
二　帝國ニ在留スル支那國人民ニ對シテ行フヘキ前號ニ揭クル事業ト同種ノ事業
三　帝國ニ於テ行フヘキ支那國ニ關スル學術研究ノ事業

第六條　寄附金ニシテ特ニ用途ヲ指定シタルモノハ其ノ條件ニ從ヒ之ヲ使用スヘシ

第七條　本會計ノ歲出額ハ寄附金ニ依ルモノヲ除クノ外每年度三百万圓ヲ超過スルコトヲ得ス

第八條　本會計ノ決算上剩餘金ヲ生スルトキハ之ヲ積立ツヘシ

第九條　本會計ノ資金ハ國債ヲ以テ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入レ之ヲ運用スルコトヲ得

第十條　政府ハ每年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第十一條　本會計ノ每年度歲出豫算ニ於ケル事業費ノ支出殘額ハ遞次之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

附　則

本法ハ大正十二年度ヨリ之ヲ施行ス

大正十一年度一般會計ニ於テ明治三十四年支那國及列國最終議定書第六條ノ規定ニ依リ支那國政府ヨリ受領シタル四分利付支那國債券ノ元利償還金收入トシテ受入レタル金額ニ相當スルモノハ本法施行ノ際之ヲ本會計ノ歲入ニ繰入ルヘシ

第二條第二號及第三號ニ規定スル國庫證券ニシテ本法施行前支那國政府ヨリ交付ヲ受ケタルモノハ本法施行ノ際之ヲ本會計ニ歸屬セシム

第三款　內務省所管

○健康保險特別會計法

●法律第二十六號　大正十五年三月二十九日

改正　昭和四年第二二號

第一條　健康保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　本會計ニ於テハ保險料、一般會計ヨリ繰入ルル金額、積立金ヨリ生スル收入、借入金及附屬雜收入ヲ以テ其

○勞働者災害扶助責任保險特別會計法

●法律第五十六號　昭和六年四月二日

第一條　勞働者災害扶助責任保險法ニ依ル勞働者災害扶助責任保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　本會計ニ於テハ保險料、積立金ヨリ生ズル收入、借入金及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ保險金、保險料ノ返還金、保險施設費、借入金ノ償還金及其ノ利子、一時借入金ノ利子、事業取扱費其ノ他ノ諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

第三條　本會計ニ於テ決算上剩餘金ヲ生ズルトキハ之ヲ積立ツベシ

本會計ノ歲計ニ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スベシ

第四條　本會計ニ屬スル經費ヲ支辨スル爲必要アルトキハ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ借入ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ借入ヲ爲スコトヲ得ル金額ハ純保險料ヲ以テ保險金及保險料ノ返還金ヲ支辨スルニ不足スル金額ヲ限度トス

第五條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ餘裕アルトキハ之ヲ大藏省預金部ニ預入ルルコトヲ得

第六條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足アルトキハ本會計ノ負擔ニ於テ一時借入ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル一時借入金ハ當該年度內ニ之ヲ返還スベシ

第七條　本會計ノ積立金ハ國債ヲ以テ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入レ之ヲ運用スルコトヲ得

第八條　政府ハ每年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スベシ

第九條　本會計ノ每年度歲出豫算ニ於ケル事業費ノ支出殘額ハ之ヲ翌年度ニ繰越使用スルコトヲ得

第十條　本會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法ハ昭和六年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

一般會計ハ昭和六年度ニ限リ其ノ豫算ノ定ムル金額ヲ本會計ニ繰入ルルコトヲ得

第四款　大藏省所管

○造幣局特別會計法

●法律第九號　大正四年六月二十一日

改正　昭和四年第二四號

第一條　造幣局ノ事業ヲ經營スル爲固定資本、据置運轉資本及資金ヲ置キ作業上ノ收入、附屬雜收入及資金ニ屬スル收入ヲ以テ歲入ト爲シ作業ノ費用及資金ニ屬スル支出ヲ以テ歲出ト爲シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條　造幣局ニ於テ從來使用シ及將來增加スル所ノ土地、建物、築造、機械、重要ナル器具及標本ヲ以テ固定資本トシ從來ノ据置運轉資本ヲ以テ据置運轉資本トス資金ハ大正四年度末現在ノ貨幣整理資金特別會計所屬ノ資金ヲ以テ之ニ充テ舊貨幣及流通不便貨幣ノ交換及處分ニ關スル用途ニ使用ス

貨幣製造ノ準備トシテ必要ナル材料地金ハ資金ヲ以テ之ヲ保有スルコトヲ得（昭和四年三月第二四號ヲ以テ追加）

第二條ノ二　製造濟ノ補助貨ニシテ年度內ニ發行ニ至ラサルモノハ資金ニ受入レ之ヲ保有スルコトヲ得（昭和四年三月第二四號ヲ以テ追加）

第三條　固定資本ノ維持、修理及補充ハ作業上ノ歲入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第四條　本會計ニ於ケル作業上ノ歲出額ハ其ノ實際ノ歲入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過スルコトヲ許サス

第五條　資金ニ屬スル收入支出ハ別途ノ歲入歲出トシテ之ヲ整理スヘシ

第六條　作業上益金ヲ生シタルトキハ之ヲ資金ニ編入シ損失ヲ生シタルトキハ之ヲ資金ヨリ補塡スヘシ（昭和四年三月第二四號ヲ以テ改正）

第七條　資金ノ收入支出ノ決算上過剩ヲ生シタルトキハ之ヲ該資金ニ編入スヘシ

第八條　固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ之ヲ一般ノ歲入ニ編入スヘシ

第九條　政府ハ每年本特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第十條　本會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法ハ大正五年度ヨリ之ヲ施行ス

附　則（昭和四年三月二十九日法律第二十四號）

本法ハ昭和五年度ヨリ之ヲ施行ス

明治四十五年法律第一號ニ依リ淸國事件費支辨ノ爲繰替使用シタル造幣局資金二百二十八萬七百九十七圓五十七錢五厘及大正五年法律第四號ニ依リ大正三年臨時事件費支辨ノ爲繰替使用シタル造幣局資金三百五十萬圓ニ付テハ之ニ相當スル金額ヲ造幣局資金ヨリ減額シテ整理スルコトヲ得

○造幣局特別會計規則

●勅令第七十五號　大正五年三月三十一日
改正　大正一一年第三六號、一五年第二六四號、昭和五年第三三號、

第一條　左ノ諸收入ヲ以テ作業上ノ歳入トス
第一　作業上ノ收入
第二　附屬雜收入
第二條　左ノ諸費ヲ以テ作業上ノ歳出トス
第一　事務員技術員ノ俸給諸給旅費
第二　事務所費
第三　職工人夫ニ給スル諸費
第四　作業用器具機械及標本ノ維持修理及補充費
第五　材料素品購入代
第六　動力費
第七　作業場用備品消耗品費
第八　建物及築造ノ維持修理及補充費
第九　（削除）
第三條　左ノ諸收入ヲ以テ資金ニ屬スル歳入トス
第一　地金賣拂代
第二　既往年度製造濟補助貨發行代リ金（昭和五年二月第三號ヲ以テ追加）
第三　附屬雜收入
第四條　左ノ諸費ヲ以テ資金ニ屬スル歳出トス
第一　舊貨幣及流通不便貨幣ノ交換金竝舊貨幣ノ交換ニ關スル諸費（大正一五年七月第二六四號ヲ以テ改正）
第二　舊貨幣及流通不便貨幣ノ處分ニ關スル諸費
第三　地金購入代（昭和五年二月第三號ヲ以テ追加）
第四　當該年度製造濟未發行補助貨受入代リ金（昭和五年二月第三號ヲ以テ追加）
前項第四號ノ代リ金ハ原價ニ依ルヘシ（昭和五年二月第三號ヲ以テ追加）
第五條　造幣局ハ据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高及當該年度作業上ノ收入濟歳入額ヲ以テ支拂元受高トシ作業上ノ歳出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス
第六條　所管大臣ハ大藏大臣ノ承認ヲ經テ補助貨鑄造ノ材料素品購入代ニ相當スル金額ヲ限リ資金ニ屬スル現金ヲ前條ノ支拂元受高ニ繰替使用スルコトヲ得
前項ノ規定ニ依リ繰替使用シタル金額ハ當該年度内ニ之

ヲ返還スヘシ
第六條ノ二　每年度ニ屬スル歳出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出スハ當該年度三月三十一日限トス但シ資金ニ屬スル歳出ニシテ國庫内ニ於ケル移換ノ爲ニスル支出又ハ會計法第十九條ノ規定ニ依リ歳出金ニ繰替使用シタル現金補填ノ爲ニスル支出ニ付テハ翌年度四月三十日迄小切手ヲ振出スコトヲ得
第七條　受拂勘定ハ作業上ノ歳入ノ收入濟額、收入未濟額、据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高、繰替金受入額、總生産品ノ價格、總材料及素品ノ價格、總機械運轉用品ノ價格、作業場用總備品ノ價格、代價支出濟未收物品ノ價格ヲ以テ受入トシ作業上ノ歳出ノ支出濟額、支出未濟額、据置運轉資本額、繰替金返還額、賣拂代價收入濟物品ノ價格、賣拂代價收入未濟既出物品ノ價格、消費シタル材料及素品ノ價格、消費シタル機械運轉用品ノ價格、損失ニ歸シタル物品ノ價格ヲ以テ拂出トシ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ殘餘アルトキハ之ヲ作業ノ益金トシテ資金ヨリ補填スヘシ（昭和五年二月第三三號ヲ以テ改正）
第八條　資金ノ受拂勘定ハ資金ニ屬スル歳入ノ收入濟額、收入未濟額、資金ニ屬スル現金ノ持越高、繰替金返還受入額、作業益金受入額、未發行補助貨ノ價格、總地金ノ價格ヲ以テ受入トシ資金ニ屬スル歳出ノ支出濟額、支出未濟額、資金額、繰替金拂出額、賣拂代價收入濟地金ノ價格、賣拂代價收入濟既出地金ノ價格、未發行補助貨ノ發行拂出額、作業損金補填額ヲ以テ拂出トシ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ過剰アルトキハ之ヲ資金ニ編入シ不足ヲ生スルトキハ資金ノ減額ト爲スヘシ（昭和五年二月第三三號ヲ以テ改正）
第九條　本令ニ規定セサル事項ニ關シテハ作業會計規則ヲ準用ス

附　則

本令ハ大正五年度ヨリ之ヲ施行ス

○造幣局据置運轉資本增加及設備擴張費ニ關スル法律

●法律第九號　大正八年三月二十五日
改正　大正九年第三號

大正八年度ニ於テ造幣局据置運轉資本ニ百五十萬圓ヲ增加ス
（參照總額四百萬圓トス）
前項資本ノ增加及大正八年度乃至大正十一年度ニ亙リ造幣局ノ設備擴張ニ要スル經費ニ充用スル爲造幣局資金ノ内三百四十五萬二千二百二十九圓ヲ限リ一般會計ニ繰入ルルコトヲ得

○專賣局作業會計規則

●勅令第二十五號　明治三十三年二月二日

改正　明治三三年第一三〇號、三四年第一二八號、三五年第二〇三號、三七年第一六二號、三八年第二九號、三九年第三七號、第三〇二號、四一年第五四號、大正四年第四七號、一一年第三五號

第一條　歲入歲出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ各省豫定經費要求書ト倶ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二條　所管大臣ハ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表及固定資本價格增減表ヲ調製シ歲入歲出ノ豫定計算書ニ添附スヘシ

第三條　歲入歲出ノ豫算ハ決定ノ後所管大臣之ヲ專賣局長官及他ノ官吏ニ命シテ執行セシムヘシ

第四條　（削除）

第五條　歲入歲出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第六條　支出官ハ煙草又ハ鹽ノ賠償及購買費、鹽ノ交付金、樟腦又ハ樟腦油ノ補償金、荷造費、職工人夫ニ給スル諸費、外國ニ於テ支拂ヲ爲ス經費竝支所ノ經費ニ限リ所屬ノ出納官吏ニ資金ノ前渡ヲ爲スコトヲ得

第七條　每年度ニ屬スル歲出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出スハ當該年度三月三十一日限トス但シ會計法第十九條ノ規定ニ依リ歲出金ニ繰替使用シタル現金補塡ノ爲ニスル支出ニ付テハ翌年度四月三十日迄小切手ヲ振出スコトヲ得

第八條　每年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ當該年度三月三十一日限トス

第八條ノ二　煙草、鹽、樟腦及樟腦油ノ賣拂代金ハ其ノ納入告知書ニ指定シタル納期末日ノ屬スル年度ノ歲入トス

第九條　每年度內ニ收入ヲ爲スヘキ權利ヲ得テ當該年度內ニ收入濟トナラサルモノハ收入未濟トシテ順次翌年度ニ繰越シ現ニ收入ヲナシタル年度ノ歲入ニ組入ルヘシ

第十條　每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ當該年度內ニ小切手ヲ振出ササルモノハ支出未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越シ時效完成ニ至ル迄ハ支拂ノ請求アル每ニ小切手ヲ振出スヘシ但シ支出未濟ノ繰越額ハ支出濟額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第十一條　（削除）

第十二條　（削除）

第十三條　（削除）

第十四條　歲入ヲ徵收スル官吏ハ其徵收簿ノ結果ニヨリ每月徵收報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ翌月十五日迄ニ專賣局ニ送付スヘシ

專賣局ハ作業全部ノ每月徵收總報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ其ノ翌月中ニ所管大臣ヲ經由シテ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第十五條　支出官ハ每月支出濟額報告書ヲ調製シ之ヲ專賣

附　則

本法ハ大正八年度ヨリ之ヲ施行ス

事業公債及鐵道公債特別會計法（明治三十二年二月八日法律第十三號）、朝鮮事業公債特別會計法（明治四十四年三月二十三日法律第十九號）ハ之ヲ廢止ス

本法施行ノ際前項ノ各特別會計ニ屬スル公債金ハ之ヲ本會計ノ歲入ニ繰入ルヘシ

○賠償金特別會計法廢止法律

五五

●法律第七號　昭和六年三月二十八日

賠償金特別會計法ハ昭和五年度限リ之ヲ廢止ス

賠償金特別會計ニ屬スル資金及權利義務ハ之ヲ一般會計ニ歸屬セシム

昭和五年度賠償金特別會計ノ歲出豫算ニ於ケル支出殘額ハ之ヲ一般會計ニ繰越シ使用スルコトヲ得

○國有財産整理資金特別會計法

●法律第六號　大正十一年三月二十八日

第一條　國有財産整理資金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般ノ會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第二條　國有財産整理資金ハ國有財産ノ整理處分ニ因ル收入及附屬雜收入ヲ以テ之ニ充ツ但シ其ノ收入ニシテ他ノ特別會計ノ歳入ニ屬スルモノ及國有林野又ハ北海道國有未開地ノ處分ニ因ルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第三條　國有財産整理資金ハ國有財産ノ整理ニ關シ必要ナル事務費、營繕費其ノ他ノ諸費ニ之ヲ使用ス

第一章　資　金

第一條　資金ニシテ特ニ用途ヲ指定シタルモノハ之ヲ特別資金トシ其ノ他ノモノハ之ヲ雜特資金トス

特別資金ヨリ生スル利子其ノ他ノ收入ハ特定ノ用途ニ充テ其ノ殘餘ハ該資金ノ增殖ニ充ツルモノトス

雜特資金ヨリ生スル利子其ノ他ノ收入ハ學校圖書館特別會計法第三條但書其ノ他特別ノ規定ニ依リ整理スル資金ヨリ生スル收入ハ各當該學校及圖書館ノ經費ニ充ツルモノトス

第二條　資金ハ所管大臣之ヲ管理スヘシ

第三條　資金ニ屬スル現金ハ總テ大藏省預金部ニ寄託スヘシ

第四條　資金ニ屬スル現金ヲ以テ不動産、公債證書其ノ他ノ證券ニ換ヘ又ハ資金ニ屬スル不動産、公債證書其ノ他ノ證券ヲ離權シ又ハ他ノ不動産、公債證書其ノ他ノ證券ニ換ヘムトスルトキハ所管大臣ハ大藏大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ但シ寄附ニ係ル不動産ハ寄附者ノ承諾ヲ得ルニ非サレハ離權スルコトヲ得ス

第五條　資金ニ屬スル現金ノ會計ハ別途ノ歳入歳出トシテ之ヲ整理スヘシ

第六條　資金ニ屬スル現金ノ受入及拂出ニ關スル取扱方ハ所管大臣大藏大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第二章　豫算決算

第七條　歳入歳出豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第八條　所管大臣ハ其ノ年三月三十一日現在ノ資金明細目錄ヲ調製シ每年度ノ豫算ニ添附スヘシ

第九條　歳入歳出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三章　收入支出

第十條　所管大臣ハ支部大臣官房會計課長ヲシテ印刷及用紙ニ關スル歳入歳出豫算ノ一部ヲ施行セシムルコトヲ得（昭和四年四月第三四號ヲ以テ改正）

第十一條　學校及圖書館ニ於テハ當該年度ノ收入濟歳入額ヲ以テ支拂元受高ト爲シ歳出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス

第十二條　（削除）

第十三條　（削除）

第十四條　（削除）

第十五條　學校及圖書館ニ於テ在外國人、學術家又ハ學術研究旅行者ニ物品ノ購買採集又ハ實驗ヲ委託スル場合ニ於テハ其ノ委託ヲ受ケタル者ヲ受取人トシ概算渡ヲ爲スコトヲ得

第四章　年度繰越

第十六條　每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ翌年度四月三十日迄ニ小切手ヲ振出ササルモノハ支出未濟トシテ遲次翌年度ニ繰越シ時效完成ニ至ル迄ハ支拂ノ請求アル每ニ小切手ヲ振出スヘシ但シ支出未濟ノ繰越額ハ支出濟

額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第十七條　工事、製造又ハ物品ノ買入若ハ運搬ニ關スル經費ニシテ每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生セス小切手ヲ振出スニ至ラサリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越スコトヲ得

第十八條　所管大臣ハ前條ニ依リ繰越ヲ爲サムトスルトキハ翌年度四月三十日迄ニ繰越計算書ヲ作リ參照書類ヲ添ヘ大藏大臣ノ承認ヲ求ムヘシ

第十九條　大藏大臣ハ前條繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

第二十條　特ニ用途ヲ指定シタル寄附金ニシテ每年度內ニ小切手ヲ振出スニ至ラサリシ殘額ハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スヘシ但シ支出殘額ニシテ爾後支拂ヲ要セサルモノハ寄附者ノ同意ヲ得テ之ヲ資金ト爲スコトヲ得

第二十一條　第十六條又ハ前條ノ規定ニ依リ繰越シタル支出未濟ノ金額ニシテ會計法第三十二條ノ規定ニ依リ支拂義務消滅シタルモノ及會計規則第五十四條ノ規定ニ依リ歲入ニ組入ルヘキモノハ總テ資金ニ組入ルヘシ

第二十二條　每年度ノ歲入中支出濟額及繰越額ヲ控除シタル殘餘ハ總テ資金ニ組入ルヘシ

第五章　雜　則

第二十三條　（削除）

第二十四條　（削除）

第二十五條　文部省ハ歲入簿ヲ備ヘ歲入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第二十六條　支出官ハ支出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第二十六條ノ二　文部省ハ歲出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第二十七條　所管大臣ハ部下ノ高等官ヲ以テ學校及圖書館會計監理官トシ學校及圖書館ノ會計ヲ監督セシムヘシ

第二十八條　本令ニ規定セサルモノニ付テハ會計規則ヲ準用ス

附　則

本令ハ明治四十年度ヨリ之ヲ施行ス

第八款　農林省所管

○米穀需給調節特別會計法

●法律第三十七號　大正十年四月四日

改正　大正一四年第三三號、昭和四年第三〇號、昭和六年第三二號

第一條　米穀ノ數量又ハ市價ノ調節ノ爲ニスル米穀ノ買入、賣渡、交換、加工又ハ貯藏ニ關スル一切ノ歲入歲出ハ之ヲ一般會計ト區分シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條　本會計ニ屬スル經費ヲ支辨スル爲必要アルトキハ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ借入ヲ爲スコトヲ得

（第二項昭和六年三月第三二號ヲ以テ削除）

第三條　米穀ノ買入代價ハ外國ヨリ直接ニ買入ルル場合ヲ

除クノ外一年內ニ償還スヘキ證券ヲ以テ其ノ額面金額ニ依リ之ヲ交付ス

前項ノ證券ハ無記名證券トス

第一項ノ規定ニ依リ交付スル爲政府ハ證券ヲ發行スルコトヲ得

第四條　日本銀行ハ前條ノ證券ノ所持人ノ請求ニ依リ政府ノ定ムル歩合ヲ以テ其ノ證券ノ割引ヲ爲スヘシ

第四條ノ二　第三條ノ規定ニ依リ發行スル證券ノ借換ノ爲政府ハ借入ヲ爲シ又ハ一年內ニ償還スヘキ證券ヲ發行スルコトヲ得其ノ借換ニ付亦同シ（昭和六年三月第三二號ヲ以テ追加）

第四條ノ三　本會計ノ負擔ニ屬スル證券及借入金ノ額ハ通シテ最高三億五千萬圓トス（昭和六年三月第三二號ヲ以テ追加）

第五條　本會計ノ負擔ニ屬スル證券及借入金ノ償還金及利子竝證券ノ發行及償還ニ關スル諸費ノ支出ニ必要ナル金額ハ每年度國債整理基金特別會計ニ之ヲ繰入ルヘシ

第六條　本會計ハ借入金、米穀賣渡代金及附屬雜收入ヲ以テ歲入トシ米穀ノ買入代金、米穀ノ買入賣渡交換加工貯藏及運搬ニ關スル諸費、證券及借入金ノ償還金及利子其ノ他諸費ヲ以テ歲出トス

第七條　本會計ニ於テ支拂上餘裕アルトキハ大藏省預金部ニ之ヲ預入ルヘシ

第八條　本會計ノ決算上剩餘アルトキハ翌年度ノ歲入ニ之ヲ繰入ルヘシ

本會計ノ每年度歲出豫算ニ於ケル支出殘額ハ遞次之ヲ翌年度ニ繰越使用スルコトヲ得

第九條　政府ハ每年度本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ之ヲ提出スヘシ

第十條　本會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法ハ大正十年度ヨリ之ヲ施行ス

○米穀需給調節特別會計規則

●勅令第二百二十四號　大正十年五月二十四日

改正　大正一一年第四〇號

第一條　歲入歲出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

前項ノ豫定計算書ニハ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ貸借對照表及損益計算表竝其ノ年三月三十一日ニ於ケル米穀在高明細表ヲ添附スヘシ

第二條　本會計ニ於テハ當該年度ノ收入濟歲入額ヲ以テ支拂元受高トシ歲出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條　每年度ニ屬スル歲出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出スハ當該年度三月三十一日限トス但シ國庫內ニ於ケル移換ノ爲ニスル支出又ハ會計法第十九條ノ規定ニ依リ歲出金ニ繰替使用シタル現金補塡ノ爲ニスル支出ニ付テハ翌年

度四月三十日迄小切手ヲ振出スコトヲ得

第四條　每年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ當該年度三月三十一日限トス

第五條　每年度內ニ收入ヲ爲スヘキ權利ヲ得テ當該年度內ニ收入濟ト爲ラサルモノハ收入未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越シ現ニ收入ヲ爲シタル年度ノ歲入ニ組入ルヘシ

第六條　每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ當該年度內ニ小切手ヲ振出ササルモノハ支出未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越シ時效完成ニ至ル迄ハ支拂ノ請求アル每ニ小切手ヲ振出スヘシ但シ支出未濟ノ繰越額ハ支出濟額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第七條　（削除）

第八條　歲入歲出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條　本會計ノ保有スル米穀ノ價格ハ每年度三月三十一日ニ於テ市價ニ準據シ之ヲ改定スヘシ

第十條　貸借對照表、損益計算表及米穀在高明細表ノ樣式ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十一條　（削除）

第十二條　所管大臣ハ日記簿、原簿及補助簿ヲ備ヘ本會計ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スヘシ

第十三條　支出官ハ支出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第十三條ノ二　【農商務省】ハ歲出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ但シ支出官一人ナル場合ニ於テハ支拂元受高差引簿ヲ省略スルコトヲ得

第十四條　本令ニ規定セサルモノニ付テハ會計規則ヲ準用ス

附　則

本令ハ大正十年度ヨリ之ヲ適用ス

大正七年勅令第九十二號（外國米ノ輸入等ニ關スル件）ハ大正十年五月三十一日限之ヲ廢止ス

○家畜再保險特別會計法

●法律第十一號　昭和四年三月二十八日

第一條　家畜保險法ニ依ル家畜再保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　本會計ニ於テハ再保險料、積立金ヨリ生ズル收入、借入金及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ再保險金、再保險料ノ還付金、借入金ノ償還金及其ノ利子、一時借入金ノ利子、事業取扱費其ノ他ノ諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

第三條　本會計ニ於テ決算上剩餘金ヲ生ズルトキハ之ヲ積立ツベシ

本會計ノ歲計ニ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スベシ

第四條　本會計ニ屬スル經費ヲ支辨スル爲必要アルトキハ政府ハ本會計ノ負擔ニ於テ借入ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ借入ヲ爲スコトヲ得ル金額ハ純再保險料ヲ以テ再保險金及再保險料ノ還付金ヲ支辨スルニ不足スル金額ヲ限度トス

第五條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ餘裕アルトキハ之ヲ大藏省預金部ニ預入ルルコトヲ得

第六條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足アルトキハ本會計ノ負擔ニ於テ一時借入ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依ル一時借入金ハ當該年度內ニ之ヲ返還スベシ

第七條　本會計ノ積立金ハ國債ヲ以テ保有シ又ハ大藏省預金部ニ預入レ之ヲ運用スルコトヲ得

第八條　政府ハ每年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スベシ

第九條　本會計ノ每年度歲出豫算ニ於ケル事業費ノ支出殘額ハ之ヲ翌年度ニ繰越使用スルコトヲ得

第十條　本會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法ハ昭和四年度ヨリ之ヲ施行ス

一般會計ハ當分ノ內每年度豫算ノ定ムル金額ヲ本會計ニ繰入ルルコトヲ得

○家畜再保險特別會計規則

●勅令第三十三號　昭和四年四月一日

第一條　歲入歲出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スベシ

前項ノ豫定計算書ニハ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ貸借對照表及損益計算表竝ニ其ノ年三月三十一日現在ノ積立金明細目錄ヲ添附スベシ

第二條　本會計ニ於テハ當該年度ノ收入濟歲入額及家畜再保險特別會計法第六條ニ規定スル一時借入金ヲ以テ支拂元受高トシ歲出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ズ

第三條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足ヲ生ジタルトキハ所管大臣ハ大藏大臣ノ承認ヲ經テ家畜再保險特別會計法第六條ニ規定スル一時借入金ニ代ヘ積立金ニ屬スル現金ヲ前條ノ支拂元受高ニ繰替使用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ繰替使用シタル金額ハ當該年度內ニ之ヲ返還スベシ

第四條　再保險料收入ノ年度所屬ハ其ノ再保險料ヲ負擔スベキ義務ノ發生シタル日ノ屬スル年度ニ依ル

第五條　每年度內ニ收入ヲ爲スベキ權利ヲ得テ每年度出納ノ完結迄ニ收入濟ト爲ラザルモノハ收入未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越シ現ニ收入ヲ爲シタル年度ノ歲入ニ組入ル

ベシ

第六條　每年度內ニ支拂ヲ爲スベキ義務ヲ生ジ每年度出納ノ完結迄ニ支出濟ト爲ラザル歲出ニシテ時效完成ニ至ラザルモノハ支出未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越スベシ但シ支出濟額ト合シテ豫算額ヲ超過スルコトヲ得ズ

第七條　每年度ノ歲入ノ收入濟額ヨリ歲出ノ支出濟額、翌年度繰越額及未經過再保險料ニ相當スル金額ヲ控除シ殘餘アルトキハ之ヲ積立金ニ組入レ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スベシ

前項ニ規定スル未經過再保險料ノ計算ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第八條　歲入歲出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スベシ

第九條　農林省ハ日記簿、原簿及補助簿ヲ備ヘ家畜再保險ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スベシ

第十條　貸借對照表及損益計算表ノ樣式ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第十一條　支出官ハ支出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スベシ

第十二條　農林省ハ歲出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スベシ但シ支出官一人ナル場合ニ於テハ支拂元受高差引簿ヲ省略スルコトヲ得

第十三條　本令ニ規定セザルモノニ付テハ會計規則ヲ準用ス

附　則

本令ハ昭和四年度ヨリ之ヲ施行ス

第九款　商工省所管

○製鐵所特別會計法

●法律第四十六號　大正十五年三月三十一日
改正　昭和六年第一一號

第一條　製鐵所ノ事業ヲ經營スル爲從來ノ固定資本及據置運轉資本竝將來ノ製鐵所益金及本會計ノ負擔ニ屬スル公債又ハ借入金ヲ以テ資本ト爲シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充テ特別會計ヲ設置ス

第二條　製鐵所ニ於テ固定財產ノ擴張及改良ニ要スル經費ヲ支辨スル爲必要アルトキハ公債ヲ發行シ又ハ借入ヲ爲スコトヲ得但シ公債又ハ借入金ノ額ニ付テハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

製鐵所ニ於テ運轉資金ニ充ツル爲必要アルトキハ最高七千萬圓ヲ限度トシ公債ヲ發行シ又ハ借入ヲ爲スコトヲ得

（昭和六年三月第一一號ヲ以テ改正）

第三條　左ニ揭クル國債ハ本會計ノ負擔トス

一　製鐵所ノ創設及擴張ニ必要ナル經費ヲ支辨スル爲從來發行シタル公債及之カ借換ノ爲從來發行シタル公債

二　前條ノ規定ニ依ル公債又ハ借入金

三　前二號ニ規定スル國債ノ借換ノ爲起債シタル國債

前項ニ規定スル國債ノ償還金、利子、割引料竝發行及償還ニ關スル經費ノ支出ニ必要ナル金額ハ每年度之ヲ國債整理基金特別會計ニ繰入ルヘシ

第四條　本會計ハ之ヲ資本勘定、用品勘定及作業勘定ニ區分ス

第五條　資本勘定ハ作業益金繰入金、固定財產減價償却繰入金、公債募集金、借入金、固定財產ノ賣拂代金其ノ他附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ固定財產ノ擴張費改良費補充費、本勘定ニ於テ使用スル固定財產ノ維持修理費、國債償還金其ノ他附屬諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

第六條　用品勘定ハ用品收入、工作收入其ノ他附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ用品費、工作費、本勘定ニ於テ使用スル固定財產ノ維持修理費減價償却金其ノ他附屬諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

第七條　作業勘定ハ作業上ノ諸收入、固定財產ノ貸付料、預金利子其ノ他附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ作業上ノ諸費用、總係費、本勘定ニ於テ使用スル固定財產ノ維持修理費減價償却金、國債ノ利子割引料其ノ他附屬諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

第八條　需要ノ增加ニ基ク生產又ハ販賣ノ增加ニ因リテ生シタル豫算ノ不足ヲ補フ爲用品勘定及作業勘定ノ歲出ニ豫備費ヲ設クヘシ

第九條　用品勘定又ハ作業勘定ニ於テ使用スル固定財產ノ減價償却金ハ之ヲ資本勘定ニ繰入ルヘシ

第十條　用品勘定又ハ作業勘定ニ於テ決算上生シタル利益又ハ損失ハ之ヲ資本勘定ニ移シ整理スヘシ

第十一條　資本勘定ニ於テ決算上生シタル利益ハ之ヲ製鐵所益金トシ資本ニ組入ルヘシ

資本勘定ニ於テ決算上損失ヲ生シタルトキハ之ヲ製鐵所損金トシ資本ヲ減額スヘシ

第十二條　政府ハ每年本會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第十三條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足アルトキハ本會計ノ負擔ニ於テ最高千萬圓ヲ限度トシ一時借入ヲ爲シ又ハ融通證券ヲ發行スルコトヲ得

一時借入金及融通證券ニ依ル資金ハ當該年度內ニ之ヲ返還スヘシ

第十四條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ餘裕アルトキハ之ヲ大藏省預金部ニ預入ルヘシ

第十五條　本會計ノ收入支出及損益計算ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

第十六條　本法ハ大正十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第十七條　作業會計法第一條第一號乃至第六號ヲ左ノ如ク改メ同法第二條第三項ヲ削ル

第一　印刷局
第二　海軍火藥廠
第三　海軍燃料廠
第四　專賣局

第十八條　明治三十八年法律第十七號第二條第一項中「及製鐵所」、「專賣局ニ在リテハ」及「製鐵所ニ在リテハ九千八百萬圓」ヲ削ル

第十九條　本法ニ依リ本會計ニ於テ借入ヲ爲シ又ハ一時借入ヲ爲ス必要アル場合ニ於テハ當分ノ內當該年度內ニ限リ國庫餘裕金ヲ繰替使用スルコトヲ得

第二十條　本法施行前ニ於ケル製鐵所特別會計（作業會計法ニ依ルモノ）ニ屬スル收入及支出ノ未濟額ハ之ヲ本會計ニ繰越スヘシ

第二十一條　一般會計ノ歲出豫算ニ於ケル製鐵所擴張費ハ大正十六年度以降本會計ノ所屬トス

一般會計ノ歲出豫算ニ於ケル製鐵所擴張費及製鐵所設備補足費ニシテ大正十五年度ヨリ翌年度ニ繰越ヲ要スルモノハ之ヲ本會計ニ移シ使用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ繰越ヲ爲シタル場合ニ於テハ一般會計ハ其ノ繰越額ニ相當スル金額ヲ本會計ニ繰入ルヘシ

○製鐵所特別會計規則

勅令第三百五十一號　大正十五年十二月十四日
改正　昭和四年第三〇四號

第一章　豫算決算

第一條　本會計ニ於ケル歲入歲出豫算ハ之ヲ資本、用品及作業ノ三勘定ニ分チ各勘定中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

第二條　所管大臣ハ每年度歲入歲出ノ豫定計算書ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

前項ノ豫定計算書ニハ當該年度豫定損益計算表竝前々年度損益計算表、同貸借對照表、同財產目錄、同固定財產價格增減表及前々年度以前既往五箇年間資本增減表ヲ添附スヘシ

第三條　會計規則第十九條、第二十條及第二十四條ノ規定ハ製鐵所特別會計法第八條ノ豫備費ノ支出ニ付之ヲ準用ス

第四條　所管大臣ハ每年度歲入歲出ノ決定計算書ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二章　收入支出

第五條　歲入歲出ノ豫算ハ決定ノ後豫備費ヲ除キ所管大臣製鐵所長官ニ命シテ之ヲ執行セシムヘシ但シ製鐵所ノ部

局長ヲシテ其ノ一部ヲ執行セシムルコトヲ得

第六條　本會計ニ於テハ本會計ニ屬スル前年度ヨリノ現金ノ持越高、當該年度ノ收入濟歲入額竝製鐵所特別會計法第十三條ニ規定スル一時借入金及融通證券ニ依ル資金ノ現在額ヲ支拂元受高トシ歲出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス

第七條　每年度ニ屬スル歲入金歲出金ノ出納ヲ爲スハ當該年度三月三十一日限トス但シ本會計各勘定相互間ニ於テ歲入金歲出金ノ出納ヲ爲ス場合及會計法第十九條ノ規定ニ依リ歲出金ニ繰替使用シタル現金補塡ノ爲支出スル場合ハ翌年度四月三十日、用品勘定又ハ作業勘定ノ益金ヲ資本勘定ニ繰入ルル場合ハ翌年度五月三十一日迄之カ出納ヲ爲スコトヲ得（昭和四年九月第三〇四號ヲ以テ改正）

第八條　每年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ當該年度三月三十一日限トス

第九條　隨時ノ收入ニシテ納入告知書ヲ發スルモノハ其ノ納入告知書ニ指定シタル納期末日ノ屬スル年度ノ歲入トス

第十條　本會計ニ於テ每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ當該年度三月三十一日迄ニ支出濟トナラサル歲出ニシテ時效完成ニ至ラサルモノハ支出未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越スヘシ但シ支出濟額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第十一條　歲入徵收官ハ每月徵收報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ之ヲ製鐵所長官ニ送付スヘシ

第十二條　製鐵所長官ハ徵收報告書ニ依リ每月徵收總報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第十三條　支出官ハ每月支出濟額報告書ヲ調製シ之ヲ製鐵所長官ニ送付スヘシ

第十四條　製鐵所長官ハ支出濟額報告書ニ依リ每月支出總報告書ヲ調製シ支出濟額報告書ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三章　資本及財產

第十五條　本會計ノ資本ヲ分チテ固有資本及借入資本ノ二種トス

本會計ノ負擔ニ屬スル公債又ハ借入金ニ相當スル金額ヲ借入資本トシ其ノ他ノモノヲ固有資本トス

第十六條　製鐵所益金ハ之ヲ固有資本ニ組入レ製鐵所損金ハ之ヲ固有資本ヨリ減額スヘシ

第十七條　財產ハ價格ヲ附シテ之ヲ計算スヘシ

第十八條　本會計ニ於テハ土地、建物、工作物、船舶、機械、重要ナル器具備品竝鑛業權及工業所有權ヲ以テ固定財產トス

第四章　計算

第十九條　財產ヲ受入レタル場合ニ於テハ左ノ各號ニ依リテ之カ價格ヲ定ムヘシ

一　土地ハ購入費、埋立費又ハ交換當時ニ於ケル評定價格

二　建物、工作物、船舶、機械、器具、備品、鑛業權又ハ工業所有權ハ建造費、製作費又ハ購入費

三　用品ハ購入費、採掘費又ハ製作費

四　生產品ハ生產費

五　前各號ニ依リ價格ヲ定ムル能ハサルトキハ三人以上ノ評價人ヲ定メ前各號ニ準シ之ヲ評定セシメタル價格ノ平均額

據付費、運搬費、地上物件移轉費、地均費其ノ他之ニ準スヘキ經費ヲ要シタルトキハ之ヲ前項ノ價格ニ加算スヘシ

每年度末ニ於ケル未成工事又ハ仕掛品ノ價格ハ之ニ要シタル經費ヲ以テ當該物件ノ價格トス

第二十條　固定財產ノ價格ハ受入ノ翌年度ヨリ每年度末ニ於テ左ノ各號ニ規定スル價格ニ之ヲ改定スヘシ但シ土石採取ヲ目的トセサル土地ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一　鑛業權ニ付テハ總有效採取量及採掘ノ難易ヲ斟酌シテ鑛區ヲ區分シ各區分ニ付其ノ價格減耗割合ヲ定メ當該年度採取量ノ總有效採取量ニ對スル割合及當該年度採掘場所ノ價格減耗割合ニ應シテ價格ヲ遞減シタル殘額

二　土石採取ヲ目的トスル土地ニ付テハ殘骸價格ヲ定メ前號ニ準シテ價格ヲ遞減シタル殘額

三　工業所有權ニ付テハ存續年限ニ應シテ價格ヲ遞減シタル殘額

四　其ノ他ノ固定財產ニ付テハ耐用年限及殘骸價格ヲ定メ之ニ應シテ價格ヲ遞減シタル殘額

第二十一條　固定財產ニ擴張、改良又ハ補充ノ爲工事ヲ施シタル場合ニ於テハ其ノ費額及除却シタル部分ノ價格ヲ斟酌シテ其ノ價格ヲ改定スヘシ

前項ノ場合ニ於テハ其ノ耐用年限及殘骸價格ヲ改定スヘシ

災害復舊ノ爲固定財產ニ修理ヲ施シタル場合ニ於テハ前二項ノ規定ヲ準用ス

第二十二條　前二條ニ規定スル耐用年限ハ當該固定財產ノ目的トスル用法ニ從ヒ通常必要ナル維持修理ヲ施スモノトシテ其ノ年限ヲ決定シ其ノ受入又ハ前條ノ價格改定ノ翌年度ヨリ起算スルモノトス

第二十三條　用品及生產品ノ價格ハ每年度末ニ於テ賣買契約濟ノモノニ付テハ其ノ賣渡代價、其ノ他ノモノニ付テハ其ノ市價カ第十九條ノ規定ニ依リテ定マリタル價格以下ニ低落シタル場合ニ限リ市價ニ依リ之ヲ改定スヘシ

第二十四條　財產毀損變質其ノ他ノ原因ニ因リ減損シタル場合ニ於テハ其ノ割合ニ應シ其ノ價格ヲ改定スヘシ

第二十五條　用品勘定ヨリ他勘定ヘノ用品ノ引渡價格ハ第十九條、第二十三條又ハ前條ノ規定ニ依リ定マリタル價格ニ取扱諸費及損減步合ヲ豫定シ之ヲ割掛タルモノトス

第二十六條　用品勘定又ハ作業勘定ニ於テ使用スル固定財產ノ減價償却金ハ第二十條ノ規定ニ依リ當該年度ニ於テ減少スル價格ニ相當スル金額トス但シ固定財產補充ノ爲工事ヲ施シタル場合ニ於テ當該固定財產ノ價格ノ增加額カ工事ノ爲要シタル經費ニ達セサルトキハ其ノ差額ヲ減價償却金ニ加算スヘシ

第二十七條　資本勘定ノ利益及損失ニ屬スルモノ左ノ如シ

利益ニ屬スルモノ

一　歲入收入濟（他勘定ヨリノ益金繰入金ヲ除ク）

二　借入資本減少

二ノ二　貸付金增加（昭和四年九月第三〇四號ヲ以テ追加）

三　固定財產及物品受入

四　他勘定計算

五　未決濟計算

六　雜益

七　他勘定ヨリ利益繰入

損失ニ屬スルモノ

一　歲出支出濟

二　借入資本增加

二ノ二　貸付金減少（昭和四年九月第三〇四號ヲ以テ追加）

三　他勘定計算

四　未決濟計算

五　固定財產ノ減

六　雜損

七　他勘定ヨリ損失繰入

第三章　會計法及會計規則

第二十八條　用品勘定又ハ作業勘定ノ利益及損失ニ屬スルモノ左ノ如シ

利益ニ屬スルモノ

一　歲入收入濟

二　物品受入

三　他勘定計算

四　未決濟計算

五　雜損

第二十九條　第二條第二項ノ規定ニ依リ豫定計算書ニ添附スヘキ書類ノ樣式ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第五章　帳簿

第三十條　製鐵所ハ勘定每ニ日記簿、原簿及補助簿ヲ備ヘ其ノ事業ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スヘシ

第三十一條　製鐵所ハ勘定每ニ歲入簿ヲ備ヘ歲入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額及收入未濟額ヲ登記スヘシ

第三十二條　支出官ハ支出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第三十三條　製鐵所ハ勘定毎ニ歲出簿ヲ備ヘ歲出ノ豫算額、豫算決定後增加額、支出濟額、翌年度繰越額及殘額ヲ登記スヘシ

製鐵所ハ支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第六章　雜則

第三十四條　本令ニ規定セサルモノニ付テハ會計規則ノ定ムル所ニ依ル

附　則

第三十五條　本令ハ大正十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第三十六條　作業會計規則第三十四條中「製鐵所、」及同規則第三十五條中「製鐵所長官、」ヲ削ル

第三十七條　大正十六年度及大正十七年度歲入歲出ノ豫定計算書ニハ當該年度豫定損益計算表及製鐵所特別會計（作業會計法ニ依ルモノ）ノ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表及固定資本價格增減表ヲ添附スヘシ

第三十八條　本令施行前ニ於ケル製鐵所特別會計（作業會計法ニ依ルモノ）ニ屬スル財產ハ之ヲ本會計ニ歸屬セシム

前項ノ規定ニ依リ本會計ニ歸屬スル財產ハ從前ノ規定ニ依ル大正十五年度末ノ價格ヲ以テ其ノ受入價格トス但シ必要アルトキハ第十九條ノ規定ニ準シ之カ受入價格ヲ定ムルコトヲ得

第一項ニ規定スル財產カ第二十條ノ規定ニ依リ每年價格ヲ遞減スヘキモノナルトキハ其ノ耐用年限ハ大正十六年度ヨリ之ヲ起算シ價格ノ改定ハ大正十六年度以降之ヲ爲スヘシ

第三十九條　一般會計歲出豫算ニ於ケル製鐵所擴張費及製鐵所設備補足費支辨ニ屬スル物件ハ之ヲ本會計ニ歸屬セシム

前項ノ規定ニ依リ本會計ニ歸屬スル物件ノ受入價格ニ付テハ第十九條第三項ノ規定ヲ準用ス

○製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部ノ橫濱正金銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル法律

●法律第二十八號　昭和四年三月二十九日

第一條　製鐵所特別會計ハ中華民國漢冶萍煤鐵廠鑛有限公司ニ對スル貸付資金トシテ大藏省預金部ガ昭和二年一月三十一日橫濱正金銀行ニ貸付シタル二百萬圓ニ關スル債權ノ讓渡ヲ受ケ其ノ債權額ニ相當スル金額及其ノ利息ノ債務ヲ大藏省預金部ニ對シ負擔スルコトヲ得

第二條　前條ノ規定ニ依リ製鐵所特別會計ガ讓渡ヲ受ケタル債權ノ元本ノ償還金ハ之ヲ資本勘定ノ歲入トシ其ノ利子ハ之ヲ作業勘定ノ歲入トス

附　則

本法ハ昭和四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○製鐵所特別會計ニ於テ大藏省預金部又ハ日本銀行ノ橫濱正金銀行又ハ株式會社日本興業銀行ニ對スル債權ノ讓渡ヲ受クルコトニ關スル法律

●法律第三號　昭和五年五月十七日

第一條　製鐵所特別會計ハ大藏省預金部又ハ日本銀行ノ有スル左記債權ノ讓渡ヲ受ケ其ノ債權額ニ相當スル金額及其ノ利息ノ債務ヲ大藏省預金部又ハ日本銀行ニ對シ負擔スルコトヲ得

一　大藏省預金部ガ中華民國漢冶萍煤鐵廠鑛有限公司ニ對スル貸付資金トシテ橫濱正金銀行ニ貸付シタル三千四百十萬千二百三十六圓九錢ニ關スル債權

二　大藏省預金部ガ中華民國漢冶萍煤鐵廠鑛有限公司ニ對スル貸付資金トシテ株式會社日本興業銀行ニ貸付シタル二百五萬千五百五十一圓八十一錢ニ關スル債權

三　大藏省預金部ガ中華民國裕繁鐵鑛股份有限公司ニ對スル貸付資金トシテ橫濱正金銀行ニ貸付シタル四百十四萬六千七百四十七圓十八錢ニ關スル債權

四　大藏省預金部ガ石原產業海運合資會社ニ對スル貸付資金トシテ橫濱正金銀行ニ貸付シタル百四十二萬四千五百二十八圓二十一錢ニ關スル債權

五　日本銀行ガ中華民國漢冶萍煤鐵廠鑛有限公司ニ對ス

ル貸付資金トシテ横濱正金銀行ニ貸付シタル二百九十二萬四千七百五十六圓二十五錢ニ關スル債權

第二條　前條ノ規定ニ依リ製鐵所特別會計ガ讓渡ヲ受ケタル債權ノ元本ノ償還金ハ之ヲ資本勘定ノ歳入トシ其ノ利子ハ之ヲ作業勘定ノ歳入トス

附　則

本法ハ昭和五年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十款　遞信省所管

○簡易生命保險特別會計法

●法律第四十三號　大正五年七月十日

改正　大正一〇年第四一號、昭和六年第一二號

第一條　簡易生命保險事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歳入ヲ以テ其ノ歳出ニ充ツ

第二條　本會計ニ於テハ保險料、積立金ヨリ生スル收入、每年度豫算ノ定ムル所ニ依リ一般會計ヨリ繰入ルル金額及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歳入トシ保險金、還付金、事業取扱費、營繕費其ノ他ノ諸費ヲ以テ其ノ歳出トス（昭和六年三月第一二號ヲ以テ改正）

第三條　本會計ニ於ケル歳入總額ノ歳出總額ニ超過スル金額ハ之ヲ積立ツヘシ

本會計ノ歳計ニ不足アルトキハ積立金ヨリ之ヲ補足スヘシ

第三條ノ二　本會計ニ於テ支拂上現金ニ餘裕アルトキハ之ヲ大藏省預金部ニ預入ルルコトヲ得

第四條　政府ハ每年本會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第五條　本會計ノ收入支出及積立金ノ運用ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（大正五年八月十八日勅令第二百五號ヲ以テ同年八月二十日ヨリ施行）

附　則（昭和六年三月二十八日法律第十二號）

本法ハ昭和六年度ヨリ之ヲ施行ス

大正十二年法律第二十二號（簡易生命保險特別會計ニ於ケル土地建物ノ買入又ハ建物ノ建設ニ關スル法律）ハ之ヲ廢止ス

○簡易生命保險特別會計規則

●勅令第二百八號　大正五年八月十八日

改正　大正九年第四六八號、一一年第三九號

第一條　歳入歳出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

前項ノ豫定計算書ニハ其ノ年三月三十一日現在ノ積立金明細目錄ヲ添附スヘシ

第二條　歳入歳出ノ豫算ハ決定ノ後豫備費ヲ除キ所管大臣簡易保險局長ニ命シテ之ヲ執行セシムヘシ但シ他ノ官吏ニ命シテ其ノ一部ヲ執行セシムルコトヲ得

第三條　所管大臣ハ會計規則第十八條ノ規定ニ依ル勅令ニ基キ第一豫備金ノ支出ヲ爲シタルトキハ其ノ金額理由ヲ記載シタル計算書ヲ作リ大藏大臣ニ通知スヘシ

大藏大臣前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

第四條　本會計ニ於テハ當該年度ノ收入濟歳入額ヲ以テ支拂元受高トシ歳出ヲ支出スルハ此ノ支拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス

第五條　本會計ニ於テ支拂上現金ニ不足ヲ生シタルトキハ所管大臣ハ大藏大臣ノ承認ヲ經テ積立金ニ屬スル現金ヲ前條ノ支拂元受高ニ繰替使用スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ繰替使用シタル金額ハ當該年度內ニ之ヲ返還スヘシ

第六條　（削除）

第七條　（削除）

第八條　每年度出納ノ完結迄ニ收入濟又ハ支出濟ト爲ラサルモノハ現ニ其ノ收支ヲ爲シタル年度ノ歳入又ハ歳出トス

第八條ノ二　歳入徵收官ハ每月徵收報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ之ヲ簡易保險局長ニ送付スヘシ

第八條ノ三　簡易保險局長ハ徵收報告書ニ依リ每月徵收總報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第八條ノ四　支出官ハ每月支出濟額報告書ヲ調製シ之ヲ簡易保險局長ニ送付スヘシ

第八條ノ五　簡易保險局長ハ支出濟額報告書ニ依リ毎月支出總報告書ヲ調製シ支出濟額報告書ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第八條ノ六　歲入徵收官又ハ支出官一人ナル場合ニ於テハ徵收報告書又ハ支出濟額報告書ヲ以テ徵收總報告書又ハ支出總報告書ニ充ツルコトヲ得

第九條　每年度ニ於ケル歲入ノ收入濟額ヨリ歲出ノ支出濟額ヲ控除シタル過剩額ハ之ヲ積立金ニ組入ルヘシ前項歲入ノ收入濟額カ歲出ノ支出濟額ニ對シ不足アルトキハ之ヲ積立金ヨリ補足スヘシ

第十條　歲入歲出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第十一條　（削除）

第十二條　簡易保險局ハ日記簿、原簿及補助簿ヲ備ヘ簡易生命保險ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スヘシ

第十二條ノ二　簡易保險局ハ歲入簿ヲ備ヘ歲入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額及收入未濟額ヲ登記スヘシ

第十三條　支出官ハ支出簿ノ外支拂元受高差引簿ヲ備ヘ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ

第十三條ノ二　簡易保險局ハ歲出簿及支拂元受高差引簿ヲ備ヘ歲出簿ニハ歲出ノ豫算額、豫算決定後增加額、支出濟額、翌年度繰越額及殘額ヲ登記シ支拂元受高差引簿ニハ支拂元受高、支出濟額及殘額ヲ登記スヘシ但シ支出官一人ナル場合ニ於テハ支拂元受高差引簿ヲ省略スルコトヲ得

第十四條　本令ニ規定セサルモノニ付テハ會計規則ヲ準用ス

附　則

本令ハ簡易生命保險特別會計法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○郵便年金特別會計法

●法律第四十號　大正十五年三月三十日

第一條　郵便年金事業ヲ經營スル爲特別會計ヲ設置シ其ノ歲入ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　本會計ニ於テハ掛金、積立金ヨリ生スル收入及附屬雜收入ヲ以テ其ノ歲入トシ年金、返還金、事業取扱費其ノ他ノ諸費ヲ以テ其ノ歲出トス

ニ支拂元金ノ繰替ヲ請求スヘシ

大藏大臣ハ前項ノ請求ナキトキハ支拂元金ニ超過シタル小切手ノ支拂ヲ停止セシムルコトアルヘシ

第五條　臺灣總督ハ一般會計規則第十八條ノ勅令ニ基キ第一豫備金ノ支出ヲ爲シタルトキハ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ所管大臣ヲ經由シテ大藏大臣ニ通知スヘシ

第六條　大藏大臣第一豫備金支出ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ會計檢査院ニ通知スヘシ

第六條ノ二　歲入徵收官ハ每月徵收報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ之ヲ臺灣總督ニ送付スヘシ

第六條ノ三　臺灣總督ハ徵收報告書ニ依リ每月徵收總報告書ヲ調製シ參照書類ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第六條ノ四　支出官ハ每月支出濟額報告書ヲ調製シ之ヲ臺灣總督ニ送付スヘシ

第六條ノ五　臺灣總督ハ支出濟額報告書ニ依リ每月支出總報告書ヲ調製シ支出濟額報告書ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ其ノ翌月中ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第七條　臺灣總督ハ土地ノ情況ニ依リ一般會計規則第九十九條ノ保證金ヲ免除スルコトヲ得

第八條　歲入歲出ノ決定計算書ハ豫定計算書ト同一ノ區分ニ據リ所管大臣之ヲ調製シ翌年度七月三十一日マテニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第九條　臺灣總督府ハ歲入簿ヲ備ヘ歲入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、不納缺損額及收入未濟額ヲ登記スヘシ

第十條　臺灣總督府ハ歲出簿ヲ備ヘ歲出ノ豫算額、豫算決定後增加額、支出濟額、翌年度繰越額及殘額ヲ登記スヘシ

第十一條　本令ニ規定セサルモノハ會計規則ノ定ムル所ニ依ル但シ會計規則第四十二條、第八十五條、第八十八條、第九十二條、第九十七條、第九十八條、第百四條、第百二十五條、第百二十六條、第百二十九條、第百三十四條、第百三十五條第二項、第百三十六條乃至第百三十八條、第百四十四條及第百四十六條中各省大臣又ハ所管大臣トアルハ臺灣總督トス

附　則　（大正十一年三月二十七日勅令第四十五號）

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

會計規則第五十條、第五十三條又ハ第七十八條ニ規定スル期限ニ付テハ大正十年度分ニ限リ四月三十日ヲ五月十五日、五月三十一日ヲ六月十五日トシ同令第百七十條ニ規定スル期限ハ之ヲ六月十五日トス

大正十年度所屬歲入歲出金ヲ日本銀行ニ於テ出納スルハ大正十一年六月十五日限トス

大正十年度所屬ノ歲入歲出金ノ六月分徵收總報告書及支出總報告書ハ參照書類又ハ支出濟額報告書ト共ニ所管大臣ヲ經由シテ大正十一年六月三十日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

○臺灣官設鐵道用品資金會計法

●法律第十三號　明治三十五年三月八日
改正　明治四〇年第四號、昭和二年第五號

第一條　鐵道用品ヲ購入貯藏シ臺灣官設鐵道ノ運輸營業竝建設事業ノ需用ニ應スル爲臺灣官設鐵道用品資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條　臺灣官設鐵道用品資金ハ本法施行ノ年度始現在ノ臺灣總督府鐵道部ニ於ケル貯蓄材料ヲ以テ之ニ充テ尙必要ニ應シ臺灣總督府特別會計ヨリ漸次繰入シテ百萬圓トス（昭和二年三月第五號ヲ以テ改正）

第三條　臺灣官設鐵道用品資金會計ニ屬スル用品ヲ使用スルトキハ臺灣官設鐵道所屬ノ經費ヲ以テ之ヲ購入スヘシ此ノ場合ニ於テハ前金拂竝概算渡ヲ爲スコトヲ得

第四條　臺灣官設鐵道用品資金ヲ以テ購入貯藏シタル鐵道用品ノ製作、改製及修理ノ費用ハ該資金ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第五條　臺灣官設鐵道用品資金會計ニ屬スル鐵道用品ノ賣拂價格ハ其ノ自然ノ損減歩合、製作、改製及修理費竝其ノ附屬費用及購入ニ附隨スル諸費ヲ共ノ購入原價ニ加算シテ之ヲ定ムヘシ

第六條　臺灣官設鐵道用品資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ同年度臺灣總督府特別會計ノ歲入ニ編入スヘシ

第七條　政府ハ每年臺灣官設鐵道用品資金特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト倶ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第八條　臺灣官設鐵道用品資金特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條　臺灣官設鐵道用品資金會計ノ經營ニ妨ナキ限ハ一般ノ需用ニ應シ機械其ノ他ノ製作修理ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ臺灣官設鐵道用品資金會計ニ屬スル用品ヲ以テ其ノ材料ニ充ツルコトヲ得

附　則

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（明治三十五年三月二十九日勅令第百二十七號ヲ以テ同三十五年度ヨリ施行）

○臺灣官設鐵道用品資金會計規則

●勅令第百四十號　明治三十五年四月十七日
改正　大正一一年第四六號、昭和六年第四號

第一條　臺灣官設鐵道用品資金會計ハ貯藏物品賣拂代金竝附屬雜收入ヲ以テ歲入トシ物品購入代製作費改製費修理費竝附屬諸費ヲ以テ歲出トス

第二條　臺灣官設鐵道用品資金ハ實際ノ歲入額及資金ニ屬スル現金ノ持越高ヲ以テ支拂充受高トシ歲出ヲ支出スルハ此ノ支拂充受高ヲ超過スルコトヲ得ス

第三條　貯藏物品ノ購入原價ニシテ自然ノ腐朽又ハ毀損變質減量等ニ因リ其ノ價格減少シタルトキハ每年度ノ終ニ於テ之ヲ改定スヘシ

第四條　貯藏物品ノ損減歩合ハ自然ノ腐朽又ハ不用ニ歸シタルニ因リ生シタル既住ノ損減高及亡失毀損變質減量等ヲ參酌シテ之ヲ定ムルモノトス

第五條　每年度內ニ於テ收入ヲ爲スヘキ權利ヲ得テ當該年度內ニ收入濟トナラサルモノハ收入未濟トシテ順次翌年度ヘ繰越シ現ニ收入ヲ爲シタル年度ノ歲入ニ組入ルヘシ

第六條　每年度ニ屬スル歲出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出スハ當該年度三月三十一日限トス但シ會計法第十九條ノ規定ニ依リ歲出金ニ繰替使用シタル現金補塡ノ爲ニスル支出ニ付テハ翌年度四月三十日迄小切手ヲ振出スコトヲ得（昭和六年一月第四號ヲ以テ改正）

第七條　每年度內ニ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ當該年度內ニ小切手ヲ振出ササルモノハ支出未濟トシテ遞次翌年度ニ繰越シ時效完成ニ至ル迄ハ支拂ノ請求アル每ニ小切手ヲ振出スヘシ但シ支出未濟ノ繰越額ハ支出濟額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルコトヲ得ス

第八條　受拂勘定ノ受入ニ屬スルモノ左ノ如シ

第一　歲入ノ收入濟額

第二　收入未濟額

第三　資金ニ屬スル現金ノ持越高

第四　總貯藏物品ノ價格

第五　代價支出濟未收物品ノ價格

第九條　受拂勘定ノ拂出シニ屬スルモノ左ノ如シ

第一　歲出ノ支出濟額

第二　支出未濟額

第三　資金額

第四　前受金

第五　代價收入濟物品ノ價格

第六　代價收入未濟既出物品ノ價格

第七　損失ニ歸シタル物品ノ價格

第八　損失金

第十條　帳簿ニ關スル規則ハ作業會計規則第六章ノ例ニ依ル

第十一條　本令ニ規定セサルモノハ總テ臺灣總督府特別會計規則ノ例ニ依ル

附　則

本令ハ明治三十五年度ヨリ之ヲ施行ス

○關東廳特別會計法

●法律第十七號　明治四十年三月二十日

第一條　關東【都督府】ノ會計ハ特別トシ其ノ歲入及一般會計ノ補充金ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　關東〔都督府〕特別會計ノ收入支出ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條　政府ハ每年關東〔都督府〕特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

附　則

本法ハ明治四十年度ヨリ之ヲ施行ス

○樺太廳特別會計法

●法律第十八號　明治四十年三月二十日

第一條　樺太廳ノ會計ハ特別トシ其ノ歲入及一般會計ノ補充金ヲ以テ其ノ歲出ニ充ツ

第二條　樺太廳特別會計ノ收入支出ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條　政府ハ每年樺太廳特別會計ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

附　則

本法ハ明治四十年度ヨリ之ヲ施行ス

○關東廳及樺太廳特別會計規則

●勅令第八十七號　明治四十年三月三十日

改正　大正一一年第四七號

第一條　歲入歲出豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度九月三十日迄ニ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二條　所管大臣ハ關東廳ニ在リテハ關東長官、樺太ニ在リテハ樺太廳長官ヲ以テ支出官トシ各其ノ特別會計ニ屬スル歲出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出サシム

關東長官及樺太廳長官ハ部下ノ官吏ニ分任シテ各其ノ特別會計ニ屬スル歲出ヲ支出スル爲小切手ヲ振出サシムルコトヲ得

第三條　關東長官及樺太廳長官ハ每年度決定ノ豫算定額ニ基キ支出官每ニ所要ノ費額ヲ定メ支拂豫算ヲ調製シ大藏大臣及會計檢查院ニ送付シ同時ニ其ノ旨日本銀行ニ通知スヘシ支拂豫算ヲ更定シタルトキ亦同シ

第四條　關東長官及樺太廳長官ハ年度內一時收入金額ニ不足ヲ生スルトキハ其ノ不足金額ヲ豫定シ所管大臣ヲ經由シテ大藏大臣ニ支拂元金ノ繰換ヲ請求スヘシ

大藏大臣ハ前項ノ請求ナキトキハ支拂元金ニ超過シタル小切手ノ支拂ヲ停止セシムルコトアルヘシ

第五條　關東長官及樺太廳長官ハ會計規則第十八條ニ基キ發シタル勅令ニ依リ第一豫備金ノ支出ヲ爲シタルトキハ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作リ所管大臣ヲ經由シテ大藏大臣ニ通知スヘシ

第四章　物品會計

○物品會計規則

●勅令第八十四號　明治二十二年六月十二日

改正　明治二四年第七七號、三三年第三八號、大正一一年第四八號、昭和六年第一三三號

第一條　此ノ規則ニ於テ物品ト稱スルハ政府ニ屬スル器具器械備品消耗品動物其ノ他一切ノ動產ヲ云フ但シ陸海軍ノ兵備ニ關ルモノハ各其ノ規則ニ依ル

政府ノ保管ニ屬スル物品ニシテ各省大臣ニ於テ特ニ指定スルモノハ本規則ヲ準用ス此ノ場合ニ於テハ各省大臣ヨリ會計檢查院ヘ通知スヘシ

第二條　物品ノ會計ハ總テ年度ヲ以テ區分シ每年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル十二箇月ヲ以テ一年度トス

第三條　物品ノ會計ハ現ニ其ノ出納ヲ執行シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ區分スヘシ

第四條　物品ヲ保管シ之カ出納ヲ掌ル者ヲ物品會計官吏トス

第五條　總テ物品ハ責任アル官吏ノ保管ニ付スヘシ

第五條ノ二　所管大臣ハ會計法第三十七條ノ規定ニ依リ專賣官署ノ事務員ヲシテ物品ノ出納保管ニ關スル事務ヲ分掌セシムルコトヲ得（昭和六年六月第一三號ヲ以テ追加）

前項ノ外特別ノ必要アル場合ニ於テハ各省大臣大藏大臣ト協議シ其ノ廳ノ事務員ヲシテ物品ノ出納保管ニ關スル事務ヲ分掌セシムルコトヲ得（昭和六年六月第一三號ヲ以テ追加）

第六條　物品會計官吏又ハ物品出納員ハ各省大臣ノ定メタル規程ニ據リタル命令アルニアラサレハ物品ヲ出納スルコトヲ得ス（昭和六年六月第一三號ヲ以テ改正）

第七條　物品會計官吏又ハ物品出納員ハ其ノ故意怠惰ニ由リ保管ノ物品ヲ亡失毀損シタルトキハ辨償ノ責ニ任スヘシ（昭和六年六月第一三號ヲ以テ改正）

第八條　各省大臣ノ定メタル規程ニ據リ各官吏以下ノ使用ニ供シタル物品ノ亡失毀損ニ就テハ物品會計官吏ハ合規ノ監督ヲ怠リタル場合ノ外ハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ

第九條　物品會計官吏ハ各省大臣ノ命シタル代理官ノ所爲ニ就テハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

物品會計官吏ノ代理官ハ其ノ代理セル所爲ニ就テハ物品會計官吏タルノ責任ヲ免ルコトヲ得ス

第十條　物品會計官吏又ハ物品出納員ハ物品ノ出納帳簿ヲ備ヘ其ノ出納ノ事實ヲ登記スヘシ（昭和六年六月第一三號ヲ以テ改正）

物品ノ消耗賣拂亡失毀損生產ノ爲メノ消費及其他物品會計官吏又ハ物品出納員ノ保管ヲ離ルヽヲ出トシ買入生產及其ノ他其ノ保管ニ屬スルヲ納トス（昭和六年六月第一三號ヲ以テ改正）

第十條ノ二　各省大臣ハ檢査ノ官吏ヲ命シ四年以内ヲ以テ一期トシ物品會計官吏又ハ物品出納員ノ保管スル物品ノ全部ヲ精細ニ檢査セシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ但シ廳費ニ屬スル物品ハ各省大臣適宜ニ檢査ノ方法ヲ設クヘシ（昭和六年六月第一三三號ヲ以テ改正）

第十一條　當時出納ヲナサヽル倉庫若ハ貯藏所ノ物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際檢査ノ官吏ヲ命シ目錄ト現在品ノ照合ヲナサシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ

第十二條　在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ニアル物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際檢査ノ官吏ヲ命シテ現在品及出納ノ實況ヲ調査セシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ

第十二條ノ二　各省大臣必要アリト認ムルトキハ臨時ニ檢査ノ官吏ヲ命シテ物品會計官吏又ハ物品出納員ノ帳簿物品ヲ檢査セシメ其ノ調書ヲ作ラシムヘシ（昭和六年六月第一三三號ヲ以テ追加）

第十三條　第十條ノ二、第十一條第十二條及前條ノ調書ニハ檢査官吏及檢査ヲ受タル物品會計官吏又ハ物品出納員若ハ特ニ命セラレタル立會人之ニ署名スヘシ（昭和六年六月第一三三號ヲ以テ改正）

第十四條　（削除）

第十五條　物品會計官吏ハ會計檢査院ノ檢査判決ヲ受クル爲メ物品出納計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ所管大臣ヲ經由シテ之ヲ會計檢査院ニ差出スヘシ

物品會計官吏交替ヲナシタルトキ前任官吏ハ前項ニ準シテ計算書ヲ差出スヘシ但シ前任官吏死亡其ノ他ノ事故ニ由リ自身計算書ヲ調製スル能ハサル場合ニ於テハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

第十六條　前條第二項但書ニ據リ調製シタル計算書ハ責任ヲ有スル物品會計官吏ノ自身ニ調製シタルモノト同一ニ見做シ會計檢査院ニ於テ檢査判決ヲナスヘシ

第十七條　（削除）

第十八條　常時出納ヲナサヽル倉庫若ハ貯藏所ノ物品又ハ在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ノ物品ヲ保管スル物品會計官吏ハ第十一條又ハ第十二條ノ調書ヲ以テ第十五條ノ計算書ニ代ヘ責任ノ解除ヲ會計檢査院ニ求ムルコトヲ得

第十八條ノ二　會計檢査院法第十六條ニ依リ委託檢査ニ付シタル物品ニ對シテハ帳簿ヲ以テ出納ヲ證明セシメ第十五條ノ計算書ヲ省略スルコトヲ得

第十九條　會計規則第七十五條、第百二十五條、第百二十六條、第百三十二條乃至第百三十五條及第百四十四條ハ物品會計官吏又ハ物品出納員ニ準用ス（昭和六年六月第一三三號ヲ以テ改正）

第二十條　物品ノ保管出納ニ關スル規定及帳簿ノ樣式ハ各省大臣之ヲ定メ發布前會計檢査院ヘ通知スヘシ

第二十一條　官吏ノ執務上必要ナル物品ノ交付及其ノ交付ヲ受タル官吏ノ責任ニ就テハ各省大臣之ヲ規定スヘシ

第二十二條　此ノ規則ハ明治二十二年十月一日ヨリ施行ス

○物品會計規則第一條第二項ニ依ル各省大臣ノ指定物品

▲差押物品保管方ノ件（昭和四年六月一日發保第六二號内務大臣通知）

保險料其ノ他健康保險法ノ規定ニ依ル徵收金滯納處分ノ爲差押タル物品ニシテ其ノ廳ニ於テ保管スルモノハ物品會計規則ヲ準用スルコトニ指定シ昭和四年六月一日ヨリ之ヲ施行

▲差押物品保管方ノ件（明治三十四年九月三十日大臣達第一四〇五號甲）　稅關、稅務監理局、專賣局

犯則處分又ハ國稅滯納處分ノ爲メ差押物品ニシテ其廳ニ於テ保管スルモノハ物品會計規則ヲ準用スルコトヲ指定ス但明治三十四年十月二十日ヨリ施行ス

▲政府保管物品指定ノ件（明治三十四年三月四日陸達第一〇號改正大正六年陸達第一五號）

政府ノ保管ニ屬スル左記ノ物品ハ明治三十四年度ヨリ陸軍物品會計規程第十六條ニ據リ取扱フヘシ

一　衞戍病院ニ於テ保管スル入院患者ノ物品
二　軍法會議ニ於テ證據物件トシテ押收セル物品
三　陸軍監獄ニ於テ領置セル在監人ノ物品
▲俘虜死亡者若ハ敵國戰死者ノ遺留品等取扱ノ件（明治三十七年七月二十九日滿發第三二〇號、改正明治三十八年第四七〇七號）

政府ノ保管ニ屬スル左記ノ物品ハ陸軍物品會計規程第十六條ニ據リ取扱フヘシ

一　俘虜情報局又ハ俘虜收容所ニ於テ領置セル俘虜死亡者ノ遺留品
二　俘虜情報局ニ於テ領置セル敵國戰死者ノ遺留品
三　俘虜收容所ニ於テ俘虜ヨリ領置セル物品
四　俘虜ニ對スル寄贈及俘虜ノ發送ニ係ル物品

▲遞信省物品出納規程（抄錄）（明治四十三年七月公達第六一三號）

第三條　左ニ記載シタル物品ハ物品會計規則第一條第二項ニ依リ之ヲ指定ス

一　郵便ニ關スル法令ニ依リ保管スル物品
二　電氣事業ノ監督ニ關スル法令ニ依リ試驗檢定ノ爲提供ヲ受ケタル物品
三　船燈信號器及救命具取締ニ關スル法令ニ依リ試驗檢定ノ爲提供ヲ受ケタル物品
四　入札保證金又ハ契約保證金代用トシテ提供ヲ受ケタル國債證券
五　特設電話ニ關スル料金トシテ假納中ニ係ル郵便切手
六　遞信博物館陳列品トシテ寄託ヲ受ケタル物品

▲關東廳物品出納規程（抄錄）（大正三年三月十六日關東都督府訓令第一號）

第四條　物品會計規則第一條第二項ニ依リ左ノ物品ヲ指定ス

一　拾得品
二　囚人、刑事被告人、行旅病者其ノ他ノ所持品
三　前各號ノ外法令ノ規定ニ依リ保管スル物品

○陸軍兵備品會計規則

●勅令第二十二號　明治二十四年三月十一日
改正　明治三四年第九號

第一條　陸軍兵備品ハ分テ出師準備品通常兵備品ノ二類トス

第二條　出師準備品トハ左ニ揭クル諸品ヲ云フ

一　兵器彈藥及各兵器具竝材料
二　祕密圖書
三　馬匹及戰時之ニ要スル器具
四　戰用糧秣及炊爨具
五　戰用被服及裁縫具
六　戰用衞生材料
七　戰用獸醫材料
八　戰用天幕

○雜種財産取扱規程

大正一一年　第二四號

●大藏省訓令第十二號　大正十五年六月三十日
改正　昭和四年第九號（書式）

第一條　雜種財産ノ管理及處分ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本規程ニ依リ稅務監督局長之ヲ取扱フヘシ

稅務署長ハ前項ノ事務ニ付稅務監督局長ヲ補助スヘシ

第二條　稅務監督局長ハ本規程ノ定ムル所ニ依リ其ノ權限ニ屬セシメラレタル事務ノ一部ヲ大藏大臣ノ認可ヲ經テ稅務署長ニ委任スルコトヲ得

第三條　稅務監督局長ハ常ニ所轄內ニ於ケル雜種財産ノ狀況ニ注意シ尙臺帳登錄漏又ハ引繼漏ノモノナキヤヲ調査スヘシ

第四條　各省部局長ヨリ雜種財産ノ引繼ヲ受クル場合ニ於テハ成ルヘク實地調査ノ上之ヲ爲スヘシ

第五條　雜種財産ノ賣拂ヲ爲サムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ大藏大臣ニ稟請スヘシ

一　臺帳記載事項
二　賣拂價格ニ關スル調書
三　代金納付ノ方法及時期
四　指名競爭契約ニ付シ又ハ隨意契約ニ依ラムトスルモノニ付テハ其ノ事由
五　隨意契約ニ依リ特定ノ者ニ賣拂ヲ爲スノ必要アル場合ニ於テハ其ノ相手方
六　賣拂ニ附帶シテ條件ヲ定ムヘキ場合ニ於テハ其ノ條件
七　其ノ他參考トナルヘキ事項

前項第二號ノ調書ハ賣買實例、精通者ノ意見其ノ他ノ資料ニ依リ成ルヘク詳細ニ記載スヘシ

第六條　左記各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ稅務監督局長限リ雜種財産ノ賣拂ヲ爲スコトヲ得但シ異例ニ亙ルモノ、重要ナルモノ及特ニ指定スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一　一般競爭契約ニ依リ豫定價格千圓ヲ超エサル雜種財産ノ賣拂ヲ爲サムトスルトキ
二　指名競爭契約又ハ隨意契約ニ依リ豫定價格二百圓ヲ超エサル雜種財産ノ賣拂ヲ爲サムトスルトキ
三　土地ノ開拓又ハ水面ノ埋立若ハ干拓ノ事業成功ヲ條件トシテ賣拂ヲ豫約シタル場合ニ於テ豫約ニ從ヒ其ノ財産ノ賣拂ヲ爲サムトスルトキ

第七條　隨意契約ニ依リ雜種財産ノ賣拂ヲ爲サムトスル場合ニ於テハ緣故アル者ニ之ヲ賣拂フトキ又ハ特殊ノ事情アルトキヲ除クノ外成ルヘク廣ク見積書ヲ徵シ賣拂フヘシ

第八條　雜種財産ノ讓與ヲ爲サムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ大藏大臣ニ稟請スヘシ

一　臺帳記載事項
二　讓與スヘキ財産ノ見積價格

三　讓與ノ相手方及讓與ヲ必要トスル事由
四　讓與ニ附帶シテ條件ヲ定ムヘキ場合ニ於テハ其ノ條件
五　其ノ他參考トナルヘキ事項

第九條　左記各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ稅務監督局長限リ雜種財産ノ讓與ヲ爲スコトヲ得但シ異例ニ亙ルモノ、重要ナルモノ及特ニ指定スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

一　國有財産法第五條第三號ニ該當スル場合ニシテ見積價格千圓ヲ超エサル雜種財産ノ讓與ヲ爲サムトスルトキ
二　土地ノ開拓又ハ水面ノ埋立若ハ干拓ノ事業成功ヲ條件トシテ讓與ヲ豫約シタル場合ニ於テ豫約ニ從ヒ其ノ財産ノ讓與ヲ爲サムトスルトキ

第十條　雜種財産ノ交換ヲ爲サムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ大藏大臣ニ稟請スヘシ

一　臺帳記載事項
二　交換ニ依リテ取得スヘキ物件ノ種目、所在及數量
三　交換ノ相手方及交換ヲ必要トスル事由
四　目的物ノ價格評定調書
五　交換ニ附帶シテ條件ヲ定ムヘキ場合ニ於テハ其ノ條件
六　其ノ他參考トナルヘキ事項

第五條第二項ノ規定ハ前項第四號ノ調書ニ付之ヲ準用ス

第十一條　寄附其ノ他ノ名義ニ依リ雜種財産ヲ取得セムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ大藏大臣ニ稟請スヘシ

一　財産ノ所在、種目、數量及見込價格
二　相手方及取得ノ事由
三　條件アルモノハ其ノ條件
四　其ノ他參考トナルヘキ事項

第十二條　雜種財産ヲ貸付セムトスルトキハ左ノ事項ヲ具シ大藏大臣ニ稟請スヘシ

貸付期間ヲ更新セムトスルトキ及貸付料其ノ他ノ契約條項ヲ變更セムトスルトキ亦同シ

一　臺帳記載事項
二　貸付スヘキ財産ノ見積價格
三　貸付ノ目的
四　貸付期間其ノ他ノ條項
五　貸付料ニ關スル調書
六　繼續貸付ノ場合ニ於テハ前賃貸料
七　其ノ他參項トナルヘキ事項

前項ノ場合ニ於テ無償貸付ヲ爲スノ必要アルトキ及指名競爭契約ニ付シ又ハ隨意契約ニ依ラムトスルトキハ其ノ事由ヲ具申スヘシ

第十三條　左記各號ノ範圍內ニ於テハ稅務監督局長限リ雜種財産ノ貸付ヲ爲シ又ハ契約條項ノ變更ヲ爲スコトヲ得但シ異例ニ亙ルモノ、重要ナルモノ及特ニ指定スルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス

○官舍貸渡內規

●明治二十一年十二月二十七日內閣ヨリ各省大臣へ達

改正　明治二二年五月　中略　昭和四年九月

第一條　別表ニ揭クル所ノ官吏ハ官舍ニ居住スヘキモノトス

但公務上差支ナキ者ハ所屬長官ノ意見ニ由リ又ハ其認許ヲ經テ官舍ニ居住セサルモ妨ナシ

第二條　官舍相當ノ建具疊敷物窓掛煖爐通信器點火器及對客室必要ノ椅卓ニ限リ官費ヲ以テ之ヲ設クルモノトス

但大臣ノ官舍ニ限リ以上物品ノ外接客用飮食器接客室ニ備フル所ノ花瓶書棚物置臺鏡時計ハ官費ヲ以テ之ヲ設ケ且ツ公用室客室及館外ノ點火竝ニ公用室及客室ノ石炭ハ官費供用スルコトヲ得

第三條　官舍及官舍附屬ノ建物物品等ノ保存上必要ナル手入ハ一切居住人ノ自費トス

天災若クハ自然ノ腐朽ニ由リ修繕ヲ加フルコトヲ必要トスル時ハ官費ヲ以テ支辨ス

第四條　官舍居住人ノ不注意ニ因リ官舍及其附屬ノ物品ヲ毀損シタルトキハ自費ヲ以テ支辨セシム

第五條　各廳ノ便宜ニ由リ其長官ニ於テ別表外ノ官吏ヲ官舍ニ居住セシムル時ハ總テ官舍貸渡規則ニ據ルヘキモノトス

別表

總理大臣
各省大臣
大臣祕書官
內閣書記官長
內閣書記官ノ內一名若クハ二名
法制局長官
印刷局長若クハ印刷局事務官ノ中一名官報編輯ニ從事スル印刷局屬四名
樞密院議長
樞密院書記官長
樞密院書記官ノ內一名
樞密院議長祕書官
外務次官
外務大臣官房電信課、文書課、人事課又ハ會計課ノ職員ノ內職務ニ由リ外務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
外務大臣官房祕書課、文書課又ハ會計課ノ職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
內務省地方局長
內務省警保局長
內務省警保局職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官

舍居住ヲ命スル者
內務省土木出張所職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
內務省衞生局長
社會局長官
明治神宮造營局職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
國立感化院職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
國立癩療養所職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
衞生試驗所職員ノ內職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
集治監、廳、府、縣、司獄官吏ノ內職務ニ由リ特ニ官舍居住ヲ命スル者
大藏省金庫局長若クハ局次長大藏大臣官房臨時建築課出張所職員ノ內職務ニ由リ大藏大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
造幣局職員ノ內職務ニ由リ大藏大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
陸軍次官
海軍次官
陸海軍武官ノ內職務ニ由リ特ニ官舍居住ヲ命スル者
陸軍監獄職員ノ內職務ニ由リ陸軍大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
司法大臣官房職員課長
司法省各始審裁判所豫審判事及上席檢事
司法大臣ニ於テ指定スル島嶼ニ在勤スル判事檢事及裁判所書記
少年審判所及矯正院ノ職員ノ內職務ニ由リ司法大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
文部省直轄各學校圖書館氣象臺緯度觀測所及測地學委員會職員ノ內職務ニ由リ文部大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
農商務省山林局試驗場詰官吏、農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル食糧局出張所職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル茶業試驗場職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル園藝試驗場職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル種羊場職員
農林大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル在青島帝國總領事館附獸疫調查所職員
商工大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル工業試驗所職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル陶磁器試驗所職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル花莚檢查所職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル小林區署職員
農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル公有林野官行造林署職員

種馬牧場種馬育成所及種馬所員ニシテ特ニ官舍居住ヲ命スル者
種牛牧場員ニシテ特ニ官舍居住ヲ命スル者
農商務省鳥獸實驗場員ニシテ特ニ官舍居住ヲ命スル者
燃料研究所職員ニシテ特ニ官舍居住ヲ命スル者
工藝指導所職員ニシテ商工大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
鑛害調查ニ從事スル職員ノ內農商務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
製鐵所職員中特ニ官舍居住ヲ命スル者
鹽業調查所試驗場職員中特ニ官舍居住ヲ命スル者
水產講習所職員ニシテ特ニ官舍居住ヲ命スル者一名
遞信次官
遞信大臣官房祕書課及文書課職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
遞信省通信局及經理局職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
貯金支局職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ舍官居住ヲ命スル者
航路標識管理所職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
臨時電信電話建設局出張所職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
遞信局職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
一二等郵便局電信局及電話局職員ノ內職務ニ由リ遞信大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル者
商船學校學生監ノ內二名
帝國鐵道廳總裁、副總裁、工務部長、運輸部長、計理部長、管理部長、營業事務所長及遞信大臣ニ於テ指定スル奏任以下ノ帝國鐵道廳職員
警視總監及副總監
警視廳一等警視以下職務ニ由リ特ニ官舍居住ヲ命スル者
北海道廳長官府縣知事警部長
北海道尋常師範學校長舍監
北海道廳鐵道部員ノ內職務ニ由リ特ニ官舍居住ヲ命スル者
港務部長竝內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スル港務部職員及海港檢疫所職員
北海道廳府縣職員ノ內賑恤救濟、土木、會計、兵事、產業、拓殖、警察又ハ衞生ニ關シ急施ヲ要スルコトアルヘキ事務又ハ技術ニ從事スル者ニシテ職務ニ由リ內務大臣ニ於テ特ニ官舍居住ヲ命スルモノ
沖繩縣官吏ノ內特ニ官舍居住ヲ命スル者
其他各廳ノ技術官ニシテ必要アルトキ各廳長官ニ於テ大藏大臣ト協議ノ上官舍居住ヲ命スル者帝室費及地方稅經濟ノ支辨ニ屬スル官舍ハ本表ノ外トス

（參考）

江田島兵學校勤務ノ敎官ニ限リ文官ト雖トモ官舍貸渡
內規第一條ニ準シ官舍居住ヲ認許ス
貴族院議長
衆議院議長
貴族院書記官長
衆議院書記官長
（右別表中ニハ法令ノ改廢ニ基キ變改シタルモノアルモ注意符（【　】）ヲ省略ス）

○昭和四年法律第十四號（絲價安定融資補償法）ニ依ル手形割引計算書様式

●略總第五號　昭和五年四月二十四日（昭和五年四月二十五日普第一〇號農林大臣宛照會）

昭和四年法律第十四號ニ依ル手形割引計算書

何　年　何　月　分

摘要	貸出高				回收高				殘高	
	本月分		本月迄累計		本月分		本月迄累計			
	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額	口數	金額
生絲製造者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生絲加工者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
生絲問屋	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
其他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

備考

一、本計算書ハ毎月一回之ヲ提出スヘシ
二、本計算書ノ金額ハ手形額面ニ依リ記載スヘシ
三、回收高ノ內ニ併算セラレタル損失額ハ本月分、本月迄累計ニ區分シ備考ニ附記スヘシ
四、本計算書ニ添附スヘキ書類及證憑書ニ付テハ計算證明規程第八十一條及第八十二條ニ依ルヘシ

何々（銀行）何々氏名印
年　月　日提出

○北海道國有林野及未開地竝其ノ産物賣拂代金延納ノ件

●內務省令第二十四號　大正十年九月十三日

北海道國有林野及未開地竝其ノ產物ノ賣拂代金ハ一口千圓以上ナル場合ニ限リ二年以內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得

公共團體ニ限リ擔保ノ提供ヲ免除スルコトヲ得

附　則

本令ハ大正十年勅令第三百七十四號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○帝國大學資金所屬森林ノ産物又ハ製品賣拂代金延納ニ關スル件

●文部省令第四十三號　大正十年十月二十五日

帝國大學資金所屬森林ノ產物又ハ製品ノ賣拂代金ハ一口五百圓以上ノ場合ニ限リ擔保トシテ國債ヲ提供セシメ一年以內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得

公共團體又ハ社寺ニ對シテハ前項ノ賣拂代金ハ一口三百圓以上トシ其ノ期間ハ林野ニ在リテハ三年以內、產物又ハ製品ニ在リテハ二年以內、樹木散生地又ハ無立木地ニ對シ【農

○傳染病研究所ニ於テ製造販賣スル痘苗血精類ノ賣拂代金延納ノ件

●文部省令第三十一號　大正十一年十月二十六日

傳染病研究所ニ於テ製造販賣スル痘苗血精類ノ賣拂代金ハ擔保トシテ參百圓以上ノ國債ヲ提供セシメ擔保額ニ達スルマテヲ限度トシテ三月以內延納ヲ許可スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○國有林野產物及製品賣拂代金延納ニ關スル件

●農商務省令第二十八號　大正十年九月十二日

國有林野又ハ其ノ產物若ハ製品ノ賣拂代金ハ一口五百圓以上ナル場合ニ限リ國債ヲ擔保トシテ提供セシメ一年以內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得但シ公共團體ニ限リ擔保ヲ免除スルコトヲ得

公共團體又ハ社寺ニ對シテハ前項ノ賣拂代金ハ一口三百圓以上トシ其ノ期間ハ林野ニ在リテハ三年以內、產物又ハ製品ニ在リテハ二年以內、樹木散生地又ハ無立木地ニ對シ【農

商務大臣ノ定ムル所ニ依リ造林ヲ爲スモノニ在リテハ五年以内ト爲スコトヲ得

附　則

本令ハ大正十年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

○森林收入未納金延納許可方

明治三六年第八號

●農商務省令第二十八號　明治三十八年十二月十五日

改正　大正七年第四六號、一〇年第一四號

森林收入未納金ニシテ一時ニ徵收シ難キ場合ニ限リ不動産又ハ國債ヲ擔保トシテ提供セシメ年賦月賦其ノ他ノ延納ヲ許可スルコトヲ得

附　則（大正十年五月三日農商務省令第十四號）

本令ハ大正十年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行前提供シタル國債以外ノ有價證券ハ本令ノ規定ニ拘ラス仍其ノ效力ヲ有ス

○製鐵所製品賣拂代金延納ニ關スル件

●農商務省令第二號　大正十一年二月三日

製鐵所製品ノ賣拂代金ハ主生產物ニ在リテハ一口五百圓以上、副產物ニ在リテハ一口百圓以上ナル場合ニ限リ國債ヲ擔保トシテ提供セシメ其ノ擔保提供額ヲ限度トシテ六箇月以内ノ延納ヲ許可スルコトヲ得但シ公共團體及製鐵所長官ニ於テ信用確實ト認ムル者ニ對シテハ擔保ノ提供ヲ免除スルコトヲ得

附　則

本令ハ大正十年九月一日ヨリ之ヲ施行ス

○物件賣拂代金延納規則

●朝鮮總督府令第一號　大正十一年一月九日公布　同年一月十九日官報揭載

改正　大正一二年第一〇號、一五年第七五號、昭和二年第四一號、第五五號、三年第二五號、五年第一〇一號、六年第三號

第一條　朝鮮總督府及其ノ所屬官署ニ於テ物件賣拂代金ノ延納ヲ許可スル場合及其ノ延納期間ハ左ノ各號ニ依ル

一　度量衡器、教科書、鹽、試驗ノ爲醸造スル酒類、痲藥類竝ニ刑務所製作品中煉瓦、紙、織物、漆器、綿及綿製品ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金三百圓以上ナルトキハ六月以内、百圓以上三百圓未滿ナルトキハ三月以内之ヲ許可ス（朝鮮官報昭和五年一二月第一〇一號ヲ以テ改正）

二　無煙炭、煉炭、森林產物、木材及製品ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金一千圓以上ナルトキハ一年以内、五百圓以上一千圓未滿ナルトキハ六月以内之ヲ

許可ス

三　煙草ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金輸出ニ供スル煙草ニシテ三千圓以上ナルトキハ六月以内、其ノ他ニ在リテハ五百圓以上ナルトキニ限リ四月以内之ヲ許可ス但シ江原道、平安南道、平安北道、咸鏡南道及咸鏡北道ニ於ケル僻遠ノ地方ニ限リ特ニ六月以内之ヲ許可スルコトヲ得（朝鮮官報昭和二年四月第四一號六年二月第三號ヲ以テ改正）

四　人參製品ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金三百圓以上ナルトキニ限リ三月以内之ヲ許可ス（朝鮮官報大正一五年一〇月第七五號ヲ以テ改正）

五　林野ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣却代金三千圓以上ナルトキハ二年以内之ヲ許可ス（朝鮮官報昭和二年六月第五五號ヲ以テ追加）

六　血淸及豫防液類ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金百圓以上ナルトキハ三月以内之ヲ許可ス（朝鮮官報昭和三年五月第二五號ヲ以テ追加）

七　專賣局工場ヨリ生ズル副生產物其ノ他不用品ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金百圓以上ナルトキハ二月以内之ヲ許可ス（朝鮮官報昭和五年一二月第一〇一號ヲ以テ追加）

第二條　延納ノ許可ヲ受クル者ニハ擔保物トシテ延納スヘキ賣拂代金ト同額以上ノ國債證券ヲ提供セシムルモノトス但シ分割引渡ヲ約シタル物件ノ賣拂ニ付テハ其ノ引渡物件ノ代金ト同額以上ヲ引渡ノ都度提供セシムルコトヲ得

第三條　代金延納ヲ許可シタル物件ノ引渡ハ其ノ擔保物提供ノ後之ヲ爲スモノトス

第七章　收入、支出及出納官吏

第四條　常時第一條各號ニ揭クル物件ノ賣拂ヲ受クル者代金納付ノ擔保物ヲ豫メ提供シ置クトキハ之ニ對シ其ノ擔保物ノ價額ニ達スル迄延納ヲ許可スルコトヲ得

第五條　擔保物タル國債證券ハ當該官署ニ之ヲ提供スヘシ但シ提供者之ヲ供託シ其ノ供託受領證ヲ提出スルコトヲ得

第六條　林野、森林產物、木材及製品ノ賣拂ヲ受クル公共團體ニ對シテハ擔保物ノ提供ヲ免除スルコトアルヘシ（朝鮮官報昭和二年六月第五五號ヲ以テ改正）

附　則

明治四十四年朝鮮總督府令第百四十七號物品賣拂代金延納規則ハ之ヲ廢止ス

附　則（昭和六年二月九日朝鮮總督府令第三號）

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

從前ノ規定ニ依リ延納ヲ許可シタル代金ニシテ本令施行ノ際現ニ納入期日内ニ在リテ未ダ納入ニ至ラザルモノニ付テハ其ノ期日ヨリ更ニ一月以内ノ延納ヲ許可スルコトヲ得

○物件賣拂代金延納ニ關スル件

●臺灣總督府令第百五十五號　大正十年十月一日公布　同年十月二十四日官報揭載

改正　大正一一年第一四三號、昭和二年第九號、四年第一二號

第一條　大正十年勅令第三百七十四號ニ依リ延納ヲ許可スルハ左ノ物件賣拂代金ニシテ第一號乃至第三號ニ在リテハ一口五百圓以上、第四號ニ在リテハ一口二百圓以上ナ

ル場合ニ限ル（臺灣府報昭和二年二月第九號ヲ以テ改正）

一　樟腦、樟腦油、樟腦副產物、煙草、阿片煙膏、粗製モルヒネ、酒及酒糟（臺灣府報昭和四年二月第一二號ヲ以テ改正）

二　度量衡器

三　國有林野產物及其ノ製品

四　食鹽（臺灣府報昭和二年二月第九號ヲ以テ追加）

第二條　延納期限ハ煙草、酒、酒糟及本島內ニ於テ消費スル食鹽ニ在リテハ四月內其ノ他ニ在リテハ六月內トス但シ當分ノ內國有林野產物及其ノ製品ニ限リ一年內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得（臺灣府報昭和二年二月第九號、四年二月第一二號ヲ以テ改正）

第三條　國有林野產物及其ノ製品賣拂代金ニシテ左ノ各號ノ一ニ該ルトキハ其ノ擔保ヲ免除スルコトヲ得

一　公共團體ニ賣拂フトキ

二　法人ニ賣拂フ場合ニ於テハ信用確實ニシテ延納金ノ總額カ其ノ拂込資本金額ノ二分ノ一ヲ超エサルトキ

三　個人ニ賣拂フ場合ニ於テハ信用確實ニシテ延納金ノ總額カ其ノ資產ノ二分ノ一ヲ超エサルトキ

附　則

本令ハ大正十年九月一日ヨリ之ヲ適用ス

從前ノ規定ニ依リ延納ヲ許可シタルモノハ其ノ期間滿了ノ日マテ仍其ノ效力ヲ有ス

○樺太廳ニ屬スル生產物賣拂代金延納ニ關スル件

●樺太廳令第四十五號　大正十年十一月十一日公布　同年十一月二十九日官報揭載

改正　大正一二年第一六號

樺太廳ニ屬スル鑛產物、水產物及林產物ノ賣拂代金ハ一口五百圓以上ナル場合ニ限リ國債ヲ擔保トシテ提供セシメ一年內ノ延納ヲ許可スルコトヲ得但シ左ノ場合ニ限リ擔保ヲ免除スルコトヲ得

一　公共團體ニ賣拂フトキ

二　樺太內ニ本店ヲ有シ資本金二百萬圓以上ヲ有スル法人又ハ樺太內ニ本店ヲ有セサルモ資本金千萬圓以上ヲ有スル法人ニ賣拂フトキ

三　樺太內ニ住所ヲ有シ資產五十萬圓以上ヲ有スル者又ハ樺太內ニ住所ヲ有セサルモ資產二百五十萬圓以上ヲ有スル者ニ賣拂フトキ

附　則

本令ハ大正十年九月一日ヨリ之ヲ適用ス

○物件賣拂代金延納規則

●南洋廳令第十號　大正十二年四月一日公布　同十三年二月二十日官報揭載

第一條　南洋廳及所屬官署ニ於テ物件賣拂代金ノ延納ヲ許可スル場合及其ノ延納期間ハ左ノ各號ニ依ル

一　林產物ヲ賣拂フ場合ニ於テハ一口ノ賣拂代金三百圓以上ナルトキハ三月以內千圓以上ナルトキハ一年以內之ヲ許可ス

八條第二項ノ規定ニ依リ國庫以外ノ經濟ニ納付スヘキ金額ハ每年四月十日及十月十日迄ニ其ノ前六月分ヲ當該經濟ニ交付スヘシ

第十六條　府縣其ノ他國庫以外ノ經濟ヨリ恩給ヲ給スルモ俸給ヲ給セサル公務員ニ恩給ヲ給スル經濟ニ對シ恩給法第十八條第三項ノ規定ニ依リ國庫ヨリ交付スル金額ハ當該經濟カ恩給法第十八條第二項ノ規定ニ依リ納金ヲ收入シタル年度ノ翌翌年度ニ於テ之ヲ交付スルモノトス

第十七條　本令施行ニ關シ必要ナル規定ハ其ノ收入支出ニ關スルモノニ付テハ大藏大臣、其ノ他ノ事項ニ關スルモノニ付テハ內閣總理大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス

一　官吏遺族扶助法納金收入規則（明治二十三年七月十四日勅令第百二十五號）

一　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法納金收入規則（明治二十五年一月十二日勅令第五號）

一　明治四十五年勅令第七十一號（朝鮮ニ於ケル學校職員ニシテ國庫ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケサル文官判任以上ノ者ノ國庫納金ノ收入ニ關スル件）

本令施行前內閣總理大臣以外ノ官廳カ裁定シタル國庫支辨ノ年金タル恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニシテ本令施行ノ際現ニ其ノ權利ノ存續スルモノニ付テハ當該裁定官廳ハ遲滯ナク裁定ノ要項ヲ內閣恩給局長ニ通知スヘシ

第九條ノ規定ハ前項ノ恩給、退隱料、遺族扶助料其ノ他之ニ準スヘキモノニ付之ヲ準用ス

○政府ト私人トノ債務ノ相殺アリタル場合ニ於ケル歲入徵收官ノ事務取扱方

●大藏省訓令第十五號　大正十一年四月一日

政府ト私人トノ債務ノ相殺アリタルトキハ其ノ相殺額ニ付テハ歲入徵收官ハ納入告知書（支出官納）ヲ支出官ニ送付スヘシ

前項ノ場合ニ於テ政府ノ收納スヘキ金額ニシテ相殺額ニ超過スルトキハ其ノ超過額ニ對シテハ一般歲入徵收ノ例ニ依リ納入告知書ヲ納入ニ交付シ納入ノ手續ヲ爲サシムヘシ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

明治三十四年大藏省訓令第二十六號（政府ト私人トノ債務相殺金額取扱順序）ハ之ヲ廢止ス

○國債償還費途ノ趣旨ニ依ル國民獻金收入方ノ件

●大藏省訓令第十一號　昭和四年十月二十九日

國債償還ノ費途ニ充ツル趣旨ヲ以テ國民ヨリ獻金スルモノアルトキハ當省主管トシテ收入スヘシ

學　某　何　奬

寄附者ノ付シタル條件：元金及利子トモ學生ノ貸費、給費、賞與又ハ圖書機械購入費ニ充ツルコト
但使用ヲ要セサルトキハ便宜證券ヲ購入シ其利子ヲ同樣ノ目的ニ使用ノコト

年月日		摘要	受ノ部 元受高	受ノ部 返納金	受ノ部 計
			圓	圓	圓
40年 4	1	何某奬學寄附金何學校ヨリ受領	100,000		100,000
	5	學生誰某ニ貸費トシテ仕拂フ			
	10	何々書一部ヲ購入ス			
	20	學生何某ニ貸費トシテ仕拂フ			
	28	何銀行ヨリ何月ヨリ何月マテノ本寄附金ノ預金利子ヲ受取ル	10,000		10,000
	30	元學生何某ヨリ貸費ヲ返納ス		10,000	
		同上　利子		5,000	15,000
		四月分合計	110,000	15,000	125,000
5	5	學生誰某ニ貸費トシテ仕拂フ			
	11	元學生何某ヨリ貸費ヲ返納ス		20,000	
		同上　利子		10,000	30,000
	21	何某ヨリ何々債券ヲ購入ス			
	26	學生何某ニ貸費トシテ仕拂フ			
	28	同上何誰外三人ニ貸與トシテ仕拂フ			
	30	元學生何某貸費返納未濟額ヲ皆納ス		70,000	
		同上　利子		25,000	95,000
		五月分計	0	125,000	125,000
		累計	110,000	140,000	250,000
6	2	學生某何々法研究ニ付其費用ニ充ツル爲給與			
	10	學生誰本年試驗最優等ニ付賞品購入費トシテ給與			
	15	何々債券本期分利子受取ル	3,000		3,000
		六月分計	3,000	0	3,000
		累計	113,000	140,000	253,000
7	2	學生某死去ニ付貸費返納免除トナル			
		七月分計	0	0	0
		累計	113,000	140,000	253,000

○郵便官署ヲシテ歳入金ノ受入及歳出金ノ繰替拂渡ニ關スル事務ヲ取扱ハシムルノ件

●勅令第六號　大正四年一月二十八日
改正　大正一一年第六六號

郵便官署ハ各官廳ノ徵收スル歳入金ノ受入及日本銀行ノ本店、支店又ハ代理店ノ所在地外ニ於テ支拂ヲ要スル歳出金ノ繰替拂渡ニ關スル事務ヲ取扱フコトヲ得其ノ範圍及取扱ニ關スル規程ハ遞信大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

附　則

本令ハ大正四年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

○郵便官署ヲシテ歳入金ノ受入及歳出金ノ繰替拂ヲ取扱ハシムル件ニ關スル規程

●大藏省令第一號　大正四年一月二十八日
改正　大正四年第一九號、一〇年第二三號、一一年第二二號、昭和六年第一九號

第一條　大正四年勅令第六號ニ依リ郵便官署ヲシテ取扱ハシムルコトヲ得ル歳入金ノ受入及歳出金ノ繰替拂ハ左ニ揭クルモノニ限ル

一　稅務署ノ直接徵收スル國稅金

二　北海道廳、府縣、稅務署、稅務監督局ノ收納スル國庫ノ諸收入金

三　收入官吏カ日本銀行（本店、支店又ハ代理店ヲ謂フ以下同シ）ニ拂込ムヘキ前二號ノ收入金

三ノ二　專賣官署ノ收入官吏カ日本銀行ニ拂込ムヘキ煙草專賣ニ關スル收入金（昭和六年六月第一九號ヲ以テ追加）

四　市（區）町村カ日本銀行ニ送付スヘキ國稅金

五　日本銀行所在地外ニ於テ債主ニ支拂ヲ要スル歳出金

第二條　歳入徵收官（分掌官ヲ含ム以下同シ）ハ其ノ在勤廳所在地ノ道廳府縣管內ニ在ル納人ニ對シ前條第一號及第二號ノ國稅

金又ハ諸收入金ヲ徵收セムトスルトキハ納人ニ對シ第一號書式ノ納稅告知書又ハ第二號書式ノ納入告知書ヲ發スルコトヲ得但シ歳入徵收官ニ於テ必要アリト認ムルトキハ郵便局ヲ特ニ指定スルコトヲ得

納人カ前項ノ道廳府縣管外ニ在ルトキハ其ノ所在地又ハ最寄ノ郵便局ヲ指定スヘシ但シ歳入徵收官ニ於テ必要アリト認ムルトキハ他ノ郵便局ヲ指定スルコトヲ得

歳入徵收官在勤廳所在地ノ道廳府縣管內ニ在ル納人ニシテ當該道廳府縣管外ノ郵便局ニ歳入金ヲ納付セムトスルトキハ前項ヲ準用ス

第三條　國稅滯納者ニ對シテ督促狀ヲ發スル場合ニ於テハ第三號及第四號書式ノ納付書ヲ督促狀ニ添附スヘシ但シ收稅官吏ノ納稅告知書ヲ發シタル稅金ニ付テハ第三號書式ノ納付書ヲ添附スルコトヲ要セス

第四條　納人前二條ノ納稅告知書、納入告知書又ハ納付書ヲ受ケタルトキハ現金ニ納稅告知書、納入告知書又ハ納付書ヲ添ヘ指定ノ場所ニ納付スヘシ

第五條　收入官吏カ領收シタル收入金ハ第五號書式ノ拂込書ニ依リ所屬歳入徵收官在勤廳所在地ノ道廳府縣管內ニ在ル便宜ノ郵便局ニ拂込ムコトヲ得但シ專賣官署ノ收入官吏カ領收シタル收入金ハ其ノ在勤廳所在地ノ道廳府縣管內ニ在ル便宜ノ郵便局ニ拂込ムコトヲ得（昭和六年六月第一九號ヲ以テ改正）

前項ノ場合ニ於テハ出納官吏事務規程第十八條乃至第二十條ノ規定ニ拘ハラス其ノ領收シタル金額ハ每日之ヲ取纏メ翌日限之ヲ拂込ムヘシ

第六條　市（區）町村ニ對シ稅務署ノ發付スル納額通知書ニ指定スヘキ國稅金ノ送付場所ニ付テハ第二條ノ規定ヲ準用ス

市（區）町村ハ其ノ徵收シタル國稅金ニ第六號書式ノ送付書ヲ添ヘ前項指定ノ場所ニ送付スヘシ

第七條　郵便局ニ於テ納人又ハ市（區）町村ヨリ領收シタル國稅金又ハ諸收入金ニ付テハ歳入徵收官ハ取纏郵便局ヨリ送付スル領收濟通知書ニ依リ徵收簿ニ收入濟額ヲ登記スヘシ

第八條　收入官吏ハ第五條ニ依リ郵便局ニ拂込タル金額ハ日本銀行ニ拂込タル金額ト區別シテ現金拂込仕譯書ヲ作成シ歳入徵收官ニ報告スヘシ

第九條　歳入徵收官ハ前條ノ報告ニ依リ徵收報告書現金拂込仕譯欄ニ發記シ郵便局出納官吏ノ取扱ヒタル現金振替拂込仕譯ニ付テハ前月迄拂込未濟及差引翌月ヘ越高ヲ收入官吏ノ現金拂込仕譯中各相當欄ノ次ニ外書登記スヘシ

第十條　日本銀行ハ取纏郵便局出納官吏ヨリ第七號書式ノ各廳歳入金振替拂込書ニ歳入金振替證券ヲ添ヘ拂込ヲ受ケタルトキハ歳入ニ受入ノ手續ヲ爲スヘシ

日本銀行ハ前項ノ振替證券ニ依リ日本銀行本店ニ振替廻送ノ計算ヲ爲シ振替證券ハ之ヲ日本銀行本店ニ送付スヘシ

第十一條　日本銀行本店ハ前條歳入金振替證券ヲ貯金局出納官吏ニ提出シ該證券金額ニ相當スル小切手ノ交付ヲ受

ケ日本銀行ヨリ振替廻送受入ノ計算ヲ爲スヘシ

第十一條ノ二　支出官ハ日本銀行所在地外ニ於テ債主ニ對シ其ノ所在地又ハ最寄ノ郵便局ヲシテ現金ノ支拂ヲ爲サシムルコトヲ得朝鮮、臺灣、樺太、關東州、滿洲、青島及天津ニ在ル支出官（以下單ニ朝鮮等ノ支出官ト謂フ）內地ノ債主ニ支拂ヲ爲ス場合亦同シ

第十二條　支出官前條ノ規定ニ依リ支拂ヲ爲サシメムトスルトキハ其ノ振出ス小切手ノ裏面ニ受取人ノ住所、氏名及何地郵便局ニ於テ支拂ヲ要スル旨ヲ記載シ之ヲ其ノ小切手ノ支拂店ニ送付シ第八號書式ノ郵便局扱歲出金支拂通知書ヲ債主ニ送付スヘシ但シ朝鮮等ノ支出官ニ在リテハ該通知書中ノ取纏郵便局ニハ遞信大臣ノ指定スル郵便局ヲ記載シ欄外餘白ニ「特扱」ノ印ヲ押捺スルモノトス

第十三條　日本銀行前條ノ小切手ヲ受ケタルトキハ第九號書式ノ各廳歲出金繰替拂案內書ヲ作成シ之ヲ指定ノ拂渡郵便局ニ送付スヘシ但シ朝鮮、臺灣、樺太、關東州、滿洲、青島及天津ニ在ル日本銀行（以下單ニ朝鮮等ニ在ル日本銀行ト謂フ）ハ該繰替拂案內書ノ送付ト同時ニ適宜ノ通知書ヲ日本銀行本店ニ送付スヘシ

第十四條　日本銀行ハ取纏郵便局ヨリ各郵便局ニ於ケル繰替拂渡濟ノ郵便局扱歲出金支拂通知書竝日計表正本ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ調査シ歲出金ノ計算及日本銀行本店ヨリ振替廻送ノ計算ヲ爲シ之ニ相當スル振替拂證書ヲ作成シ取纏郵便局ニ送付スヘシ

前項ノ郵便局扱歲出金支拂通知書ニシテ第十二條但書ノ規定ニ依ルモノナルトキハ日本銀行本店ハ之ヲ朝鮮等ニ在ル日本銀行ニ送付スヘシ

第十四條ノ二　日本銀行國庫金取扱規程第三十三條及第四十條ノ規定ハ前二條ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十五條　日本銀行本店ハ貯金局出納官吏ヨリ第十四條振替拂證書ニ預託金拂込書ヲ添ヘ振替拂込ノ請求ヲ受ケタルトキハ之カ振替ノ計算ヲ爲シ歲出ヲ取扱ヒタル日本銀行ニ對シ振替廻送拂出ノ計算ヲ爲スヘシ

第十六條　朝鮮等ニ在ル日本銀行第十四條第二項ノ規定ニ依リ送付ヲ受ケタル郵便局扱歲出金支拂通知書ハ之ヲ調査シテ前條ノ手續ヲ爲シ日本銀行本店トノ間ニ於ケル振替受拂ノ手續ヲ爲スヘシ

第十七條　本令ニ定ムルモノヲ除クノ外支出官ノ郵便局ヲシテ現金ノ支拂ヲ爲サシムル場合ノ取扱手續ニ付テハ支出官事務規程第九條乃至第十二條、第十四條、第十五條、第十七條及第二十九條乃至第三十六條ノ規定ヲ準用ス

附　則

本令ハ大正四年一月勅令第六號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（大正十一年三月二十九日大藏省令第二十一號）

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

支出官事務規程第四十條及第四十一條ノ規定ハ本令施行前其ノ支拂ヲ了セサル歲出金仕拂通知書ノ支拂ニ付之ヲ準用

現金拂込書

第　何　號	何　年　度
大藏省主管	歲入徵收官官　氏　名
一金　何　程	取扱廳名
「何廳主任收入官吏　官　氏　名　印」 「又ハ何廳主任收入官吏所屬分任收入官吏　官　氏　名　印」	
何年何月何日	
領收日附印	

領收濟通知書

第　何　號	何　年　度
大藏省主管	歲入徵收官官　氏　名
取扱廳名	拂込人
一金　何　程	何廳主任收入官吏又ハ分任收入官吏　官　氏　名
「何郵便局出納官吏又ハ何郵便局出納官吏所屬出納員　官　氏　名　印」	
取纏郵便局	
領收日附印	

領　收　證　書

第　何　號	何　年　度		
大藏省主管	取扱廳名	拂込人	歲入徵收官官氏名
			何廳主任收入官吏又ハ分任收入官吏 官氏名

一金何程

「何郵便局出納官吏又ハ何郵便局出納官吏所屬出納員 官氏名 ㊞」

領收日附印

備考

一　拂込傳票領收濟通知書領收證書用紙ノ金額年度及歲入徵收官拂込人官氏名取纏郵便局名等ハ總テ收入官吏ニ於テ記入スルモノトス

二　用紙ハ下方ノ一邊ヲ著色（青）スルモノトス

三　專賣官署ノ收入官吏ノ分ニ付テハ各片金額ノ下ニ專賣局作業收入ト記入シ領收濟通知書ニ取纏郵便局ヲ記入スルノ外其ノ下ニ拂込郵便局ヲ記入スルモノトス（昭和六年六月第一、九號ヲ以テ追加）

○郵便官署ニ於ケル各廳歲入金及歲出金取扱規則

●遞信省令第八號　大正四年一月二十八日

改正　大正七年第三五號、九年第九八號、一二年第一六號、昭和三年第六四號、六年第一六號

第一條　大正四年勅令第六號ニ依リ郵便官署ニ於テ取扱フ歲入金ノ受入及歲出金ノ繰替拂渡ハ左ニ揭クルモノニ限ル

一　稅務官署ノ直接徵收スル國稅金

二　北海道、府縣及稅務官署ノ收納スル國庫ノ諸收入金

三　收入官吏カ日本銀行（本店、支店又ハ代理店ヲ謂フ以下同シ）ニ送付スヘキ前二號ノ收入金

三ノ二　專賣官署ノ收入官吏カ日本銀行ニ送付スヘキ煙草專賣ニ關スル收入金（昭和六年六月第一六號ヲ以テ追加）

四　市區町村カ日本銀行ニ送付スヘキ國稅金

五　日本銀行所在地外ニ於テ債主ニ支拂ヲ要スル歲出金

第二條　前條第一號及第二號ノ國稅金及諸收入金ヲ國庫ニ納付セムトスル者ハ歲入ヲ徵收スル官吏ニ於テ其ノ納付場所ヲ特ニ限定シタル場合ヲ除クノ外其ノ歲入ヲ徵收スル官吏ノ在勤廳ト同一ノ道府縣內ニ在ル任意ノ郵便局ニ就キ之カ納付ヲ爲スコトヲ得

納入前項ノ納付ヲ爲サムトスルトキハ歲入ヲ徵收スル官吏ノ發シタル令書ニ現金ヲ添ヘ郵便局ニ差出シ其ノ領收證書ヲ受取ルヘシ

第三條　市區町村又ハ收入官吏其ノ領收シタル歲入金ヲ日本銀行ニ送付セムトスルトキハ前條ノ例ニ依リ送付書又ハ拂込書ニ現金ヲ添ヘ郵便局ニ差出シ其ノ領收證書ヲ受取ヘシ但シ專賣官署ノ收入官吏ハ其ノ在勤廳ト同一ノ道廳府縣內ニ在ル任意ノ郵便局ニ就キ拂込ヲ爲スコトヲ得（昭和六年六月第一六號ヲ以テ改正）

第四條　郵便局ニ於テ前二條ニ依リ現金ヲ受入レタルトキハ其ノ通知書ヲ取纏郵便局ニ送付スヘシ

取纏郵便局ニ於テハ受入郵便局ヨリ送付ニ係ル通知書ヲ取纏メ之ニ日計表ヲ附シ當該歲入ヲ徵收スル官吏ニ送付シ且別記書式ニ依リ受入金額ニ相當スル歲入金振替證券ヲ發行シ之ヲ取扱店タル日本銀行ニ送付シ受入金拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第五條　前條ノ振替證券ニ對シテハ日本銀行本店ノ請求ニ依リ貯金局ニ於テ其ノ振替計理ヲ爲スヘシ

第六條　日本銀行所在地外ニ於テ支拂ヲ受クヘキ債主歲出金ノ拂渡ヲ受ケムトスルトキハ支出官ヨリ送付ヲ受ケタル郵便局扱歲出金支拂通知書ニ受領年月日及住所氏名ヲ記入シ受領證印ノ上之ヲ拂渡郵便局ニ差出スヘシ（昭和六年六號ヲ以テ改正）

郵便局ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ其ノ支拂通知書ヲ日本銀行ヨリ送付ニ係ル各廳歲出金繰替拂案內書ニ

對照シタル上之カ拂渡ヲ爲スヘシ

第七條　前條ニ依リ郵便局ニ於テ歲出金ノ拂渡ヲ爲シタルトキハ其ノ支拂通知書ヲ取纏郵便局ニ送付スヘシ

取纏郵便局ニ於テハ拂渡郵便局ヨリ送付ニ係ル支拂通知書ヲ取纏メ之ニ日計表ヲ附シ當該日本銀行ニ送付シ之ニ對スル代リ金振替拂證書ヲ受取ルヘシ

貯金局ニ於テハ前項ノ代リ金振替拂證書ニ依リ日本銀行本店ヨリ其ノ代リ金ノ振替受入ヲ爲スヘシ

第八條　郵便局扱歲出金支拂通知書發行ノ日ヨリ六十日以內ニ債主ヨリ拂渡ノ請求ナキトキハ郵便局ハ繰替拂案內書ヲ所屬日本銀行ニ送付スヘシ

前項ノ期間經過後ニ於テ債主ヨリ拂渡ノ請求アルモ拂渡郵便局ハ當該日本銀行ヨリ繰替拂案內書ノ再送ヲ受クルニアラサレハ之カ拂渡ヲ爲サス

第九條　債主ニ於テ郵便局扱歲出金支拂通知書ヲ亡失シタルトキハ金額、番號、所屬年度、小切手ヲ當テラレタル日本銀行名、拂渡郵便局名、支拂通知書ヲ發行シタル官廳名ヲ記載シタル屆書ヲ拂渡郵便局ニ差出スヘシ

拂渡郵便局ニ於テ前項ノ屆書ヲ受ケタルトキハ之ヲ當該日本銀行ニ廻付スヘシ

第十條　債主ニ於テ支出官ヨリ再發行ニ係ル郵便局扱歲出金支拂通知書ノ送付ヲ受ケタル場合ノ拂渡ニ付テハ第六條ノ規定ヲ準用ス（昭和三年一二月第六四號ヲ以テ改正）

附　則

本令ハ大正四年三月一日ヨリ之ヲ施行ス

附　則（大正十一年三月二十九日遞信省令第十六號）

本令ハ大正十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

從前調製ニ係ル歲入金振替證券ノ用紙ハ當分ノ內之ヲ訂正使用スヘシ（別記）

號　第　券　證　替　振　金　入　歲

年度所屬	大正　年度									
歲入徵收官在勤廳名										
振替拂込銀行名	日本銀行（何）店									
日數	所屬月計算	月分								
金額	十	萬	千	百	十	圓	十	錢	厘	

上記ノ通本日歲入徵收官ヘ受入通知ヲ濟ニ付本日本銀行ニ於テ貯金局ニ該金額爲替引換ニ振替拂込相成度候也

附記　郵便局長ノ印ヲ要ス（六四號ヲ以テ改正）

日本銀行

殿

郵便局長氏名印

第二節　隨意契約

○政府ニ於テ物品ノ販賣ヲ問屋業者ニ委託スルコトヲ得ル場合ニ關スル件

●勅令第二百九十九號　大正十二年六月七日

政府ニ於テ物品ヲ販賣スルトキハ左ノ場合ニ限リ問屋業者ニ其ノ販賣ヲ委託スルコトヲ得

一　輸出ノ目的ヲ以テ物品ヲ販賣スルトキ

二　專賣品又ハ其ノ副產物ヲ販賣スルトキ

三　林產物又ハ鑛產物ヲ販賣スルトキ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正二年勅令第二百八十號（臘虎及膃肭獸ノ獸皮賣却隨意契約ノ件）ハ之ヲ廢止ス

○陸軍ニ於ケル豫備馬ノ無償貸渡及無償付與ノ件

●勅令第四百十五號　大正十年九月二十八日

陸軍ニ於ケル豫備馬ヲ飼養管理セシムル爲貸渡ス場合ニ於テハ其ノ貸渡ハ無償ニテ之ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ馬ノ貸渡ヲ受ケタル者陸軍大臣ノ定ムル條件ニ從ヒ其ノ指定スル期間其ノ馬ヲ飼養管理シタルトキハ其ノ者ニ對シ無償ニテ之ヲ付與スルコトヲ得

本令ノ施行ニ關シ必要ナル事項ハ陸軍大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○種牡牛、種牡馬及種緬羊竝種緬羊ノ果實讓與ノ件

●陸　前　本　本

●勅令第一號　大正十四年一月十二日

種牡牛、種牡馬若ハ種緬羊ノ無償貸付ヲ受ケタル者又ハ種緬羊ノ飼育ノ委託ヲ受ケタル者【農商務大臣】ノ定ムル期間其ノ定ムル條件ニ從ヒ種牡牛、種牡馬又ハ種緬羊ヲ飼育管理シタルトキハ【農商務大臣】ハ其ノ者ニ對シ之ヲ讓與スルコトヲ得

【農商務大臣】ハ飼育ノ委託ヲ爲シタル種緬羊ノ果實ヲ其ノ委託ヲ受ケタル者ニ對シ條件ヲ附シ讓與スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

大正六年勅令第二百三十三號（種緬羊ノ賣買及貸渡隨意契約竝無償付與ノ件）ハ之ヲ廢止ス

○各省大臣ニ於テ一般競爭ヲ不利ト認メ指名競爭又ハ隨意契約ニ依リタル場合會計檢査院ニ對スル通知事項ニ關スル件

●大正十一年五月一日送第七三二號（會計檢査院長ヨリ各省大臣宛照會）

賣買貸借請負其ノ他ノ契約ニシテ一般競爭ニ付スルヲ不利ト認メ會計法第三十一條第二項ヲ適用セラレタル場合ニ於ケル會計規則第百十二條及第百十九條ニ基ク御通知ニハ左記各項ヲ記載相成候樣致度此段及照會候也

記

一　契約ノ目的、其ノ數量及金額竝豫定價格

二　政府ノ契約擔任者、歳出又ハ歳入科目

三　契約者及指名者ノ氏名、資力、經歷、營業場所

四　入札及契約年月日竝入札金額

五　一般競爭ニ付スルヲ不利トスル事由

記載例

1　閣議決定第一項第一號及第二號ノ場合ニハ不當競爭ヲ爲スノ虞アリト認メタル事實

2　同第三號ノ場合ニハ構造又ハ品質ノ特種ナル點及檢査ノ困難ナル事實

3　同第四號ノ場合ニハ契約違背ニ因リ政府ノ事業ニ著シキ支障ヲ來スノ虞アル事實

4　決定第二項第一號ノ場合ニハ前契約事項トノ關聯程度及之ヲ分割履行セシムルヲ不利トスル事實

5　同第二號ノ場合ニハ調査シタル時價

6　同第三號ノ場合ニハ所要總數量及時價竝價格ヲ騰貴セシムルノ虞アリト認メタル事實

7　同第四號ノ場合ニハ契約ノ機會ヲ失シ又ハ著シク不利ト爲ルヘキ虞アリト認メタル事實

8　同第五號ノ場合ニハ指名競爭ニ付スルヲ不利トスル特別ノ事由

9　決定第三項ノ場合ニハ一般競爭ニ付スルヲ不利ト認ムヘキ特種ノ事由

第九章　俸給及諸給與

第一節　俸給

○高等官官等俸給令

●勅令第百三十四號　明治四十三年三月二十八日

改正　明治四三年第二〇八號　中略　昭和六年第九九號

第一條　親任式ヲ以テ敍任スル官ヲ除クノ外高等官ヲ分テ九等トス親任式ヲ以テ敍任スル官及一等官二等官ヲ勅任官トシ三等官乃至九等官ヲ奏任官トス

第二條　奏任官ノ任免及敍等ハ內閣總理大臣之ヲ奏薦シ其ノ各省及各省所屬ノ官廳ニ屬スルモノハ內閣總理大臣ヲ經由シテ主任大臣之ヲ奏薦ス

第三條　高等官ノ官等ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表第一表ニ依ル

官制上他ノ官ニ在ル者ヲ以テ兼任セシムル官ニシテ別ニ官等ヲ定メサルモノハ本官ノ官等ニ依ル

第四條　初メテ高等文官ニ任セラルル者ノ官等ハ六等以下トス

高等文官ニシテ退官シタル者再ヒ高等文官ニ任セラルル場合ニ於テハ其ノ官等ハ前官ノ官等以下トス但シ前官官等在職年數二年ヲ超エタル者ハ前官ノ官等ニ一等ヲ進ムルコトヲ得

前官ノ官等七等以下ナルトキハ前項ノ規定ニ拘ラス陞シテ六等官ニ至ルコトヲ得

第五條　高等文官ノ官等ハ別ニ進級ノ例ヲ定メタルモノ及七等以下ノモノヲ除キ在職二年ヲ超ユルニ非サレハ陞敍スルコトヲ得ス

陸海軍武官ヲ其ノ部內ノ文官ニ任用シタル場合ニ於テハ武官在職ノ年數ハ之ヲ前項ノ在職年數ニ通算ス

第六條　親任式ヲ以テ敍任スル官、內閣書記官長、特命全權公使及辨理公使ニ任セラルル場合ニ於テハ前二條ノ規定ヲ、文官任用令第一條【第四項】ノ規定ニ依リ勅任文官ニ任用セラルル場合ニ於テハ第四條ノ規定ヲ適用セス

第七條　親任式ヲ以テ敍任スル文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外左ノ如シ（昭和六年五月第九九號ヲ以テ改正）

內閣總理大臣	年俸　九千六百圓
各省大臣、朝鮮總督	年俸　六千八百圓
樞密院議長、特命全權大使、判事、檢事、臺灣總督、關東長官、會計檢査院長、行政裁判所長官	年俸　六千六百圓
樞密院副議長、朝鮮總督府政務總監	年俸　六千二百圓
樞密顧問官	年俸　五千八百圓

第八條　勅任文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外左ノ如シ（以下略ス）

第九條　勅任文官親任式ヲ以テ敍任スル文官ヲ除クニシテ五年以上其ノ官ノ最高俸ヲ受ケテ在職シ功績顯著ナル者ニハ特ニ六百圓以內ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得（昭和六年五月第九九號ヲ以テ改正）

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ勅任文官親任式ヲ以テ敍任ノ在職年數ニシテ現官ノ最高俸額以上ノ俸給ヲ受ケタル年數ハ之ヲ現官ノ最高俸ヲ受ケタル在職年數ニ通算ス

前項ノ規定ニ依リ在職年數ヲ通算シ五年以上ニ及フ者ヲ勅任文官ニ任スル際ハ特ニ第一項ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

第九條ノ二　高等官二等ヲ最高官等トスル勅任文官ニシテ三年以上（各省參與官ニ在リテハ一年以上）高等官二等ニ在職シ功績顯著ナル者ハ特ニ高等官一等ニ陞敍スルコトヲ得

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ高等官一等又ハ高等官二等ヲ最高官等トスル勅任文官ノ高等官二等以上ノ在職年數ハ之ヲ現官ノ高等官二等ノ在職年數ニ通算ス

前官高等官一等ノ勅任文官ニ在リタル者ヲ高等官二等ヲ最高官等トスル勅任文官ニ任スル場合ニ於テハ特ニ高等官一等ニ敍スルコトヲ得

第十條　神宮皇學館教授、陸軍大學校及海軍大學校以外ノ陸軍及海軍諸學校教官タル陸軍教授又ハ海軍教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ各一人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得（昭和四年七月第二二號ヲ以テ改正）

高等師範學校教授又ハ文部省直轄諸學校教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ通シテ六十人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得但シ各校二人ヲ超ユルコトヲ得ス（昭和四年四月第四九號ヲ以テ改正）

北海道帝國大學豫科、附屬土木專門部、附屬水產專門部教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ各科ヲ通シテ三人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得

官立大學豫科教授又ハ官立大學附屬專門部教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ通シテ六人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得

高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得（昭和四年四月第四（第五項昭和四年四月第四六號ヲ以テ削除）

京城帝國大學豫科教授又ハ朝鮮總督府專門學校教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ京城帝國大學豫科ニ在リテハ一人、朝鮮總督府專門學校ニ在リテハ各校一人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得（昭和五年一一月第二〇九號ヲ以テ改正）

臺北帝國大學附屬農林專門部教授又ハ臺灣總督府諸學校教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ通シテ二人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得（昭和二年一一月第三一七號ヲ以テ追加三年三月第五二號ヲ以テ改正）

旅順工科大學豫科教授ニシテ五年以上高等官三等ニ在リ功績アル者ハ一人ヲ限リ高等官二等ニ陞敍スルコトヲ得

第十一條　各廳ニ於テ勅任技師ヲ置クコトヲ要スルモノハ官制ニ於テ之ヲ定ム

第十二條　奏任文官ノ俸給ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表第二表各號ノ一ニ依ル

第十三條　別表第二表第一號ニ依ル官ノ官等ハ高等官三等乃至七等、同第二號ニ依ルモノハ高等官四等乃至八等、同第三號ニ依ルモノハ高等官五等以下トス

第十四條　別表第二表第一號ニ依ル諸官左ノ如シ（以下略ス）

第十五條　別表第二表第二號ニ依ル諸官左ノ如シ（以下略ス）

第十六條　別表第二表第三號ニ依ル諸官左ノ如シ（以下略ス）

第十七條　在外公館職員タル高等文官ノ年俸ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表第三表ニ依ル

大使館一等書記官、公使館一等書記官、大使館商務書記官、公使館商務書記官、奏任官タル總領事、領事又ハ貿易事務官ニシテ五年以上年俸四千五十圓ヲ受ケテ在職シ功績顯著ナル者ニハ特ニ六百圓以內ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得（昭和六年五月第九號ヲ以テ改正）

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ高等文官ノ在職年數ニシテ年俸四千五十圓以上ノ俸給ヲ受ケタル年數ハ之ヲ現官ノ年俸四千五十圓ヲ受ケタル在職年數ニ通算ス（昭和六年五月第九號ヲ以テ改正）

前項ノ規定ニ依リ在職年數ヲ通算シ五年以上ニ及フ者ヲ第二項ニ揭クル官ニ任スル際ハ特ニ第二項ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

大使館理事官、公使館理事官又ハ副領事ニシテ三年以上高等官五等ニ在リ功績顯著ナル者ハ一等ヲ陞敍スルコトヲ得

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ高等文官ノ高等官五等以上ノ在職年數ハ之ヲ前項ニ規定スル在職年數ニ通算ス

第二十條ノ規定ハ前項ノ規定ノ適用ニ付之ヲ準用ス

第五項ノ規定ニ依リ一等ヲ陞敍セラレタル大使館理事官、公使館理事官又ハ副領事ニハ年俸三千四百圓迄ヲ給スルコトヲ得（昭和六年五月第九號ヲ以テ改正）

第十八條　前數條ノ規定ニ依ルモノヲ除クノ外高等文官ノ年俸ハ別表第四表又ハ第五表ニ依ル但シ別段ノ定アルモノハ此ノ限ニ在ラス

第十九條　別表第二表第一號乃至第三號又ハ別表第五表ニ依ル奏任文官ニシテ五年以上各其ノ官ノ一級俸ヲ受ケテ在職シ功績顯著ナル者ニハ特ニ六百圓以內ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得（昭和六年五月第九號ヲ以テ改正）

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ高等文官ノ在職年數ニシテ現官ノ一級俸額以上ノ俸給ヲ受ケタル年數ハ之ヲ現官ノ一級俸ヲ受ケタル在職年數ニ通算ス

前項ノ規定ニ依リ在職年數ヲ通算シ五年以上ニ及フ者ヲ奏任文官ニ任スル際ハ特ニ第一項ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得

第二十條　高等官四等又ハ高等官五等ヲ最高官等トスル奏任文官ヲ除ク）ニシテ三年以上各其ノ官ノ最高官等ニ在職シ功績顯著ナル者ハ特ニ一等ヲ陞敍スルコトヲ得

前項ノ規定ノ適用ニ付テハ高等文官ノ高等官四等以上ノ在職年數ハ之ヲ高等官四等ヲ最高官等トスル現官ノ最高官等ノ在職年數ニ、高等官五等以上ノ在職年數ハ之ヲ高等官五等ヲ最高官等トスル現官ノ最高官等ノ在職年數ニ通算ス

第四條ノ規定ノ適用ヲ受ケサル文官他ノ文官ト爲ル場合ニ於テ前項ノ規定ノ適用ニ付テハ明治三十六年勅令第二百八十五號第三條ノ規定ニ依リ敍シ得ル官等ニ依ル

第二十一條　第九條ノ二第二項、第十七條第六項及前條第二項ノ規定ニ依リ在職年數ヲ通算シテ官等ヲ陞敍スル場合ニ於テハ第五條第一項ノ規定ノ適用ヲ妨ケス

第二十一條ノ二　前官第二十條第一項ノ規定ニ依リ高等官

第十九條　別表第二表第一號乃至第三號又ハ別表第五表ニ

三等ノ奏任文官ニ在リタル者ヲ高等官四等ヲ最高官等トスル奏任文官ニ任スル場合ニ於テハ特ニ高等官三等ニ、前官第十七條第五項又ハ第二十條第一項ノ規定ニ依リ高等官四等ノ奏任文官ニ在リタル者ヲ高等官五等ヲ最高官等トスル奏任文官ニ任スル場合ニ於テハ特ニ高等官四等ニ敍スルコトヲ得

第二十二條　陸海軍武官ノ俸給ニ關シテハ別ニ定ムル所ニ依ル

現役武官ニシテ高等文官タル者其ノ武官トシテ受クヘキ俸給額カ文官トシテ受クヘキ俸給額ヨリ多キトキハ武官ノ俸給額ヲ其ノ所屬廳ニ於テ給スルコトヲ得

第二十二條ノ二　豫備判事又ハ豫備檢事ヲ命セラレタル判事、檢事、朝鮮總督府判事及朝鮮總督府檢事ノ俸給ハ十一級以下トス

第二十三條　高等文官死亡シタルトキハ在職最終年俸三分ノ一ノ額ニ相當スル死亡賜金ヲ其ノ遺族ニ給ス

前項遺族ト稱スルハ配偶者、子、父母、孫、祖父母及兄弟姉妹ニシテ同一戸籍内ニ在ル者ヲ謂フ

第一項ノ死亡賜金ヲ受クヘキ遺族ノ順位ハ前項ニ揭ケタル順序ニ依リ同順位内ニ在リテハ家督相續人ハ其ノ他ノ者ニ、男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ

第二項ノ遺族ナキ場合ニ於テハ實家ニ在ル實父母、家督相續人、戸主ノ順位ニ依リ第一項ニ定ムル金額ノ二分ノ一ヲ給スルコトヲ得（昭和四年五月第一二三號ヲ以テ追加）

終身官ニ付テハ其ノ在職中死亡シタル場合ニ限リ前四項ノ規定ヲ適用ス（昭和四年五月第一二三號ヲ以テ改正）

第二十四條　年俸ハ十二分シテ毎月之ヲ支給ス

第二十五條　俸給ハ新任增俸減俸トモ總テ發令ノ翌日ヨリ計算ス但シ廢官又ハ廢廳ニ因ル退官者即日他官ニ任セラルルトキハ發令ノ當日ヨリ計算ス

休職又ハ待命ヲ命セラレ年俸全額ヲ給セサル場合ハ減俸ト看做シ前項ノ規定ヲ適用ス

第二十六條　俸給令ノ改正ニ因リ新ニ給スヘキ俸給ハ改正規定施行ノ日ヨリ之ヲ計算ス

第二十七條　廢官退官退職及死亡ノトキハ年俸ヲ月割計算トシ當月分ノ全額ヲ給ス

第二十八條　休職廢官退官ノ者事務引繼殘務調理ノ爲特ニ命ヲ受ケ事務ニ從事スル場合ニ於テハ其ノ間仍從前ノ年俸ヲ給ス

第二十九條　病氣ノ爲執務セサルコト九十日ヲ超ユル者及私事ノ故障ニ依リ執務セサルコト三十日ヲ超ユル者ハ俸給ノ半額ヲ減ス但シ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ服忌ヲ受クル者及特旨ニ由リ賜暇休養スル者ハ此ノ限ニ在ラス

第三十條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附　則

本令ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス（以下略ス）

附　則（大正九年八月十八日勅令第二百五十七號）

附　則（昭和四年四月一日勅令第四十六號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ文部省直轄諸學校ノ教授ニシテ官立大學附屬專門部又ハ高等師範學校ノ教授ニ任セラレタル者ノ文部省直轄諸學校ノ教授トシテノ高等官三等ノ在職ハ第十條第二項又ハ第四項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ官立大學附屬專門部又ハ高等師範學校ノ教授トシテノ高等官三等ノ在職ト看做ス

本令施行ノ際現ニ文部省直轄諸學校ノ教授ニシテ高等官二等ニ在ル者ヲ官立大學附屬專門部又ハ高等師範學校ノ教授ニ任ズル場合ニ於テハ之ヲ高等官二等ニ敍スルコトヲ得

附　則（昭和六年二月二十四日勅令第十二號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際癩療養所職員制ニ依ル醫長ニシテ地方待遇職員令ニ依ル奏任官待遇職員ノ一級俸以上ノ俸給ヲ受ケ五年以上在職シ功績顯著ニシテ現ニ特別俸ヲ受クル者ニ對シ國立癩療養所醫官ノ俸給ヲ給スル場合ニ於テハ特ニ六百圓以内ノ年功加俸ヲ給スルコトヲ得但シ第十九條第一項ノ規定ニ依リ年功加俸ヲ給スル場合ニ於テハ之ト合シテ六百圓ヲ超ユルコトヲ得ズ（昭和六年五月第九九號附則ヲ以テ改正）

附　則（昭和六年五月二十七日勅令第九十九號）

本令ハ昭和六年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

昭和六年勅令第十二號附則第二項中「七百圓」ヲ「六百圓」ニ改ム

本令施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年額千二百圓以上ノ俸給ヲ受クル者ハ本令ニ依リ之ニ該當スル俸給（級俸ノ區分アルモノニ付テハ當該順位ノ級俸）ヲ受ケ年額千百圓又ハ千圓ノ俸給ヲ受クル者ハ定額ノ改正ニ拘ラズ從前ノ俸給ヲ受ク

本令施行ノ際現ニ本令ニ定ムル定額ニ對當セザル俸給ヲ受クル者ハ其ノ俸給年額千二百圓ヲ超ユルモノニ在リテハ從前ノ之ニ直近スル下位ノ俸給定額ノ例ニ依リ減額シタル俸給ヲ受ケ俸給年額千百三十圓ヲ超エ千二百圓ニ滿タザルモノニ在リテハ年額千百三十圓ノ俸給ヲ受ク

本令施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ年功加俸又ハ第十七條第八項ノ增加額ヲ受クル者ハ其ノ十分ノ九ノ年功加俸又ハ增加額ヲ受ク但シ所定ノ最高限ヲ超ユルコトヲ得ズ

前二項ノ規定ニ依リ計算スル俸給金額圓位未滿ハ之ヲ圓位ニ滿タシム

第九條第二項、第十七條第二項第三項及第十九條第二項ノ規定ハ本令施行前ノ在職ニ付テハ從前ノ規定ニ定ムル俸給額ヲ基準トシテ之ヲ適用ス

本令施行ノ際現ニ從前ノ規定ニ依リ俸給（年功加俸ヲ含ム）ヲ受クル判事ニ付テハ其ノ意ニ反シテ現ニ受クル額ヲ減ズルコトナシ

（第一表略ス）

第二表（昭和六年五月第九九號ヲ以テ改正）

奏任文官年俸表

級俸	第一號	第二號	第三號
一級	四、〇五〇圓	三、四〇〇圓	二、七七〇圓
二級	三、六六〇	三、〇五〇	二、四二〇
三級	三、四〇〇	二、七七〇	二、二一五〇
四級	三、〇五〇	二、四二〇	一、八二〇
五級	二、七七〇	二、一五〇	一、六五〇
六級	二、四二〇	一、八二〇	一、四七〇
七級	二、一一五〇	一、六五〇	一、三〇〇
八級	一、八二〇	一、四七〇	一、一三〇
九級	一、六五〇	一、三〇〇	一、〇五〇
十級	一、四七〇	一、一三〇	九七〇
十一級	一、三〇〇	一、〇五〇	九〇〇
十二級	一、一三〇		

（第三表、第四表、第五表略ス）

○判任官俸給令

●勅令第百三十五號　明治四十三年三月二十八日

改正　明治四三年第三七八號　中略　昭和六年第一〇〇號

第一條　判任官ノ月俸ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外別表ニ依ル

第二條　陸海軍准士官及下士ハ判任トシ其ノ月俸ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第三條　判任文官ハ每級在職一年以上ニ至ラサレハ增給スルコトヲ得ス但シ六級俸以下ノ者ハ此ノ限ニ在ラス

第四條　判任文官ニシテ一級俸ヲ受ケ五年ヲ超エ事務練熟優等ナル者ハ特ニ百八十圓迄ヲ給スルコトヲ得（昭和六年五月第一〇〇號ヲ以テ改正）

第五條　判任文官ノ俸給ハ月俸七十五圓未滿ノ者ニ限リ級俸ニ拘ラス適宜ノ金額ヲ定メ之ヲ支給スルコトヲ得但シ各所定ノ最低俸給額ヲ下ルコトヲ得ス

第六條　各廳技手ハ判任トシ各廳事務ノ繁閑ニ依リ別表最低額以下ヲ給スルコトヲ得

第七條　警視廳、北海道廳、府縣及監獄判任官竝稅務監督局屬、稅務署屬、專賣局書記及朝鮮總督府航路標識看守ニハ別表最低額以下二十圓迄ノ月俸ヲ給スルコトヲ得但シ港吏、港務醫官補、港務獸醫官補、港務藥劑手及府縣通譯ハ此ノ限ニ在ラス

道廳及府縣視學ノ月俸ハ別表八級俸以上トス

第八條　削除（大正一五年八月第二七四號ヲ以テ削除）

第九條　各廳警部補ノ月俸ハ四十圓以上八十五圓以下トス

第十條　左ニ揭クル者ノ月俸ハ二十五圓以上八十五圓以下トス（大正一五年八月第二七四號ヲ以テ改正）

各廳稅關監吏

各廳稅務吏（大正一五年八月第二七四號ヲ以テ追加）（昭和四年七月第二四七號ヲ以テ改正）

各廳森林主事

北海道廳河川監守

第十一條　左ニ揭クル者ノ月俸ハ二十圓以上八十五圓以下トス

貯金局書記補

簡易保險局書記補

遞信局書記補

各廳通信書記補

各廳遞信書記補

臺灣總督府交通主事

第十二條　前三條ノ判任文官最上俸給ヲ受ケ三年ヲ超エ事務練熟優等ナル者ハ特ニ月額十圓以內ヲ加給スルコトヲ得（大正一五年八月第二七四號ヲ以テ改正）

第十三條　判任官死亡シタルトキハ在職最終月俸四月分ノ額ニ相當スル死亡賜金ヲ其ノ遺族ニ給ス

前項遺族ト稱スルハ配遇者、子、父母、孫、祖父母及兄弟姉妹ニシテ同一戶籍內ニ在ル者ヲ謂フ

第一項ノ死亡賜金ヲ受クヘキ遺族ノ順位ハ前項ニ揭ケタル順序ニ依リ同順位內ニ在リテハ家督相續人ハ其ノ他ノ者ニ、男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ

第二項ノ遺族ナキ場合ニ於テハ實家ニ在ル實父母、家督相續人、戶主ノ順位ニ依リ第一項ニ定ムル金額ノ二分ノ一ヲ給スルコトヲ得（昭和四年五月第一二四號ヲ以テ追加）

第十四條　月俸ハ每月下旬之ヲ支給ス

第九章　俸給及諸給與

前項ノ外俸給ノ支給ニ關シテハ高等官官等俸給令ノ例ニ依ル

第十五條　俸給支給ニ關スル細則ハ大藏大臣之ヲ定ム

附　則（大正九年八月十八日勅令第二百五十八號）

本令ハ大正九年八月分ヨリ之ヲ適用ス

大正九年勅令第二百五十七號附則第二項乃至第六項及第八項ノ規定ハ從前ノ規定ニ依リ俸給ヲ受クル者ニ付之ヲ準用ス

從前ノ規定ニ依ル五級俸以上ノ各級ニ於テ經過シタル在職年數ハ之ヲ改正俸給ノ五級俸以上各級ニ於ケル在職年數ト看做ス

從前ノ規定ニ依ル五級俸以上ヲ受クル者第二項ノ規定ニ依リ改正級俸ニ相當セサル俸給ヲ受クルトキハ從前ノ級俸ト同等ノ改正級俸ヲ受クルモノト看做ス

前項ノ規定ハ五級俸以上ニ於テ級俸ニ相當セサル俸給ヲ受クル者ノ級俸ニ付之ヲ準用ス

第八條乃至第十一條ニ揭クル判任文官ノ從前ノ規定ニ依ル最上級俸ヲ受ケタル在職年數ハ之ヲ改正俸給ノ最上級俸ヲ受ケタル在職年數ト看做ス

判任官俸給令附則ヲ削ル

明治二十四年勅令第八十三號判任官俸給令ノ例ニ依リ五級俸以上ノ俸給ヲ受クル地方稅支辨ニ屬スル判任文官ノ級俸ノ對等ニ付テハ前數項ノ規定ニ依ラス左表ノ區分ニ依ル但シ文武判任官等級令ノ適用ニ付テハ仍從前ノ等級ヲ保有ス

現行俸給	改正俸給
特別俸	一級俸
一級俸	二級俸
二級俸	四級俸
三級俸	五級俸
四級俸	六級俸
五級俸	
六級俸	

附　則（昭和六年五月二十七日勅令第百號）

本令ハ昭和六年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際現ニ左表上欄ノ俸給ヲ受クル者ハ各其ノ相當下欄ノ俸給ヲ受ク

從前ノ俸給（月額）	改正俸給（月額）
二百圓以下ニシテ百六十圓ヲ超ユルモノ	現ニ受クル額ト百六十圓トノ差額ノ十分ノ九ニ百四十八圓ヲ加ヘタル額但シ百八十圓ヲ超ユルコトヲ得ズ
百六十圓	百四十八圓
百三十五圓	百二十七圓
百十五圓	百十圓
百圓	九十七圓

前項ノ規定ニ依リ計算スル俸給金額圓位未滿ハ之ヲ圓位ニ滿タシム

從前ノ規定ニ依ル五級俸以上ノ各級ニ於テ經過シタル在職年數ハ之ヲ改正俸給ノ五級俸以上各級ニ於ケル在職年數ト看做ス

從前ノ規定ニ依ル五級俸以上ヲ受クル者第二項ノ規定ニ依リ改正級俸ニ相當セザル俸給ヲ受クルトキハ之ヲ從前ノ級俸ト同等ノ改正級俸ヲ受クルモノト看做ス

（別表）（昭和六年五月第一〇〇號ヲ以テ改正）

級俸	月額
一級俸	百四十五圓
二級俸	百二十五圓
三級俸	百十圓
四級俸	九十五圓
五級俸	八十五圓
六級俸	七十五圓
七級俸	六十五圓
八級俸	五十五圓
九級俸	五十圓
十級俸	四十五圓
十一級俸	四十圓

給付ヲ受クベキトキハ第八條及第九條ノ規定ヲ準用シ打切扶助料ニ相當スル給付ヲ受クベキトキハ本令ニ依ル打切扶助料ハ之ヲ支給セズ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當內規（明治十二年二月一日太政官達第四號）、臺灣總督府雇員傭員死沒傷痍疾病手當規則（明治二十九年五月六日勅令第百八十號）及朝鮮臺灣滿洲樺太竝在外陸海軍雇員傭人死傷手當金給與規則（明治三十年五月八日勅令第百四十三號）ハ之ヲ廢止ス但シ本令施行前給與原因ノ生ジタル手當金ノ支給ニ關シテハ從前ノ例ニ依ル

明治四十年勅令第百二十七號中第五條削除

明治四十二年勅令第百五十一號、大正八年勅令第八十號、同年勅令第三百六號、同年勅令第三百六十一號、大正九年勅令第五百十號、同年勅令第五百七十四號、大正十一年勅令第六十號及大正十四年勅令第二百十四號中各第五條ヲ削ル

他ノ法令ニ於テ各廳技術工藝ノ者就業上死傷手當內規、臺灣總督府雇員傭員死沒傷痍疾病手當規則又ハ朝鮮臺灣滿洲樺太竝在外陸海軍雇員傭人死傷手當金給與規則ヲ引用シタルトキハ之ヲ本令ニ依ル

本令施行前治癒シタル職務上ノ傷痍又ハ疾病ガ本令施行前再發シ本令施行ノ際仍治癒セザルトキ又ハ本令施行後再發シタルトキハ本令ヲ適用ス但シ第五條ノ規定ノ適用ニ付テハ從前ノ規定ニ依ル扶助料及傷痍疾病手當金ハ之ヲ本令ニ依ル障害扶助料ト看做ス

（別表）

種別	金額
療治料	實費
障害扶助料 終身自用ヲ辨ズルコト能ハザルモノ	俸給月額二十四月分以上三十月分以下
障害扶助料 終身業務ニ服スルコト能ハザルモノ	俸給月額十六月分以上二十二月分以下
障害扶助料 從來ノ業務ニ服スルコト能ハザルモノ、健康ニ復スルコト能ハザルモノ又ハ女子ニシテ其ノ外貌ニ醜痕ヲ殘シタルモノ	俸給月額十月分以上十四月分以下
障害扶助料 身體ニ障害ヲ存スト雖引續キ從來ノ業務ニ服スルコトヲ得ルモノ	俸給月額二月分以上八月分以下
打切扶助料	俸給月額十六月分以上三十月分以下
遺族扶助料	俸給月額十五月分以上二十月分以下
葬祭料	俸給月額二月分

○雇員扶助令第十條第二項ノ規定ニ依リ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ南洋群島ニ在勤スル內地人タル雇員及外國ニ在勤スル雇員ニ付同條第一項ニ規定スル俸給中ヨリ控除スベキ金額ノ件

●大藏省告示第百十二號　昭和三年六月九日

一	朝鮮在勤者	俸給ノ十六分ノ六	
二	臺灣及樺太在勤者	同	十五分ノ五
三	關東州在勤者	同	十七分ノ七
四	南滿洲在勤者	同	十八分ノ八
五	南洋群島、支那及西伯利亞在勤者	同	二十分ノ十
六	歐羅巴、亞弗利加、大洋洲竝支那及西伯利亞以外ノ亞細亞在勤者	同	二十五分ノ十五
七	南北亞米利加在勤者	同	三十分ノ二十

特殊ノ事情ニ依リ前項ニ依リ難キ場合ニ於テハ其ノ都度之ヲ定ム

○傭人扶助令

●勅令第三百八十二號　大正七年十一月二十一日

改正　大正一五年第二三九號、昭和三年第一二八號、四年第二三七號

第一條　政府ハ其ノ雇傭スル職工、鑛夫其ノ他ノ傭人業務上負傷シ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタル場合ニ於テハ本令ニ依リ扶助金ヲ支給ス

扶助金ノ支給ヲ受クヘキ者法令ニ依リ同一ノ原因ニ付損害賠償ヲ受ケタルトキハ其ノ金額ハ扶助金ノ額ヨリ之ヲ控除ス

扶助金ノ支給ハ傭人ヲ解雇スルモ變更スルコトナシ

第二條　扶助金ハ療治料、休業扶助料、障害扶助料、打切扶助料、遺族扶助料及葬祭料ノ六種トシ左ノ區別ニ從ヒ別表ニ依リ之ヲ支給ス

一　療治料ハ負傷シ又ハ疾病ニ罹リ療養ヲ要スル者ニシテ官費治療ヲ受ケサルモノニ之ヲ支給ス

二　休業扶助料ハ療養ノ爲勞務ニ服スルコト能ハサルニ因リ賃金ヲ受ケサル者ニ之ヲ支給ス

三　障害扶助料ハ負傷又ハ疾病ノ治癒シタル時ニ於テ仍身體ニ障害ヲ存スル者ニ之ヲ支給ス

四　打切扶助料ハ療養開始後三年ヲ經過スルモ負傷又ハ疾病ノ治癒セサル者ニ之ヲ支給ス

五　遺族扶助料ハ死亡シタル者ノ遺族又ハ其ノ死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニ之ヲ支給ス

六　葬祭料ハ葬祭ヲ行フ遺族又ハ傭人死亡當時其ノ收入ニ依リ生計ヲ維持シタル者ニシテ葬祭ヲ行フ者ニ之ヲ支給ス葬祭ヲ行フ遺族ナキ場合ニ於テハ葬祭ヲ行フ者ニ之ヲ支給スルコトヲ得

打切扶助料ヲ支給スルトキハ以後本令ニ依ル他ノ扶助金ハ之ヲ支給セス

傭人重大ナル過失ニ因リ負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル場合ニ於テハ休業扶助料又ハ障害扶助料ヲ支給セザルコトヲ得

第三條　障害扶助料、打切扶助料、遺族扶助料又ハ葬祭料ノ額ハ別表金額ノ範圍內ニ於テ負傷、疾病又ハ死亡ノ原因、身體障害ノ輕重、勤務年限ノ長短其ノ他各種ノ事情ヲ斟酌シテ之ヲ定ム

第四條　療治料又ハ休業扶助料ハ每月一回以上之ヲ拂渡スモノトス

障害扶助料ハ傭人ノ負傷又ハ疾病ノ治癒後遲滯ナク、遺族扶助料及葬祭料ハ傭人ノ死亡後遲滯ナク之ヲ拂渡スモノトス

第五條　負傷又ハ疾病ノ再發ニ因リ身體障害ノ程度ヲ加重シタル場合ニ於テハ障害扶助料ノ額ハ新ニ之ヲ定メ既ニ支給シタル障害扶助料ノ金額ヲ控除シテ之ヲ支給ス

第六條　遺族扶助料ノ支給ヲ受クヘキ者ニ關シテハ工場法施行令第十條乃至第十二條ノ規定ヲ準用ス

第六條ノ二　傭人健康保險法（第四十八條第一項第二號ノ規定ヲ除ク）ニ依ル療養ノ給付又ハ療養費ノ支給ヲ受クベキトキハ其ノ期間療治料ハ之ヲ支給セズ、健康保險法ニ依ル傷病手當金ノ支給ヲ受クベキトキ休業扶助料ノ支給ニ付亦同ジ

傭人ノ死亡ニ關シ健康保險法ニ依リ埋葬料又ハ埋葬ニ要シタル費用ノ支給アルベキトキハ葬祭料ハ之ヲ支給セズ但シ葬祭料ノ額ガ埋葬料又ハ埋葬ニ要シタル費用ノ額ヨリ多キトキハ其ノ差額ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

健康保險法第六十二條第一項（第二號ヲ除ク）若ハ第二項、第六十四條又ハ第六十五條第二項ノ規定ニ依リ保險給付ヲ受ケザル場合ニ於テハ前二項ノ例ニ依リ療治料、休業扶助料又ハ葬祭料ハ之ヲ支給セズ

第七條　負傷又ハ疾病カ傭人ノ解雇後ニ再發シタル場合ニ於テハ扶助金ハ之ヲ支給セス

第八條　解雇後一年ヲ經過シタルトキハ本令ニ依ル扶助金ハ之ヲ請求スルコトヲ得ス但シ解雇前ニ又ハ解雇後一年內ニ請求シタル扶助又ハ健康保險法ニ依ル保險給付ノ原因タル負傷又ハ疾病ニ基キ扶助金ヲ請求スルトキハ此ノ限ニ在ラス

第九條　扶助金算出ノ標準タル賃金ノ額ヲ定ムル方法ニ關シテハ工場法施行令第十六條第一項乃至第三項ノ規定ヲ準用ス

前項ノ規定ニ依リテ金額ヲ算出スルコトヲ得サル場合ニ於テハ主務官廳之ヲ定ム

第十條　政府ヨリ給與金ヲ受クル相互救濟ヲ目的トスル組合ノ組合員タル現業傭人ニハ本令ニ依ル障害扶助料及遺族扶助料ハ之ヲ支給セズ（昭和三年六月第一二八號ヲ以テ改正）

組合員タル現業傭人組合ヨリ療治料、休業扶助料及葬祭

料ニ相當スル給付ヲ受クベキトキハ第六條ノ二及第八條ノ規定ヲ準用シ打切扶助料ニ相當スル給付ヲ受クベキトキハ本令ニ依ル打切扶助料ハ之ヲ支給セズ（昭和三年六月第一二八號ヲ以テ追加）

附　則

本令ハ大正八年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

本令施行ノ際官役職工人夫扶助令ニ依リ療治料又ハ給助料ヲ受ケ又ハ受クヘキ者ニハ本令施行ノ日ヨリ本令ニ依ル扶助金ヲ支給ス

官役職工人夫扶助令（明治四十年五月十四日勅令第百八十六號）ハ之ヲ廢止ス

附　則（大正十五年六月三十日勅令第二百三十九號）

本令ハ大正十五年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹リ官費治療ヲ受クル者又ハ從前ノ規定ニ依リ扶助金ヲ受クル者ニシテ本令施行ノ際引續キ官費治療又ハ扶助金ヲ受クル者ニ對スル扶助ハ本令施行後ハ本令ニ依ル、本令施行前ニ官費治療又ハ扶助金ヲ受ケテ治療シタル負傷又ハ疾病カ本令施行後再發シテ扶助金ヲ受クル者ニ對スル扶助ニ付亦同ジ

附　則（昭和三年六月二十八日勅令第百二十八號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

業務上負傷シ又ハ疾病ニ罹レル傭人ニシテ本令施行ノ際仍治癒セザル者ニ對スル本令施行後ノ扶助ハ本令ニ依ル

本令施行前治癒シタル業務上ノ負傷又ハ疾病ガ本令施行前再發シ本令施行ノ際仍治癒セザルトキ又ハ本令施行後再發シタルトキハ再發ノ時迄引續キ雇傭スル傭人ニ限リ本令ヲ適用ス

（別　表）

種別	金額
療治料	實費
休業扶助料	同一ノ疾病又ハ負傷及之ニ因リ發スル疾病ニ付休業百八十日以内ナルトキ	一日ニ付賃金日額百分ノ六十
	同一ノ疾病又ハ負傷及之ニ因リ發スル疾病ニ付休業百八十日ヲ超エタルトキ	一日ニ付賃金日額百分ノ四十
障害扶助料	終身自用ヲ辨ズルコト能ハザル者	賃金五百四十日分以上七百日分以下
	終身勞務ニ服スルコト能ハザル者	賃金三百六十日分以上五百日分以下
	從來ノ勞務ニ服スルコト能ハザル者、健康舊ニ復スルコト能ハザル者又ハ女子ニシテ其外貌ニ醜痕ヲ殘シタル者	賃金百八十日分以上三百日分以下
	身體ニ障害ヲ存スト雖モ引續キ從來ノ勞務ニ服スルコトヲ得ル者	賃金四十日分以上百五十日分以下
打切扶助料		賃金五百四十日分以上七百日分以下
遺族扶助料		賃金三百六十日分以上六百日分以下
葬祭料		賃金三十日分（但シ三十圓ニ滿チサルトキハ三十圓）以上四十日分以下（昭和四年七月第二三七號ヲ以テ改正）

○官吏療治料給與ノ件

●勅令第八十號　明治二十五年九月二十七日

官吏ニシテ職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケタル者ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外療治料實費ヲ以テ給與ス

但府縣ノ收入ヨリ給料ヲ受クル者ノ療治料ハ其府縣ノ負擔トス

○勤勉手當給與令

●勅令第五百四十五號　大正九年十一月二十二日

改正　大正一〇年第一八八號、一一年第二二五號、第二〇五號、第四一〇號、一二年第二八三號、一三年第九六號、第一九六號、第二七二號、第三三三號、一四年第九七號、一五年第二五二號、昭和二年第二五八號、四年第六三號、五年第二六號、第五五號

第一條　官吏、官吏ノ待遇ヲ受クル者、囑託員、雇員、傭人又ハ職工ニシテ左ニ揭クル現業ニ從事スルモノニハ勤勉手當ヲ給スルコトヲ得

一　衞生試驗所ニ於ケル現業

一ノ二　復興事務局ニ於ケル工事ノ現業（昭和五年三月第五五號ヲ以テ改正）

二　大藏省所管ノ營繕工事ノ現業

二ノ二　造幣局ニ於ケル現業

三　專賣局ニ於ケル現業

四　陸海軍ノ工事、製造、港務又ハ海軍採炭ノ現業

四ノ二　司法省所管監獄ニ於ケル現業

四ノ三　營林局署ニ於ケル現業（大正一五年七月第二五二號ヲ以テ追加）

五　製鐵所ニ於ケル現業（大正一五年七月第二五二號ヲ以テ改正）

五ノ二　遞信省ニ於ケル工事ノ現業

六　貯金局、簡易保險局、遞信局及通信官署ニ於ケル現業（大正一五年七月第二五二號ヲ以テ改正）

七　帝國鐵道ノ現業

八　朝鮮總督府及其ノ所屬官署ニ於ケル工事ノ現業

九　朝鮮總督府鐵道局、朝鮮總督府專賣局、朝鮮總督府營林署及朝鮮總督府遞信官署ニ於ケル現業（大正一五年七月第二五二號ヲ以テ改正）

九ノ二　朝鮮總督府監獄ニ於ケル現業（昭和二年八月第二五八號ヲ以テ追加）

十　臺灣總督府交通局ニ於ケル鐵道又ハ通信ノ現業（大正一五年七月第二五二號ヲ以テ改正）

十一　臺灣總督府專賣局、臺灣總督府殖產局營林所及臺灣總督府殖產局度量衡所ニ於ケル現業（昭和五年二月第二六號ヲ以テ改正）

十二　臺灣總督府及其ノ所屬官署ニ於ケル工事ノ現業

十二ノ二　臺灣總督府監獄ニ於ケル現業

十三　關東廳遞信官署ニ於ケル現業

十四　樺太廳郵便局ニ於ケル現業

十五　樺太廳ニ於ケル鐵道ノ現業

十六　南洋廳ニ於ケル通信又ハ燐礦採掘ノ現業

十六ノ二　南洋廳ニ於ケル電燈ノ現業（昭和四年四月第六三號ヲ以テ追加）

十七　北海道廳ノ築港事務所及治水事務所ニ於ケル現業

第一條ノ二　官吏、官吏ノ待遇ヲ受クル者、囑託員、雇員又ハ傭人ニシテ左ニ揭クル事務ニ從事スルモノニハ勤勉手當ヲ給スルコトヲ得

一　稅關又ハ臨時海港檢疫所ニ於ケル海港檢疫又ハ獸類

若ハ獣疫病毒汚染ノ疑アル物品ノ檢疫若ハ檢查事務及其ノ事務ヲ直接幇助スル事務

二　稅關、朝鮮總督府稅關又ハ臺灣總督府稅關ニ於ケル臨時開廳ノ場合又ハ日沒ヨリ日出迄ノ間若ハ休日ニ保稅倉庫ノ開扉若ハ貨物ノ積卸搬出入其ノ他ノ取扱ヲ爲ス場合ノ臨時事務

三　稅關又ハ臺灣總督府ニ於ケル植物ノ輸入、移入ニ關スル檢查事務及其ノ事務ヲ直接幇助スル事務（昭和五年二月第二六號ヲ以テ改正）

四　臺灣總督府ニ於ケル茶檢查事務及其ノ事務ヲ直接幇助スル事務（昭和五年二月第二六號ヲ以テ追加）

第二條　工場ニ服務スル技手ニシテ第一條ニ該當セサル者ヲシテ定時間外ニ服業セシメタル場合ニハ日額ニ依リ勤勉手當ヲ給スルコトヲ得

第三條　前二條ノ規定ニ依リ給スル手當ノ額ハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム但シ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、關東州ニ在リテハ關東長官、樺太ニ在リテハ樺太廳長官、南洋群島ニ在リテハ南洋廳長官所管大臣ヲ經由シ大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ム

第四條　法律又ハ勅令ニ依ルニ非サレハ勤勉手當ヲ給スルコトヲ得ス

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

左ノ勅令ハ之ヲ廢止ス

明治三十二年勅令第四百四十八號（定時間外服業ノ技手ニ日額給與ノ件）

明治三十六年勅令第四十八號（爲替貯金局及地方遞信官署現業員勤勉手當ノ件）

明治三十七年勅令第百五十五號（專賣局煙草製造所職員手當及年功加俸ニ關スル件）

明治三十七年勅令第百七十號（煙草製造及鹽加工ノ現業ニ從事スル判任官及雇員勤勉手當ニ關スル件）

明治三十九年勅令第三百五號（製鐵所及林區署ノ現業ニ從事スル判任官及雇員ノ勤勉手當ニ關スル件）

明治四十年勅令第八號（陸海軍ノ工事製造其他海軍港務ノ現業ニ從事スル判任官及雇員ニ勤勉手當給與ノ件）

明治四十年勅令第百六十四號（大藏省臨時建築課現業從事判任官及雇員勤勉手當給與ノ件）

明治四十一年勅令第百六號（關東都督府通信官署現業從事者ニ勤勉手當給與ノ件）

明治四十三年勅令第二百十一號（衞生試驗所現業從事判任官及雇員ノ勤勉手當ニ關スル件）

大正三年勅令第百十七號（朝鮮總督府營林廠ノ現業ニ從事スル判任官及雇員ノ手當ニ關スル件）

大正七年勅令第三百十一號（臨時議院建築局現業從事員ニ勤勉手當給與ノ件）

大正七年勅令第四百號（朝鮮總督府遞信官署現業從事員ニ勤勉手當給與ノ件）

大正九年勅令第二十五號（朝鮮總督府及其所屬官署ニ於ケル工事ノ現業ニ從事スル職員ノ勤勉手當ニ關ス

第八條　特別ノ賜金又ハ手當ノ給與ヲ發令シタル官廳ハ其ノ受給者ヨリ公債交付請求書ヲ徵シ公債發行請求書（書式第一號）ヲ所管各省ヲ經由シテ大藏省ニ提出スヘシ

前項ノ公債發行請求書ハ賜金又ハ手當ノ給與發令日附ノ異ナル毎ニ別紙トシ受給者ノ氏名別內譯書（書式第二號）及取扱官吏印鑑二通ヲ添附スヘシ

第九條　大藏省前條ノ規定ニ依リ公債發行ノ請求ヲ受ケタルトキハ公債交付通知書（書式第三號）ヲ所管各省ヲ經由シテ請求官廳ニ交付ス

第十條　前條ノ規定ニ依リ公債交付通知書ノ交付ヲ受ケタル官廳ハ其ノ受領證欄ニ式ノ如ク記入シ日本銀行ニ提出シ之ト引換ニ公債ヲ受領スヘシ

附　則

本令ハ大正十四年法律第二十四號施行ノ日ヨリ之ヲ適用ス

書式第一號

大正十四年法律第二十四號ニ依ル公債發行請求書

一　五分利公債額面　圓也

（賜金又ハ手當ノ給與發令日大正　年　月　日）

內譯

圓券　枚

圓券　枚

右發行相成度別紙公債受給者氏名別內譯書及取扱官吏印鑑二通相添ヘ此段及請求候也

大正　年　月　日

官職氏名　印

大藏大臣宛

追テ公債ハ日本銀行　店ニ於テ交付相成度

書式第二號

公債受給者氏名別內譯書

受給者氏名	退職當時ノ官職名	給與發令日附	公債額面額

書式第三號

交付通知書

整理第　號	指定日本銀行取扱店	受取人（取扱官吏ノ官職氏名ヲ記ス）
一五分利公債（　號）額面　圓	此證券　枚	

但シ大正　年　月　日渡以降利札附屬及

大正　年　月　日渡日割利札添附

右前記ノ指定取扱店ニ於テ之ヲ受取ルヘシ

大正　年　月　日

大藏省理財局長

領收書

前記ノ公債正ニ領收候也

大正　年　月　日

受取人

○「ロンドン」海軍條約實施ニ伴フ海軍職工整理ニ關スル公債發行ニ關スル法律

●法律第四十五號　昭和六年四月一日

昭和六年條約第一號千九百三十年「ロンドン」海軍條約ノ實施ニ伴フ艦艇建造ニ關スル經費ノ減少ニ基キ解傭セラレタル海軍職工ニ特別ノ手當トシテ交付スル爲政府ハ額面六百八十萬圓ヲ限リ公債ヲ發行スルコトヲ得

附　則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○「ロンドン」海軍條約ノ實施ニ伴ヒ解傭セラレタル海軍職工ニ特別手當支給ノ件

●勅令第四十四號　昭和六年四月一日

昭和六年條約第一號千九百三十年「ロンドン」海軍條約ノ實施ニ伴フ艦艇建造ニ關スル經費ノ減少ニ基キ解傭セラレタル海軍職工ニハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ定ムル所ニ從ヒ特別ノ手當ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ手當ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ從ヒ國債ヲ以テ之ヲ交付スルコトヲ得

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第四節　旅費

○內國旅費規則

●勅令第二百七十四號　明治四十三年六月十八日

改正　明治四三年第三九一號、四四年第一九二號、大正九年第一七六號、一三年第三〇六號、昭和五年第五六號

第一條　官吏公務ニ依リ本邦內ヲ旅行スルトキハ本令ニ依リ旅費ヲ支給ス

第二條　旅費ハ鐵道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料、赴任手當、移轉料及家族移轉料ノ九種トス

鐵道賃及船賃ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ從ヒ實際ノ料金ニ依リ、車馬賃日當宿泊料食卓料及移轉料ハ別表ニ掲クル所ニ從ヒ定額ニ依リ之ヲ支給ス

旅費ハ順路ニ依リ之ヲ計算ス但シ公務ノ都合ニ依リ順路ニ依リテ旅行シ難キ場合ニ於テハ其ノ現ニ經過シタル通路ニ依ル

第三條　鐵道旅行ニハ鐵道賃、水路旅行ニハ船賃、陸路旅行ニハ車馬賃ヲ支給ス

鐵道又ハ水路ニ依ラサル旅行ハ之ヲ陸路旅行トス

第四條　宿泊料ハ夜數ニ應シ日當ハ日數ニ應シテ之ヲ支給ス

水路旅行ニハ宿泊料ヲ支給セス但シ官用ノ船舶ニ依リテ旅行スル場合ニ於テ官ヨリ賄ヲ爲ササルトキハ食卓料ヲ支給ス

第九章　俸給及諸給與

第五條　旅費ノ支給ニ關シテハ旅行日數ハ出張地ニ於ケル滯在日數及途中已ムヲ得サル事由ノ爲要シタル日數ヲ除クノ外鐵道旅行ハ三百三十粁、水路旅行ハ百海里、陸路旅行ハ十二里ニ付一日ノ割合ヲ以テ通算シタル日數ヲ超過スルコトヲ得ス但シ一日未滿ノ端數ハ之ヲ一日トス（昭和五年三月第五六號ヲ以テ改正）

第六條　赴任ノ場合ニ於テハ別ニ日當五日分宿泊料五夜分ニ相當スル赴任手當、移轉料及家族移轉料ヲ支給ス

家族移轉料ハ家族一人毎ニ舊任地又ハ本人ノ居住地ヨリ新任地ニ至ル本人相當ノ鐵道賃船賃車馬賃日當宿泊料食卓料ノ全額及赴任手當ノ三分ノ二ニ該當スル金額トス但シ十二歳未滿ノ家族ニ付テハ其ノ半額トス

家族ノ數三人ヲ超過スルトキハ其ノ超過スル者ニ付支給スル家族移轉料ハ前項ノ規定ニ依ル給額ノ半額トス

赴任者赴任後一年內ニ其ノ家族故ナクシテ新任地ニ移轉セサルトキハ家族移轉料ヲ支給セス

第七條　官用ノ船、車、馬等ニ依リテ旅行スルトキハ鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給セス

第八條　陸路六里未滿、鐵道七十八粁未滿、水路三十海里未滿ノ旅行ニ在リテハ公務ノ都合ニ依リ宿泊シタル場合ヲ除クノ外其ノ支給スヘキ日當ハ定額ノ半額トス（昭和五年三月第五六號ヲ以テ改正）

一旅行ニシテ陸路、鐵道又ハ水路ニ亙ルトキハ鐵道ハ十三粁、水路ハ五海里ヲ以テ陸路一里ト看做シ前項ノ規定

ヲ準用ス（昭和五年三月第五六號ヲ以テ改正）

第九條　在勤廳所在地ノ市町村內ノ出張ニシテ遠距離ニ渉ルトキハ定額半額以內ノ日當ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ特別ノ事情アルトキハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ別ニ必要ナル費用ヲ支給スルコトヲ得

第九條ノ二　前條第二項ノ規定ハ在勤廳所在地ノ市町村內ノ出張ニシテ遠距離ニ渉ラサル場合又ハ在勤廳所在地外ノ市町村內ヲ旅行シタル場合ニ之ヲ準用ス

第十條　私事ノ爲任地又ハ居住地以外ニ滯在スル者轉任ヲ命セラレ又ハ新ニ任用セラレ滯在地ヨリ赴任スル場合ニ於テハ滯在地ヨリ新任地ニ至ル旅費額カ舊任地又ハ居住地ヨリ新任地ニ至ル旅費額ヨリ多キトキハ舊任地又ハ居住地ヨリ新任地ニ至ル旅費ヲ支給ス

前項ノ規定ハ私事ノ爲任地以外ニ滯在スル者滯在地ヨリ旅行スル場合ニ之ヲ準用ス

第十條ノ二　前條第一項ノ規定ハ舊任地又ハ本人ノ居住地以外ヨリ新任地ニ移轉スル家族ニ付支給スル家族移轉料ニ之ヲ準用ス

第十一條　新ニ任用スル爲召喚セラレタル者ニハ官吏赴任ノ例ニ準シ新官相當ノ旅費ヲ支給ス

第十二條　特別ノ事情ニ依リ定額ノ車馬賃ヲ以テ其ノ實費ヲ支辨シ難キ場合ニ於テハ實費額ヲ支給スルコトヲ得

第十三條　車馬賃ハ其ノ路程ヲ合算シテ之ヲ支給ス但シ定額ヲ異ニスルモノニ付テハ各別ニ之ヲ通算ス

通算上一里未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ切捨トス

第十四條　年度又ハ日ニ依リテ旅費ヲ區分計算スルノ必要アル場合ニ於テ其ノ區分判明ナラサルトキハ最近ノ到達地ニ著シタル日ヲ以テ其ノ路程ヲ區別シ計算ス

第十五條　旅行中退官、退職、休職又ハ非職ト爲リタル者ニハ舊任地ニ至ル前官又ハ本官相當ノ旅費ヲ支給ス但シ刑事裁判又ハ懲戒處分ニ依リテ失官シ又ハ免官セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

前項ノ場合ニ於テハ第五條ニ定メタル旅程ノ割合ヲ以テ計算シタル日數ニ依リ旅費ヲ支給ス

旅行中死亡シタル場合ニ於テハ前二項ノ規定ニ準シ旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ支給ス

第十六條　事務引繼殘務調理等ノ爲退官者ニ旅行ヲ命スルトキハ前官相當ノ旅費ヲ支給ス

第十七條　所管大臣ハ測量士木工事等ノ爲現場ヲ巡廻スル官吏又ハ常時旅行ヲ要スル官吏ニ關シ特ニ其ノ旅費額ヲ定メ月額又ハ日額ヲ以テ之ヲ支給スルコトヲ得

所管大臣ハ旅費ノ定額ヲ減シ又ハ旅費ノ全部若ハ一部ヲ支給セサルコトヲ得

第十七條ノ二　日當及宿泊料ハ同一地ニ滯在十日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ一割、三十日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ二割、六十日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ三割、百日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ四割ヲ減ス

同一地ニ滯在中一時他ノ地ニ旅行シタル場合ニ於テハ前項ノ期間ハ前後ノ日數ヲ通算シテ之ヲ定ム

○內國旅費規則別表ニ定ムル甲地方指定ノ件

●大藏省令第二十八號　大正十三年十二月十六日

改正　大正一四年第一二號、第一三號

內國旅費規則別表ニ定ムル甲地方左ノ通指定シ大正十四年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

一　道府縣廳、師團司令部、鎭守府又ハ帝國大學所在ノ市町村

二　前號ノ外左ニ揭クル市町村

北海道函館市	群馬縣高崎市
同　小樽市	栃木縣上都賀郡日光町
同　室蘭市	三重縣宇治山田市
同　釧路市	愛知縣豐橋市
同　常呂郡野付牛町	靜岡縣濱松市
京都府紀伊郡伏見町	同　沼津市
同　加佐郡新舞鶴町	山口縣下關市
同　同　中舞鶴町	福岡縣門司市
大阪府堺市	同　小倉市
神奈川縣鎌倉郡鎌倉町	同　八幡市
同　三浦郡葉山村	同　戶畑市
兵庫縣尼崎市	同　若松市
同　西宮市	同　大牟田市

三　前二號ニ定ムルモノノ外左ノ區域內ニ在ル町村

東京府南葛飾郡	同　荏原郡
同　南足立郡	神奈川縣足柄下郡
同　北豐島郡	兵庫縣武庫郡
同　豐多摩郡	

○內國旅費規則第二條ニ依ル鐵道賃及船賃

●大藏省令第十六號　大正九年五月三十一日

改正　大正一〇年第一號、昭和五年第五號

內國旅費規則第二條ニ依リ鐵道賃、船賃左ノ通相定メ大正九年六月一日ヨリ之ヲ施行ス

第一條　鐵道賃ハ左ノ區別ニ從ヒ旅客運賃（【通行稅】ヲ含ム）及急行料金ニ依リ之ヲ計算ス

一　高等官ニ在リテハ一等ノ運賃但シ一等車ノ連結ナキ線路ニ依ル旅行ニ在リテハ二等ノ運賃

二　判任官ニ在リテハ二等ノ運賃但シ特別ノ必要ニ依リ一等車ニ乘車シタル場合ニ於テハ一等ノ運賃

三　運賃ノ等級ヲ二階級ニ區分スルモノニ在リテハ高等官判任官共上級ノ運賃、其ノ等級ヲ設ケサルモノニ在リテハ其ノ乘車ニ要スル運賃

四　八十五粁以上ノ旅行ニ在リテハ普通急行料金但シ急行料金ヲ徵セサル線路ニ依リ旅行スル場合ニ於テハ

此ノ限ニ在ラス（昭和五年三月第五號ヲ以テ改正）

五　百七十粁以上特別急行列車ニ乘車シタル場合ニ於テハ特別急行料金（昭和五年三月第五號ヲ以テ改正）

六　特別ノ必要ニ依リ普通急行列車又ハ特別急行列車ニ乘車シタル場合ニ於テハ前二號ノ規定ニ拘ラス其ノ乘車ニ要スル急行料金

第二條　船賃ハ旅客運賃【通行稅】解船賃（檢疫賃、寢臺料及普通運賃ノ外別ニ食費ヲ要スル場合ニ於テハ夕食及朝食ニ對スル所定ノ料金ヲ含ム）及急行料金ニ依リ鐵道賃ノ例ニ準シ之ヲ計算ス

○大藏省所管旅費支給規則

●大藏省令第三十三號　明治四十三年七月一日

改正　明治四三年第四七號、大正九年第二七號、第四二號、一三年第三〇號、一四年第一九號、昭和五年第六號

第一條　大藏省所管經費支辨ニ屬スル內國旅費ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本規則ニ依リ之ヲ支給ス

第二條　親任官待遇及勅任官待遇ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ支給スヘキ待遇官相當ノ額ヲ支給ス

第三條　試補其ノ他奏任官待遇ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ奏任官六等以下ノ者ニ支給スヘキ額ヲ支給ス

第四條　見習其ノ他判任官待遇ノ者ニハ內國旅費規則ニ依

リ判任官六級俸以下ノ者ニ支給スヘキ額ヲ支給ス

第五條　專賣局見習員及稅務監督局見習員ニハ別表甲額ヲ支給ス

第六條　雇員ハ左ノ各號ニ依ル但シ日額ノモノハ三十日分ヲ以テ月額ト看做ス

一　給料月額百十圓以上ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ判任官五級俸以上ノ額

二　給料月額五十五圓以上百十圓未滿ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ判任官六級俸以下ノ者ニ支給スヘキ額

三　給料月額五十五圓未滿ノ者ニハ別表甲額

第七條　囑託員ハ左ノ各號ニ依ル

一　在官ノ者（退職ニアラサルモノ）ニハ其ノ官相當ノ額

二　高等官待遇及判任官待遇ノ者ニハ第二條乃至第四條ノ各相當額

三　宮內官ニハ內國旅費規則別表及大正九年大藏省令第十六號ニ照準シ各其ノ相當額

四　警察官ニハ所管大臣ノ定メタル額、地方吏員ニハ內務大臣ノ定メタル額

五　前各號ニ該當セサル者ハ其ノ常時一定ノ手當ヲ給スル者ニアリテハ其ノ手當額（年額ハ十二分ノ一、日額ハ三十日分ヲ以テ月額ト看做ス）ニ依リ、一時手當ヲ給スル者又ハ手當ヲ給セサル者ニアリテハ其ノ爵位勳功ニ依リ左ノ區別ニ從ヒテ支給ス但シ後段ノ場合爵位勳功ヲ併有スルトキハ高

キニ從フ

一　手當月額三百圓以上又ハ有爵者、正六位以上、勳五等以上及功四級以上ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ奏任官五等以上ノ額

二　手當月額百七十圓以上三百圓未滿又ハ從六位、勳六等及功五級ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ奏任官六等以下ノ者ニ支給スヘキ額

三　手當月額百十圓以上百七十圓未滿又ハ從七位以上正七位以下、勳七等及功六級ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ判任官五級俸以上ノ額

四　手當月額五十五圓以上百十圓未滿又ハ正八位以下、勳八等及功七級ノ者ニハ內國旅費規則ニ依リ判任官六級俸以下ノ者ニ支給スヘキ額

五　手當月額五十五圓未滿又ハ位、勳、功級ヲ有セサル者ニハ別表甲額

特殊ノ事情アル者ニ付テハ其ノ身分及用務ノ性質ニ依リ其ノ都度之ヲ定ム

第八條　巡視、門衛、仕部其ノ他廳內取締ノ役務ニ服スル者竝船長、機關士、水火夫長、職工長、組長及之ニ準スル者ニハ別表甲額ヲ支給ス

第九條　廷丁、給仕、小使、馭者、水夫、火夫、倉庫夫、運搬夫、車夫、馬丁、職工及其ノ他ノ傭人ニハ別表乙額ヲ支給ス但シ常傭ニアラサル職工其ノ他ノ傭人ニシテ其ノ業ニ從事シ勞銀ヲ給スル日ハ日當、宿泊料若ハ食卓料ヲ支給セス

第十條　在勤廳所在地ノ市町村內ノ出張ニシテ其ノ行程二里以上ニ涉ルトキハ定額ノ三分ノ一額ニ相當スル日當ヲ其ノ四里以上ニ涉ルトキハ定額ノ半額ニ相當スル日當ヲ支給ス

前項ノ場合ニ於テ公務ノ都合ニ依リ宿泊ヲ要シタルトキハ宿泊料ヲ支給ス

第十條ノ二　在勤廳所在地又ハ在勤廳所在地外ノ市町村內ニ於テ陸路三里鐵道三十九粁水路十五海里以外ノ地ニ出張スルトキハ內國旅費規則ニ依ル鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給スルコトヲ得（昭和五年三月第六號ヲ以テ改正）

交通不便其ノ他ノ事由ニ因リ特ニ多額ノ船車馬賃ヲ要シタルトキハ前項ノ規定ニ拘ラス其ノ實費ヲ支給スルコトヲ得

第十條ノ三　在勤廳所在地ノ市町村內ニ於テ引續キ五時間以上出張スルトキハ日當定額ノ三分ノ一ニ相當スル額ヲ引續キ八時間以上出張スルトキハ日當定額ノ半額ニ相當スル額ヲ支給スルコトヲ得

第十條ノ四　第十條又ハ第十條ノ三ニ規定スル出張ヲ爲ス者官用ノ船車馬ニ依リタルトキハ之ニ支給スヘキ旅費ノ額ハ第十條又ハ第十條ノ三ニ定ムル額ノ半額トス

第十一條　旅行ノ性質ニ依リ特ニ月額又ハ日額ヲ以テ旅費ヲ支給スル必要アルトキハ認可ヲ經ヘシ

第十二條　旅費ノ定額ヲ減シ又ハ旅費ノ全部若ハ一部ヲ支給セサル必要アルトキハ各廳長官ニ於テ適宜之ヲ定メ報

告スヘシ

第十三條　移轉料ハ各廳長官ニ於テ旅程ノ遠近、情況等ヲ斟酌シ規定ノ範圍内ニ於テ適宜相當ノ額ヲ支給スヘシ

第十三條ノ二　家族移轉料ヲ支給スル場合ニ於ケル家族トハ本人ト同一戸籍内ニアリテ同居スル親族ヲ謂フ

第十四條　旅費支給上路程ノ計算ニ付テハ鐵道ハ鐵道官廳調、水路ハ水路部調、陸路ハ最近刊行ノ郵便線路圖ニ據リ計算スヘシ

前項ニ據リ難キ場合ハ地方官廳若ハ市町村長ノ證明スル處ニ據ルヘシ

第十四條ノ二　路程ノ計算ニ付テハ郵便線路圖ニ示ス各市町村内ノ郵便局ヲ以テ其ノ起點トス若シ其ノ郵便局ニ依リ難キ場合ニ於テハ地方官廳又ハ市長村長ノ證明スル元標又ハ之ニ準スルモノヲ以テ其ノ起點トス

鐵道旅行又ハ水路旅行ノ場合ニハ前項市町村ニ於ケル起點及停車場又ハ波止場間ノ里程ハ陸路旅行ノ旅程ニ算入スル

第十五條　一日中旅費ノ支給額ヲ異ニスル場合ハ其ノ多キ額ヲ支給ス

第十六條　旅行中一時歸廳シタル場合ハ其ノ路程ハ之ヲ打切計算ス

第十七條　（削除）

第十八條　雇員其ノ他内國旅費規則ニ規定ナキ者ノ旅費支給ニ關シテハ同規則ノ規定ヲ準用ス

附　則

本令ハ明治四十三年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

大藏省所管經費支辨ニ屬スル特定旅費規則、官船航行旅費規則及專賣局旅費支給規則ハ之ヲ廢止ス

【本令施行前雇員其ノ他ノ者轉勤ヲ命セラレ又ハ新ニ採用セラレタル者ニ支給スヘキ旅費ニ關シテハ仍特定旅費規則ニ依ル】

別表

旅費額

區別	鐵道賃	船賃	車馬賃一里ニ付	日當一日ニ付	宿泊料一夜ニ付	食卓料一夜ニ付	移轉料
甲額	三等定價【通行稅、解船賃及棧橋賃ヲ含ム】	三等定價【通行稅ヲ含ム】	六十錢	甲地方 二圓	甲地方 一圓八十錢	甲地方 三圓五十錢	一圓二十錢	五十圓以内
乙額			四十五錢	乙地方 一圓五十錢	乙地方 一圓三十錢	乙地方 二圓八十錢	一圓	三十五圓以内

備考

一　本表中甲地方トハ大正十三年大藏省令第二十八號ニ指定スル地域、乙地方トハ其ノ他ノ地域ヲ謂フ

二　鐵道八十五粁水路五十海里以上ノ旅行ニアリテハ急行料金ヲ支給ス但シ急行料金ヲ微セサル線路ニ依リ旅行スル場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラス（昭和五年三月第六號ヲ以テ改正）

○大藏省所管經費支辨ニ屬スル各廳員朝鮮臺灣及樺太内旅費支給規則

●大藏省令第三十五號　明治四十三年七月二十五日

改正　明治四三年第四六號、大正九年第三〇號、一三年第二九號

第一條　大藏省所管經費支辨ニ屬スル各廳判任以上ノ者及待遇官吏、囑託員、雇員以下ノ者朝鮮、臺灣又ハ樺太内ヲ旅行スルトキハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本令ニ依リ別表ノ旅費額ヲ支給ス

第二條　本令ニ依ル日當ハ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ最初到著ノ日ヨリ該地最終出發ノ前日マテ、日當以外ノモノハ朝鮮、臺灣又ハ樺太最初到著ノ地ヨリ該地最終出發ノ地ニ至ルマテヲ支給ス

第九章　俸給及諸給與

第三條　樺太ニ赴任スル者及十一月ヨリ翌年二月ニ至ル期間内ニ樺太ニ出張スル者ニハ別表支度料ノ範圍内ニ於テ各廳長官適宜之ヲ定メ支給スヘシ

第四條　朝鮮、臺灣及樺太在勤二年以上ノ者刑事裁判、懲戒處分若ハ自己ノ便宜ニ依ルニアラスシテ退官、休職又ハ解職ト爲リ三十日以内ニ前任地出發歸鄉スルトキハ内國旅費規則若ハ大藏省所管旅費支給規則ニ依ル前官、前職又ハ本官相當ノ額ヲ以テ前任地ヨリ原籍地マテノ鐵道賃、船賃、車馬賃ヲ支給ス

第五條　朝鮮、臺灣及樺太ニ在勤スル者在職中死亡シタルトキハ前條ニ準シ歸鄉旅費ニ相當スル金額ヲ遺族ニ給ス

第六條　朝鮮、臺灣及樺太在勤ノ者内地旅行中前二條ニ該當スルトキハ其ノ旅行カ公務タルト私事タルトヲ問ハス支給スヘキ金額ハ之ヲ半額トス

第七條　本令ニ規定セルモノヲ除ク外旅費支給方ニ關シテハ内國旅費規則、大正九年大藏省令第十六號及大藏省所管旅費支給規則ニ依ル

附　則

本令ハ明治四十三年七月ヨリ之ヲ施行ス

臺灣及樺太内旅費支給ニ關スル當省達ハ之ヲ廢止ス

別表

朝鮮、臺灣及樺太旅費額

區別		車馬賃一里ニ付	日當ニ付	宿泊料一夜ニ付	食卓料一夜ニ付	移轉料	赴任出張	支度料
親任官（及大藏省所管旅費支給規則ニ於テ同相當額ヲ受クル者）		二圓五十錢	甲地方 十三圓	乙地方 十二圓	甲地方 二十二圓	乙地方 十八圓	四圓	三百圓以內
勅任官（及以下同上）		二圓	九圓	八圓	十五圓	十二圓	三圓五十錢	二百五十圓以內
奏任官	五等（及以下同上）	一圓五十錢	七圓	六圓	十圓	八圓	二圓五十錢	二百圓以內
	六等（及以下同上）	一圓五十錢	六圓	五圓	九圓	七圓	二圓	百五十圓以內
判任官	五級俸（及以下同上）	一圓二十錢	四圓	三圓	七圓	五圓五十錢	二圓	百圓以內
	六級俸（及以下同上）	一圓二十錢	三圓五十錢	二圓五十錢	六圓	四圓五十錢	二圓	百圓以內
大藏省所管旅費支給規則ニ於テ甲額ヲ受クル者		九十錢	二圓五十錢	二圓	四圓五十錢	三圓五十錢	一圓二十五錢	五十圓以內
同上乙額ヲ受クル者		七十錢	二圓	一圓五十錢	三圓五十錢	二圓八十錢	一圓二十五錢	三十五圓以內

備考

甲地方トハ左ニ掲クル地域、乙地方トハ其ノ他ノ地域ヲ謂フ

一　朝鮮ニ於ケル道廳所在ノ府又ハ面

二　前號ノ外左ニ掲クル府又ハ面

京畿道仁川府　全羅南道木浦府

全羅北道群山府　慶尚南道釜山府

同馬山府　咸鏡南道元山府

咸鏡北道淸津府

三　臺灣ニ於ケル州廳所在ノ市又ハ街

四　前號ノ外左ニ掲クル街

臺北州基隆郡基隆街　平安南道鎭南浦府

同宜蘭郡宜蘭街　同羅東郡羅東街

○南洋群島關東州南滿洲旅費規則

●勅令第四百二號　大正十年九月一日

改正　大正一一年第一九〇號、昭和五年第五七號

第一章　總則

第一條　官吏公務ニ依リ南洋群島關東州南滿洲內ヲ旅行シ若ハ此等ノ地域相互間ヲ旅行シ又ハ南洋群島關東州南滿洲ト其ノ他ノ地方トノ間ヲ旅行スルトキハ本令ニ依リ旅費ヲ支給ス

勅令ノ定ムル所ニ依リ賜暇歸朝ヲ許サレタル者任地本邦間ヲ旅行スルトキハ公務ニ依リ旅行スルモノト看做ス

本令ニ於テ南洋群島ト稱スルハ帝國ニ於テ統治ノ委任ヲ受ケタル南太平洋諸島ヲ謂ヒ南滿洲ト稱スルハ支那奉天省竝吉林省ノ內第二松花江以南ノ地域及琿春、汪淸、延吉、和龍ノ四縣ヲ謂フ

第二條　旅費ハ鐵道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料、支度料、移轉料、著後手當及家族移轉料ノ十種トス

第三條　旅費ハ順路ニ依リ之ヲ計算ス但シ公務ノ都合ニ依リ順路ニ依リテ旅行シ難キ場合ニ於テハ其ノ現ニ經過シタル通路ニ依ル

第四條　年度又ハ日ニ依リテ旅費ヲ區分計算スルノ必要アル場合ニ於テ其ノ區分判明ナラサルトキハ最近ノ到達地ニ著シタル日ヲ以テ其ノ旅程ヲ區別シ計算ス

第五條　所管大臣ハ旅費ノ定額ヲ減シ又ハ旅費ノ全部若ハ一部ヲ支給セサルコトヲ得

第六條　本邦ト南洋群島關東州南滿洲トノ間ノ旅行ノ爲本邦內ヲ通過スルトキハ其ノ地域ニ於ケル旅行ニ付定メラレタル旅費ヲ支給ス但シ關東州南滿洲直通ノ汽車ニ依リ若ハ南洋群島關東州南滿洲航路ノ船舶ニ依リ本邦ヲ出發

シ又ハ本邦ニ歸著シタルトキハ當該鐵道賃、船賃及乘船港出發ノ日ヨリ又ハ歸著港ニ上陸ノ日迄ノ日當ニ付テハ此ノ限ニ在ラス

第七條　南洋群島關東州南滿洲ト外國トノ間ノ旅行ニ付テハ外國旅費規則ニ定ムル外國相互間ノ旅行ニ準シ旅費ヲ支給ス

第八條　一日中旅費ノ定額ヲ異ニスル場合ニ於テハ多キニ從ヒ之ヲ支給ス

第九條　新ニ任用スル爲召喚セラレタル者ニハ官吏ノ赴任、轉勤又ハ歸朝ノ例ニ準シ新官相當ノ旅費ヲ支給ス

第十條　私事ノ爲在勤地又ハ出張地以外ニ滯在スル者滯在地ヨリ直ニ旅行スル場合ニ於テハ滯在地ヨリ目的地ニ至ル旅費額カ在勤地又ハ出張地ヨリ目的地ニ至ル旅費額ヨリ多キトキハ在勤地又ハ出張地ヨリ目的地ニ至ル旅費ヲ支給ス

第十一條　特別ノ事情ニ因リ本令ニ依リ難キ場合ノ旅費ニ關シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シ別ニ之ヲ定ムルコトヲ得

第十二條　雇員傭人其ノ他本令ニ規定ナキ者ノ旅費ニ關シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シ本令ニ準シテ之ヲ定ム

第十三條　旅費ノ支給ヲ受クル者ニ對シテハ所管大臣大藏大臣ト協議シテ定メタルモノヲ除クノ外別ニ手當ヲ支給スルコトヲ得ス

第十四條　本令中所管大臣ノ職務ハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督、臺灣ニ在リテハ臺灣總督、關東州ニ在リテハ關東長官、樺太ニ在リテハ樺太廳長官、南洋群島ニ在リテハ南洋廳長官之ヲ行フ但シ大藏大臣ト協議ヲ要スル事項ニ關シテハ所管大臣ヲ經由スヘシ

第二章　鐵道賃、船賃及車馬賃

第十五條　鐵道旅行ニハ鐵道賃、水路旅行ニハ船賃、其ノ他ノ旅行ニハ車馬賃ヲ支給ス

第十六條　鐵道賃及船賃ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ從ヒ實際ノ料金ニ依リ、車馬賃ハ南洋群島內ノ旅行ニ付テハ實費ニ依リ、關東州、南滿洲內ノ旅行ニ付テハ別表ニ揭クル所ニ從ヒ定額ニ依リ之ヲ支給ス

第十七條　鐵道旅行又ハ水路旅行ノ場合ニ於テ別ニ急行料金又ハ寢臺料金ヲ要シタルトキハ之ヲ支給スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ寢臺料金ノ支給ヲ受クル場合ニ於ケル宿泊料ハ勅任官以上ニ在リテハ定額ノ十分ノ六、奏任官以下ニ在リテハ定額ノ十分ノ七トス

第十八條　特別ノ事情ニ因リ定額ノ車馬賃ヲ以テ其實費ヲ支辨シ難キ場合ニ於テハ實費額ヲ支給スルコトヲ得

第十九條　車馬賃ハ其ノ路程ヲ合算シテ之ヲ支給ス但シ定額ヲ異ニスルモノニ付テハ各別ニ之ヲ通算ス

通算上一里未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ切捨トス

第二十條　出張ヲ命セラレタル者ノ旅行中携帶スル私屬ノ

荷物ハ百五十瓩迄ヲ限リ其ノ運賃ヲ支給スルコトヲ得（昭和五年三月第五七號ヲ以テ改正）

第二十一條　官用ノ船、車、馬等ニ依リテ旅行スルトキハ鐵道賃、船賃又ハ車馬賃ハ之ヲ支給セス

第三章　日當、宿泊料及食卓料

第二十二條　日當、宿泊料及食卓料ハ別表ニ揭クル所ニ從ヒ定額ニ依リ之ヲ支給ス

第二十三條　日當ハ日數ニ應シ宿泊料ハ夜數ニ應シテ之ヲ支給ス

水路旅行ニハ宿泊料ヲ支給セス但シ天災其ノ他已ムヲ得サル事故ノ爲上陸宿泊ヲ要シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス食卓料ハ船賃ノ外別ニ食料ヲ要スル場合又ハ船賃ヲ要セサルモ食料ヲ要スル場合ニ於テ夜數ニ應シテ之ヲ支給ス

第二十四條　旅行日數ハ出張地ニ於ケル滯在日數及途中已ムヲ得サル事由ノ爲要シタル日數ヲ除クノ外鐵道旅行ハ三百三十粁、水路旅行ハ百海里、陸路旅行ハ十二里ニ付一日ノ割合ヲ以テ通算シタル日數ヲ超過スルコトヲ得ス但シ一日未滿ノ端數ハ一日トス（昭和五年三月第五七號ヲ以テ改正）

第二十五條　陸路六里未滿、鐵道七十八粁未滿、水路三十海里未滿ノ旅行ニ在リテハ公務ノ都合ニ依リ宿泊シタル場合ヲ除クノ外支給スヘキ日當ハ定額ノ半額トス（昭和五年三月第五七號ヲ以テ改正）

一旅行ニシテ陸路、鐵道又ハ水路ニ亙ルトキハ鐵道ハ十三粁、水路ハ五海里ヲ以テ陸路一里ト看做シ前項ノ規定

ヲ適用ス（昭和五年三月第五七號ヲ以テ改正）

第二十六條　在勤廳所在地區域內ノ出張ニシテ遠距離ニ渉ルトキハ定額ノ半額以內ノ日當ヲ支給スルコトヲ得

第二十七條　日當及宿泊料ハ同一地ニ滯在三十日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ二割、六十日ヲ超ユルトキハ其ノ超過日數ニ付定額ノ三割ヲ減ス

同一地ニ滯在中一時他ノ地ニ旅行シタル場合ニ於テハ前項ノ期間ハ前後ノ日數ヲ通算シテ之ヲ定ム

第四章　支度料、移轉料、著後手當及家族移轉料

第二十八條　支度料ハ南洋群島關東州南滿洲ニ赴任又ハ出張ヲ命セラレタル者ニ別表ニ依リ之ヲ支給ス

南洋群島關東州南滿洲又ハ其ノ他ノ外國ニ赴任又ハ出張ヲ命セラレ支度料ノ支給ヲ受ケタル者其ノ赴任又ハ出張ヲ命セラレタル日ヨリ一年內ニ再ヒ南洋群島關東州南滿洲ニ赴任又ハ出張ヲ命セラレタルトキ支給スル支度料ハ定額ノ二分ノ一ヲ超ユルコトヲ得ス但シ其ノ金額前ニ受ケタル金額ト合シテ定額ノ十五割ニ滿タサルトキハ定額ヲ超エサル範圍內ニ於テ通シテ十五割迄ヲ支給スルコトヲ妨ケス

南洋群島關東州南滿洲ニ在勤中若ハ出張中ノ者南洋群島ト關東州南滿洲トノ間ニ於テ轉勤若ハ出張ヲ命セラレ又ハ南滿洲以外ノ外國ニ在勤中若ハ出張中ノ者南洋群島關東州南滿洲ニ轉勤若ハ出張ヲ命セラレタル場合ニ於テハ前ニ受ケタル支度料ノ額新ニ轉勤若ハ出張ヲ命セラレタ

ル地方ニ付定メラレタル支度料ノ定額ニ達セサルトキニ限リ其ノ差額ノ範圍内ニ於テ支度料ヲ支給スルコトヲ得

第二十九條　移轉料及著後手當ハ左ニ揭クル者ニ之ヲ支給ス

一　南洋群島關東州南滿洲ニ赴任ヲ命セラレタル者

二　南洋群島關東州南滿洲ニ在勤中轉勤ヲ命セラレ又ハ他地方勤務ノ爲歸朝ヲ命セラレタル者

第三十條　南洋群島關東州南滿洲ニ滯在中此等ノ地域ニ在勤ヲ命セラレ又ハ新ニ任用セラレタル者ニハ移轉料及著後手當ヲ支給スルコトヲ得

第三十一條　移轉料ハ別表ニ依ル

著後手當ハ目的地ニ於ケル旅行ニ付定メラレタル日當五日分及宿泊料五夜分ニ相當スル額トス

第三十二條　家族移轉料ハ左ノ場合ニ之ヲ支給ス

一　第二十九條又ハ第三十條ニ揭クル者家族ヲ隨伴シ又ハ赴任、轉勤若ハ歸朝ノ後之ヲ呼寄スルトキ

二　賜暇歸朝ヲ許サレタル者許可ヲ受ケ妻子ヲ隨伴シ又ハ呼寄スルトキ

三　南洋群島關東州南滿洲ニ在勤中許可ヲ受ケ家族ヲ呼寄セ又ハ歸朝セシムルトキ但シ特別ノ事情アル場合ヲ除クノ外同一任地ニ付往返各一回限リトス

第三十三條　家族移轉料ハ妻ニ付テハ本人相當ノ鐵道賃、船賃、車馬賃及食卓料ノ全額竝日當、宿泊料、支度料、著後手當ノ半額トシ妻以外ノ家族ニシテ十二歲以上ノ者ニ在リテハ本人相當ノ鐵道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料及著後手當ノ半額トシ十二歲未滿ノ者ニ在リテハ更ニ其ノ半額トス

第三十四條　南洋群島關東州南滿洲ニ赴任若ハ出張ヲ命セラレタル者、同地域ニ在勤中轉勤若ハ歸朝ヲ命セラレタル者又ハ同地域ニ滯在中其ノ地域ニ在勤ヲ命セラレ若ハ新ニ任用セラレタル者其ノ出發前死亡シ又ハ命令ヲ取消サレ其ノ他旅行ノ必要ナキニ至リタルトキハ支度料及移轉料ノ全額以内ヲ支給スルコトヲ得

第三十一條　移轉料ハ別表ニ依ル

著後手當ハ目的地ニ於ケル旅行ニ付定メラレタル日當五日分及宿泊料五夜分ニ相當スル額トス

第三十二條　家族移轉料ハ左ノ場合ニ之ヲ支給ス

一　第二十九條又ハ第三十條ニ揭クル者家族ヲ隨伴シ又ハ赴任、轉勤若ハ歸朝ノ後之ヲ呼寄スルトキ

二　賜暇歸朝ヲ許サレタル者許可ヲ受ケ妻子ヲ隨伴シ又ハ呼寄スルトキ

三　南洋群島關東州南滿洲ニ在勤中許可ヲ受ケ家族ヲ呼寄セ又ハ歸朝セシムルトキ但シ特別ノ事情アル場合ヲ除クノ外同一任地ニ付往返各一回限リトス

第三十三條　家族移轉料ハ妻ニ付テハ本人相當ノ鐵道賃、船賃、車馬賃及食卓料ノ全額竝日當、宿泊料、支度料、著後手當ノ半額トシ妻以外ノ家族ニシテ十二歲以上ノ者ニ在

○恩給法施行令

●勅令第三百六十七號　大正十二年八月十七日

改正　大正一二年第五二〇號、一三年第五一號、第四〇七號、一四年第五三號、一五年第二四四號、第三〇四號、昭和二年第三六一號、三年第七三號、五年第一九號

第一條　恩給法第十條ノ規定ニ依リ恩給ノ支給ヲ受クヘキ遺族及其ノ順位ハ扶助料ヲ受クヘキ遺族及其ノ順位ニ依ル

同法第十條ノ恩給權者カ死亡ノ當時家族ナリシトキハ其ノ相續人ハ恩給權者死亡ノ當時之ト同一戸籍内ニ在リタルコトヲ要ス

第二條　恩給法第十條ノ場合ニ於テ死亡シタル恩給權者未タ恩給ノ請求ヲ爲ササリシトキハ恩給ノ支給ヲ受クヘキ遺族又ハ相續人ハ自己ノ名ヲ以テ死亡者ノ恩給ノ請求ヲ爲スコトヲ得

裁定ヲ經タル恩給ニ付テハ死亡者ノ遺族又ハ相續人ハ自己ノ名ヲ以テ其ノ恩給ノ支給ヲ受クルコトヲ得

第三條　恩給法第十二條ノ規定ニ依リ内閣恩給局長以外ノ者ニ於テ恩給ヲ受クルノ權利ヲ裁定スヘキ場合ハ左ノ區分ニ依ル

一　内地ニ於ケル公立ノ小學校、實業補習學校、幼稚園、盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事（警視廳部内ノ職員ニ在リテハ警視總監）之ヲ裁定ス

二　前號ニ揭クルモノヲ除クノ外内地ニ於ケル公立ノ學校又ハ圖書館ノ教育職員ニシテ文官ニ非サルモノノ一時恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ裁定ス

三　朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル公立ノ小學校、普通學校、公學校、實業補習學校、幼稚園、盲啞學校其ノ他ノ小學校ニ類スル各種學校ノ教育職員及準教育職員竝其ノ遺族ノ恩給ハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督（道ノ警部補、巡査及消防手竝其ノ遺族ノ恩給ハ道知事）、臺灣ニ在リテハ臺灣總督（州又ハ廳ノ警部補及巡査竝其ノ遺族ノ恩給ハ州知事又ハ廳長）、樺太ニ在リテハ樺太廳長官、關東州ニ在リテハ關東長官、南洋群島ニ在リテハ南洋廳長官之ヲ裁定ス

四　朝鮮、臺灣、樺太、關東州（南滿洲鐵道附屬地ヲ含ム以下同シ）又ハ南洋群島ニ於テ國庫ヨリ俸給ヲ受クル警察監獄職員（陸海軍ニ屬スルモノ及樺太ニ於ケル刑務所ニ屬スルモノヲ除ク）及其ノ遺族ノ恩給ハ朝鮮ニ在リテハ朝鮮總督（道ノ警部補、巡査及消防手竝其ノ遺族ノ恩給ハ道知事）、臺灣ニ在リテハ臺灣總督（州又ハ廳長）、樺太ニ在リテハ樺太廳長官、關東州ニ在リテハ關東長官、南洋群島ニ在リテハ南洋廳長官之ヲ裁定ス

五　内地ニ於テ國庫以外ノ者ヨリ俸給ヲ受クル警察監獄職員及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事（警視廳部内ノ職員ニ在リテハ警視總監）之ヲ裁定ス

六　内地ニ於テ國庫以外ノ者ヨリ俸給ヲ受クル警察監獄職員及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事之ヲ裁定ス

二　前號ニ揭クルモノヲ除クノ外内地ニ於ケル公立ノ學

恩給法第十四條第三號ニ揭クル待遇職員（國庫ヨ

リ俸給ヲ給スルモノヲ除ク）及其ノ遺族ノ恩給ハ北海道ニ在リテハ北海道廳長官、府縣ニ在リテハ府縣知事（警視廳部内ノ職員ニ在リテハ警視總監）、朝鮮ニ在リテハ道知事、臺灣ニ在リテハ州知事又ハ廳長、關東州ニ在リテハ關東長官之ヲ裁定ス（大正一五年九月第三〇四號ヲ以テ改正）

第四條　恩給法第十七條第一項ノ規定ニ依リ分擔スヘキ恩給ハ普通恩給及扶助料トシ國庫カ恩給金額ノ分擔ヲ請求スル場合ニ於テハ當該公務員ノ在職年中ニ恩給ノ負擔者ヲ異ニスヘキ二種以上ノ公務員ノ在職年ヲ含ムトキハ各在職年ノ年數ヲ其ノ各官職ノ最終ノ俸給年額（下士以下ノ軍人及之ニ相當スル準軍人ニ付テハ別表第一號表ノ金額ヲ俸給年額ト看做ス）ニ乘シタル數ニ比例シテ分擔請求額ヲ定ム

恩給法第四十五條ノ規定ニ依リテ普通恩給ヲ受クヘキ所定ノ年數ニ滿タサル在職年ノ者ニ給スル普通恩給及其ノ遺族ニ給スル扶助料ニ付テハ當該所定ノ年數ニ滿タサル年月數ハ分擔請求額計算上之ヲ當該恩給ノ負擔者ニ歸スヘキ在職年ト看做ス

分擔請求額ニ付在職年數ヲ計算スル場合ニ於テハ左ノ割合ニ依リ其ノ基礎タル在職年月數ニ加算ス

一　恩給法第六十二條第三項ノ規定ニ依リ加給スヘキ場合ニ於テハ加給セラルヘキ勤續在職年ノ一年ニ付一年

二　恩給法第六十條第三項、第六十一條第四項、第六十二條第七項、第六十三條第五項又ハ第六十四條第三項ノ規定ニ依リ外國勤續ニ因ル加給ヲ爲スヘキ場合及同法第六十二條第四項又ハ同法第六十三條第三項ノ規定ニ依リ加給ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ加給セラルヘキ勤續在職年ノ一年ニ付六月

前三項ノ規定ハ恩給法第十七條第二項乃至第四項ノ分擔請求ニ付之ヲ準用ス

第五條　恩給ノ分擔ハ支給義務額ニ依リ之ヲ爲スモノトス

第六條　左ニ掲クルモノハ國庫ヨリ俸給ヲ給セサルモ恩給法第二十條ノ規定ノ適用ニ付之ヲ文官トス

一　地方官官制第二條ニ規定スル府縣判任官

二　都市計畫地方委員會ノ職員ニシテ官吏タルモノ

三　神宮司廳又ハ神宮皇學館ノ職員ニシテ官吏タルモノ

四　朝鮮道立醫院ノ職員ニシテ官吏タルモノ

第七條　恩給法第二十一條第二項第二號ノ陸軍又ハ海軍ノ學生生徒トハ陸軍士官學校、陸軍幼年學校、陸軍戶山學校、陸軍工科學校、海軍兵學校、海軍機關學校及海軍經理學校ノ生徒、陸軍ノ士官候補生、海軍豫備生徒竝海軍豫備練習生ニシテ軍人ニ非サルモノヲ謂フ

第八條　恩給法第二十二條第二項ノ在外指定學校ハ外務大臣及文部大臣之ヲ指定ス但シ關東州ニ在リテハ關東長官之ヲ指定ス

前項ノ指定ニ關スル規程ハ外務大臣及文部大臣又ハ關東長官之ヲ定ム

第九條　恩給法第二十二條第三項ノ準教育職員トハ教授心得、助教授心得、教諭心得、助教諭心得、准訓導及判任官ノ待遇ヲ受ケサル保姆ニシテ專任教員タルモノヲ謂フ

第十條　恩給法第二十四條第三號ノ待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

一　道路管理職員制ニ依ル職員

二　地方土木職員制ニ依ル職員

三　地方產業職員制ニ依ル職員（市費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク）

四　地方測候所職員制ニ依ル職員

五　地方學校衞生職員制ニ依ル職員

六　地方社會教育職員制ニ依ル職員（大正一五年九月第三〇四號ヲ以テ追加）

七　地方社會事業職員制ニ依ル職員（大正一五年九月第三〇四號ヲ以テ追加）

八　地方建築職員制ニ依ル職員（昭和三年四月第七三號ヲ以テ追加）

八ノ二　地方警察職員制ニ依ル職員（昭和五年二月第一九號ヲ以テ追加）

九　防疫職員制ニ依ル職員

十　稅關官制第二十六條ノ規定ニ依ル職員

十一　臨時海港檢疫所官制ニ依ル職員

十二　廳府縣衞生職員制ニ依ル職員

十三　癩療養所職員制ニ依ル職員

十四　家畜防疫職員制ニ依ル職員（大正一五年九月第三〇四號以テ追加）

十五　朝鮮地方待遇職員令ニ依ル地方ノ土木、產業、衞生、社會事業又ハ測候ニ關スル事務又ハ技術ニ從事スル職員（府費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク）（昭和五年二月第一九號ヲ以テ改正）

十六　臺灣地方待遇職員令ニ依ル地方ノ土木、衞生、產業、物產檢查、社會事業又ハ社會教育ノ事務又ハ技術ニ從事スル職員（市費ヲ以テ置キタルモノヲ除ク）（昭和五年二月第一九號ヲ以テ改正）

十七　關東州地方待遇職員令ニ依ル地方ノ產業、土木、衞生、教育又ハ行政ニ關スル事務又ハ技術ニ從事スル職員（昭和五年二月第一九號ヲ以テ改正）

第十一條　恩給法第二十四條第四號ノ待遇職員トハ左ニ掲クル者ヲ謂フ

一　造幣醫、專賣醫及專賣藥劑師（昭和二年一二月第三六二號ヲ以テ追加、五年二月第一九號ヲ以テ改正）

二　陸軍ノ通譯ニシテ判任官以上ノ待遇ヲ受クルモノ

三　靖國神社附屬遊就館職員ニシテ判任官以上ノ待遇ヲ受クルモノ

四　鐵道醫

五　北海道廳事業手

六　朝鮮ニ於ケル監獄ノ藥劑師、鐵道醫及鐵道藥劑師竝臺灣ニ於ケル警察醫（大正一五年九月第三〇四號ヲ以テ改正）

七　臺灣又ハ關東州ニ於ケル檢疫員及檢疫醫員

第十二條　恩給法第三十二條第一項第一號ノ規定ニ依リ從軍加算ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ同法第四十條第二項ノ規定ニ依ルノ外左ノ各號ノ例ニ依ル

一　戰爭開始後戰地ニ到リタル者ニ付テハ戰地ニ到ルヘキ事由ノ生シタル當時所在スル地ノ屬スル地域ヲ離レタル月ヨリ加算ス

二　戰爭中戰地ヨリ歸還シタル者ニ付テハ其ノ歸還スヘキ地ノ屬スル地域ニ到著シタル月迄加算ス

前項ノ地域トハ內地、朝鮮、臺灣、樺太、關東州、南洋群島